

平成十五年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九〇八号

川柳塔



日川協加盟

No. 908

同人特集・私の一句

一月号

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9：00～17：00

土 9：00～13：00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

ふしぎなご縁

河内 天笑

あけましておめでとうございます。

今年も楽しく活気あふれた川柳塔にするため、皆様と共に歩んで参りたいと思っております。

「へえー、そんなこと実際にあるの」というような偶然や奇縁は、長い人生の間にはあるものと、私自身びっくりさせられた「奇縁」を紹介いたします。

今年の四月五日に私の二男(33歳)が、結婚します。そして、その日から副理事長の小島蘭幸氏(竹原川柳会会長)と、私共が親戚になります。

2002年の新春のある日、二男が可愛い婚約者、洋江(ひろえ)をわが家に連れて来ました。二男は私の生家の横の空地に居酒屋を建て、去年11月11日で丸九年になります。この店は大工さんの手

を借りず二男が自力でトンカチして建てたものです。見ずばらしいのですが、夜市川柳大会の打ち上げに何回か利用していたいており、薫風名誉主幹はじめ、夜市のベストテン入賞の皆さんにも親しんでもらっています。

さて、その時の会話です。

私「洋江さんのお生まれは」

洋「堺で生れ育ちました。でも父は広島出身です」

私「広島県竹原市へは、昨年春に用事があつて行きました」

洋「お義父さんはお仕事で行かれたのですか？父は竹原市の出身です」

私「竹原川柳会というのがありまして、記念川柳大会の祝辞を述べに行きました。他にももうかれこれ四、五回はお邪魔しています」

洋「竹原川柳会には祖母がお世話になっていました」

ここで私も月子もびっくり。よく聞いてみると、蘭幸氏のお母さんと、洋江の祖母が実の姉妹になるという。つまり、

二男の嫁になる洋江の父親と、蘭幸氏はいとこ同志だったのです。

(註)全日本川柳協会の『川柳人写真名鑑』(平成五年版)を繙いてみますと、ふつくらとしたそのお婆ちゃんが載っていました。小西千里さんと言ひ明治44年生れで、もう既に他界されています。もし存命ならこのご縁を喜んで下さったであろうと残念に思います。

竹原のシンボル竹も生い茂る

父の服そのまま着れる子が一人

カルガモが行列縦隊お引越し

この三句の中の「子が一人」はひょっとすると、洋江のお父さんだろうかと、想像をめぐらしました。

なお、洋江は蘭幸氏とこれも偶然同じ郵便畑で、現在岸和田市の特定郵便局に勤務しています。

万博公園迎賓館の結婚式には、蘭幸夫妻も出席して下さる予定です。元々、蘭幸川柳一家とは親しくさせていたいています。この縁が川柳塔発展のため役に立てたら嬉しいことです。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫風)

私の句

這い這いのゴールは母の丸い膝

内田美也子

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ふしぎな縁

唐津の二十年

河内天笑……(1)
仁部四郎……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

奥田みつ子選……(50)

水煙抄

東野大八……(78)

私の一句〈同人特集〉

波多野五楽庵選……(95)

麻生路郎物語(13)

政岡日枝子選……(100)

愛染帖

誹風柳多留二四篇研究 50

茴香の花

唐津の二十年

仁部四郎

昭和五十七年九月に、川柳塔唐津支部は本社理事会の承認を経て発足した。平成十四年で二十周年になる。昭和五十七年の二月に、桑原掬水、浜本久仁於、久保正敏、田口虹江、木塚素石、浜本義美、仁部四郎の七名が同人になった。新岡回天子、大坂形水、西尾菜三氏の推薦である。その七名の他に、岩崎實山下勝一、今里一竿の三氏の句が、川柳塔昭和五十七年二月号に出ている。

二月から九月までの間に波乱があったということがある。新岡回天子の虹川柳倶楽部から川柳塔唐津支部が分離したことについては、それぞれの立場、というよりほかにはないことであった。

川柳塔本誌から初めて選者として、岩本雀踊子、高杉鬼遊、大坂形水、黒川紫香、橋高薫風の諸先生をお迎えしたのは、昭和六十年の三周年大会で八十名の参会者があった。それから二十周年の今年までに、野村太茂、津、西尾菜、山本規不風、藤村メ女、河内天笑、西山幸、八木千代、林荒介、河内月子、前たもつ、高須賀金太、志田千代、永田俊子

「拝む」	安芸田泰子選	(102)
一路集「白」	神保坊太郎選	(102)
「運」	永井三津子選	(103)
初歩教室「初」	三宅保州	(104)
川柳塔唐津支部二十周年記念句会に参加して	山本義子・熊代菜月	(106)
秀句鑑賞 同人吟	西原艶子	(108)
水煙抄	出口セツ子	(114)
十二月本社句会		(110)
各地柳壇（佳句地十選／津村志華子）		(115)
柳界展望		(165)
一月各地句会案内		(166)
■編集後記	楓葉・希久子	(168)

座右の句
私の句

火だるまになろうとも橋わたるべし

（天笑）

月並みで幸せですと妻は言う

穴吹尚士

の皆さんにも選者を務めていただいた。

さて、二十周年記念句会は成功したと唐津の者は思っている。総計で五十三名の参加があり久しぶりに五十名を超えた。

橘高薫風名誉主幹、板尾岳人理事長をはじめ、関西・熊本から川柳塔のお仲間十九名の参加を得たことが特に嬉しい。佐賀番傘からも二十二名の応援があり有難いことであつた。

二十周年ということで、唐津市教育長の村井文三氏を来賓にお招きし、祝辞をいただいた。川柳への理解の深い、また唐津曳山の話も入った立派な祝辞であつた。名誉主幹のお話を感銘深く聴講したと、後日ご本人からうかがつた。

橘高薫風名誉主幹のお話は、「うがち」に重点があつたが、「うがち」はかねてより先生が力説されていることであり、川柳の本質を更めて考えるヒントになつた。

大会記念誌は二百部作成して関係各位に送付したが、この二十年のうちに他界した唐津の顔が編集の途中で思い出され、感慨深いものがある。唐津に来ていただいたお方のなかにも故人となつた方はあつて、お声や仕草が二十周年の反省会で、ひとしきり話題になつたことである。

家族や地域の御支援もあつての二十年であつた。衷心よりお礼を申しあげる次第です。川柳塔唐津支部は少しずつ歩いていきます。



河内天笑選

鳥取県 谷口次男

教典よ砂漠の国の血を止めよ

メル友と盟友似ても似つかぬね

処理場は大切なのに嫌われる

この子らは聖なる米を粗末にし

ちっばけな家には住まぬ金の神

はぐれ雲やはりお前は山頭火

和歌山市 川上大輪

禁酒禁煙体に悪い事をする

コンサート感激したり眠ったり

老犬は吠えず私をじっと見る

サンキューじゃ軽いやつぱりありがとう

ストリート一本だけで生きた父

聖書よりパン一切れがありがたい

松原市 國見蘭香

神さまが日毎ぬり足す秋のいろ

主の居ない家を護って柿熟す

リサイクルの店のぞき見る好奇心

回り寿司ひとり行く身にありがたい

車椅子のとても明るい女の子

ストレスは溜めないだろう大欠伸

青森県 西谷大吾

木枯しが父を飯場へ連れてゆく

空が地に落ちて津軽に冬が来る

老いひとりよされよされと雪を踏む

地から湧く雪は無言のうらみ節

南無南無と婆は祈りの鉦叩く

縄文の里に身を刺すしばれ雪

吹田市 岩屋美明

近松を読んで尋ねる曾根崎署

髪染めて老化を防ぐ阿呆らしさ

ぽっくり寺の前で止まった救急車

病院で傘を盗られてから元氣

国会の裏に仮面が干してある

褒められて降りてこれない鬼瓦

尼崎市 田 辺 鹿 太

喝采に照れるノーベル化学賞
翔んでいる妻へ時々水を遣る
一つずつ重荷を捨てて生き延びる
メリットは不明 毎朝水を飲む
立ち呑みの酒にも馴れた素浪人
兄弟の仲でも歌の上手下手

羽曳野市 徳 山 みつこ

望郷の涙隠して生きた葦
生き抜くと決めて覚えた朝鮮語
拉致その後重いドラマを編みつつけ
親と子のあいだ波立つ日本海
拾いあげた落ち葉ますます美しい
自分史に輝くページないままに

広島県 藤 解 静 風

亡父の目線いまでも感じるときがある
音のせぬ善意をそつと箱に入れ
煩惱無限死ぬまで迷うのか凡夫
辛抱がくずれるときのごい音
楽に死にたいなどとは欲の深いこと
ありがとう妻が言うたら泣くだろう

和歌山市 福 本 英 子

ノーベル賞雲の上から下りてきた
正装をすると背筋がしゃんとする
お隣と仲良くサンマ焼いている

ベランダの挨拶紫煙からの縁
また朝が来るから我慢出来る傷
入る墓あるとのんびりしてしまふ

米子市 澤 田 千 春

近すぎて山の気品に気がつかぬ
思い出が宝箱からこぼれだす
渦巻いた頭やすめに山を見る
熟睡し明日がはつきり見えて来た
しっかりと食べてゆるがぬ人柄に
毎日が祈りを抱いた綱渡り

米子市 政 岡 日 枝 子

原風景に魚の臭う家がある
抱き合えばみな善人の匂い持つ
人の気でどつと疲れが出る日暮れ
人間を軽く動かす計画書
訴える声が聞える遺作の絵
そのうちに私の足に来るまさか

鳥取県 下 田 茂 登 子

減る命忘れて今日も人憎む
葬儀屋が優しい言葉かけてきた
悲しさを忘れるために寺参り
占い師の言葉半分信じてる
本音など吐けないだろう拉致の人
許し合う夫婦になれば咲く命

砂川市 大橋 政良

尻もちをつき安住の地ときめる
ライバルが虹の真下を駆けてゆく
合掌に本当もある嘘もある
欠点もあるが笑った顔がいい
経をよむ自分に聞かすように誦む

黒石市 相馬 一花

絶倫の噂どなたも信じない
鬼よりも怖い顔する競馬場
念入りに祝辞にルビを振る市長
只酒の後が怖いぞ自重する
じよんからを踊れば逃げる体脂肪

弘前市 宮崎 ヒサ子

淋しい日照つても降つても空を見る
遠く近く雷鳴一夜寝もやらず
寸劇があつて味噌汁冷めている
正座して読む一冊を送られる
答え出ぬテーブルさつと片付ける

弘前市 福士 慕情

性格が良くて番犬にはなれぬ
チャンスかも雨が小降りになつてきた
公平とは言えない酒の割り勘
足腰の衰え 口が良く回る
物の無い時代にあつた義理人情

弘前市 今 愁女

雨まじりの雪から津軽冬に入る
実柘榴が熟れてわたしは冬眠に
身の丈に合うたコートも長くなる
片方のピアス覗かせ冬帽子
いそいそとショールを肩に師走風

弘前市 一戸 ツネ

誕生日まめで元気でひとり酒
やがて冬養虫ぶらり夢の中
燃えるゴミ過去の日記にさようなら
生きざまにいちやもんつける風もある
アホ アホと鴉が笑う暮しぶり

弘前市 高橋 岳水

逆転勝訴主文は神の思し召し
群れを出て群れの有難さに気付く
晩年の福祉が枯れてゆくばかり
裸木をわが自画像として描く
残高と余生をいかに釣り合わす

横浜市 保田 絹子

木枯しに急かされてする障子貼り
御尤も心に反旗翻す
口コミの噂に行く手阻まれる
新薬が効いて体力損なわれ
体験の人生観にある自信

横浜市 菊地政勝

富山市 舟渡杏花

たぶたぶの腹で従いてく三次会
長風呂を時には妻に覗かれる
絵手紙を愛の証と受け止める
嫁がせる娘に玄關の鍵持たせ
もの言わず転がっていた寒椿

東京都 播本充子

聖書からハラリと落ちて来た諭吉
見舞いから帰る 仏飯でんこ盛り
ワイシャツ売場で男の首を思い出す
わたくしの愚かも入れて封をする
炎を抱いて踊ったことは伏せておく

唐津市 宗水笑

私より少し賢い友がいい
男なら自分の事で泣かないで
本人を前に反対など出来ぬ
デパートで選る一本のさつま芋
ジャガイモが好きな男のダイエツト

富士宮市 渥美弧秀

目覚め富士見惚れて今日がスタートす
戦えぬ自衛隊士が海渡る
残り火を燃やすピアノと生活詩
父母の忌に酒が喋らす裏話
婦唱夫随二人三脚ゆるみ勝ち

国分寺市 酒井輝

亡命を分ける境を持つ門扉
老春の低温やけどしてる恋
夏の蟻冬のおそびを貯える
別件は誰にでもある立小便
あそぶ金手輕に稼ぐひつたくり

唐津市 樋口輝夫

定年の朝仕残しの夢で覚め
褒め過ぎて己れの肚を覗かれる
一つ乗り遅れて怪我の無い暮らし
思い出が嫌で聴けない歌もある
年金を当てにしない新入社

宝くじ夢は宅地を駆け巡り
バスガイド顎で数える頭かず
二次会費寝てただけで頭割り
盗むなら長女を先にしはしい
唐津供日 三月倒れの曳山を引き

熊本県 高野宵草

補聴器をはずし静かな新春にする

ここだけの話が出来る友となり

お土産の予約が溜まる旅仕度

愛憎の振れ消え去る共白髪

ビデオからわが子ひとりの運動会

熊本市 永田俊子

おみくじに縁談よろしとある卒寿

雑魚寝して心とけ合う仮の宿

カタカナ辞典片手におくれまいとする

広告の裏側を読む悪い癖

決断の鈍さを笑う跳ねつるべ

香川県 川崎ひかり

シンブルな挨拶だけど情がある

あるがまま生きよと波がくり返す

すがり付くようにズボンに草の種

生ツバはゴクリと音がするものだ

釣り人が帰り川面に跳ねる魚

香川県 清川玲子

八十路とは思えぬ足で橋渡る

皮下脂肪ついた体でまだ炎える

語り部が炎えても戦知らぬ子等

今日だけは童心になる秋祭り

北風に屋台のおでん混んでいる

香川県 神保坊太郎

輪の中で小突かれながら丸くなり

結願の寺から秋が降りてくる

錆びてても釘それなりに効いている

カマキリは有事の構えで果てている

成人になったとくぐる縄のれん

香川県 池内かおり

換気扇止まれば猫も去って行く

侮辱には断乎闘う他はなし

車から車へ足が萎えてくる

さりげなく決意を秘めている無口

口車はいはいのつてべそをかく

松山市 古手川光

スイスイと赤字の上を走ってる

子に欲しいのは雑草の逞しさ

行列の後に並ぶうまい店

データ見て私を診てはくれぬ医者

百薬の長で体調悪くする

松山市 宮尾みのり

勇み足に似て先走るボールペン

帰巢本能ひたひたひたと疲労感

日曜日パパの役目がたとある

チェックする個所しつかりと余命表

人恋しやたら煎餅などかじり

愛媛県 中居 善信

僕のあだ名はダックスフンド妙を得る
柏手へ神も笑った気もするが
車座になると碎けた顔になる
陽のあたるところへ出たがる蛙の子
嘘でしようなどと尻尾つかまれる

美祿市 安平次 弘道

コンサートの余韻二人はただ歩き
はつきりとは喋ってくれぬホームレス
ブランコに乗っているのは恋敵
手の内を読まれてからの負け戦
物わかり良いとは嫁のことらしい

宇部市 平田 実男

矢印のちよつと意地悪したくなる
頂点に立つと後に目が欲しい
帯になり襟になつて嫌われる
物差しがそれぞれ違う三世代
取りようによれば鎖になる絆

竹原市 三宅 不朽

菊の幻想はらはらと散る桜
菊に立つ母萩焼のごとく在り
妻に起され妻に叱られ今日も無事
全集が飾りと判りほつとする
眼ン玉が笑わぬ男遠慮され

竹原市 森井 菁居

ショッピングガイドに落とし穴がある
先生のいじめは握りつぶされる
きつかけはどうだつてよい夫婦仲
衝動買いその内きつとツケが来る
旅好きの僕にはわかる隠れ宿

竹原市 岩本 笑子

さよなら さよならイチヨウ潔く散るか
草の実を取つて猫と陽溜りよ
千鳥格子静かな土間があるばかり
ジャンプジャンプいつかは鳥になるつもり
酒とろり秋の次には冬が来る

竹原市 小島 蘭幸

師の句碑の上の初日の出よ祈る
不器用に一羽の鶴を折る祈り
五十五歳やがて公社化民営化
仁王さんのように黙っていることだ
柱時計と私少しずつ世に遅れ

竹原市 時広 一路

保険料掛け捨てしたい介護法
ストレスをほぐす遮断機が上がる
主役二人のドラマ演じている我が家
誘つてるようだ食前酒が甘い
リストラの無い年金よ海は風ぐ

竹原市 古谷節夫

有り難いお経唱えて年が明け
ジャンボくじ夢見る権利買っておく
法律をどんどん作り国が病む
四季の花しゅんを知らせてくれる庭
立冬へ雷さまが暴れ出す

倉敷市 小野克枝

保育器に居た子が笑う初日の出
馬鹿踊りする人生があつて良い
故郷へ流れる雲を見えています
近道ばかり探す哀しいかたつむり
野心脱ぎすてると丸い山が見え

岡山県 山本玉恵

ブライドを逆なでにして風一陣
失意の目にとび込んで来るもみじの朱
良いかげんの女でうぬばれ後遺症
ゆるくなつたゴムしめ直す老いひとり
ひとときの安らぎ貰う水の音

松江市 安食友子

温かいズーズー弁も希少価値
鼻っぱしら哀れみながら折る勇氣
それ媚か銀杏のあくどい臭さ
このハート鷺掴みした道しるべ
スーパールの片隅で嗅ぐ郷愁

松江市 津川紫晃

心まで赤に染まつて紅葉狩り
温かい音がペン先から流れ
大安にこだわる文化捨てきれず
喜びの歩幅だんだん広くなる
瞬きのリズムで秋の陽が落ちる

出雲市 園山多賀子

石露の黄に風も座つて昏れ難い
親切ごっこ優先席に慌てない
出雲弁風が通訳してくれる
燦々と利那を飾る夕陽の美
恍惚の海に溺れる夜のしじま

出雲市 石倉美佐子

夢二展この二三日しとやかに
愁いある瞳にじつと見つめられ
矢絣のきものに細い帯しめて
美しい便箋大切な人へ
初春を迎え素直にありがとう

出雲市 青山久子

行間に胸の弾ける音がする
ときどきはラッパを吹いて歩くなり
クールでもどこかやさしいお月様
りんご柿熟れてカラスも上機嫌
あでやかに衣替えした山に逢う

出雲市 竹 治 ちかし

出雲市 岸 桂 子

夫婦手をつないで越える馬籠坂
弥次喜多のような夫婦の旅続く

朝酒の許可証持つて旅に出る

水清く情に出合う古い町

日本史があちこち落ちてゐる美濃路

出雲市 城 多 喜

善人の顔して今日をやり過ぐす

末っ子がタクト振つてゐる三姉妹

青空に馬鹿さ加減を笑われる

Tシャツが疲れたままに干してある

一口の水にたかぶり落ち付かず

出雲市 佐 藤 治 代

海光る七十歳の逆上がり

天下取るつもりは無いが金貯める

雑魚の味おぼえそれから病み付きに

まずいもの無いから困る体重計

ミカン剥く明日の事や今日の事

出雲市 伊 藤 玲 子

骨一本折つて静かにしろと神

救急車恥ずかしいのに音を出す

仏日の怪我で不随を免れる

みんなしてお礼を言いに墓参り

骨折に日にち薬という希望

引き金を引いてしまつてからの悔い

我を張ればつまづく事が多くなる

老眼をかける頃から妥協癖

新しい出合いを待っている扉

脇役に甘んじてゐる葱坊主

島根県 伊 藤 寿 美

朝顔の種を病夫が取つてゐる (再入院の朝)

告知から一年過ぎた虎落笛

病む夫の足にあわせる縄電車

あの頃は幸せだったフルムーン

打ちひしがれてみずすの詩に辿りつく

島根県 森 茂 美

尻尾振る犬もときどき牙をむく

病室のカーテン引けば小さい城

ゴミ箱にことりと落す旅の駅

松枯れの山を左右に旅をゆく

インスリン打ちつつ元氣山の神

島根県 多々納 テル子

一步からこつこつ生きて証積む

酒汲んで心も染める紅葉狩

お互いに素顔で弱音吐いてゐる

エブロンをきりつとして朝の音

再びと人生の秋赤く燃え

鳥取県 西原 艶子

貧しさの中で膨らむ教養費

脳波乱れてコーヒーが欲しくなる

九階の窓から街の朝を吸う（アウィーナにて）

足跡を残して去った旅の人

交流のひとつとき渦の中にいる

鳥取県 石谷 美恵子

魚まで鉄でさばく嫁という

逢って来てまた淋しくて電話する

不景気へ飼って見ようか黄金虫

うっかりと念仏がでる神の前

母の顔おぼろおぼろで描かれぬ

鳥取県 原 みさを

光っている所がさきに錆びてくる

雀百まで五七五の脈を打つ

行くところへゆく ゆっくりしても急いでも

老いの幸齒のない口が笑うのみ

自叙伝の臭みがぬけて幕になる

鳥取県 近藤 春恵

祖父の汗沁みた杉の木天を突く

記念樹のさくら大地に根を下ろす

産地名書いたラベルに嘘がある

人並みの暮らし願って米を研ぐ

人情にもろく勝手に出る涙

鳥取県 権代 康女

はぎたてのねぎは真珠のよう光る（白ねぎ作りして）

化粧したねぎがきりつと帯をしめ

寝不足で頭の中が白くなり

何年も続いた日記齒が抜けた

白ねぎに追われて過ぎた四ヶ月

鳥取県 新家 完司

もう誰も叱ってくれぬ枯れススキ

鼻風邪で死ぬことはない飲みに出る

くたびれた街にジングルベルが鳴る

林檎の香シャネル5番も適わない

塩加減 湯加減妻のなすがまま

鳥取県 羽津川 公乃

ぜんざいの雑煮で年が改まる

お年玉笑顔に負けてミニアップ

木守柿目がけ木枯らし第一号

夫婦愛今日も無給の運転手

よく食べてよく寝てために医者通い

鳥取県 石尾 かつ乃

沈む陽へブランコ二つ揺れている

野仏のお水を替えているところ

元旦を祝うお屠蘇に願をかけ

へそくりが年末年始忙しい

松の内道行く人の軽い音

学ぶことばかりが増えて老いてゆく

鳥取県 山本 正光

優しさに触れて微笑む白い杖

被写体の赤いリングがよく笑う

拉致をするクニなど好きになりませぬ

仏壇も拭いた正月待つばかり

鳥取県 鳥羽 直市

趣味ひとつふやし余白を輝かす

大虎が村のまつりを盛りあげる

こだわりを捨てれば壁も苦にならぬ

力まずに余生を波に浮かせてる

孫が来て喜劇の中で日が暮れる

鳥取県 鳥羽 玲子

不意の客ふだんの自分かくせない

全身でぶつかって見るよいチャンス

偶然か必然かまた会うはめに

塩分におどされながら食事する

冷凍室餅ひとつそりと出番待つ

鳥取県 乾 喜与志

亀に乗り浦島太郎さん元氣

開拓に勇んだ鞭もおとなしい

記念樹よ同級生の文が来ぬ

腰撓め酒徳利もつ歳の暮れ

年の瀬に老いたる馬の高いびき

鈍い男がお巡りさんをはぐらかす

されこうべ仕上げを磨く糠ぶくろ

近道を行かした男何しちよる

おくやみ欄のサムライをチエツクする

うれしい事が男いつびき狂わせる

鳥取県 土橋 睦子

爽やかに二〇〇三年無事迎え

ブランドの財布の中も風が吹く

歓声のあとは静かな城下町

追伸が二行で済まぬ寒椿

苗植えて季節は巡る冬籠り

鳥取県 福永 ひかり

更年期得体の知れぬ敵がいる

拉致被害重い言葉は喋れない

責任を問われる案は先送り

アフガンに平和を知らぬ子供達

自由主義社会の空気吸っている

鳥取県 有沢 せつ子

ふくよかな羊 賀状に選ばれる

預かった亀に家族が遊ばれる

それなりの証明写真真気に入らず

真心が宅配便で届けられ

年金手帳夕映え色が温かい

鳥取市 中村金祥

集団で就職出来た過去もあり

インフレが懐かしくなるローン族

虹を追う少年心失わず

偏差値に右往左往は真つ平だ

分別のゴミが反旗をひるがえす

鳥取市 岸本孝子

果物と仲良し医者と縁がない

ハートまで盗まれそうな握手する

気のたるみ風邪がすかさず寄ってくる

極限の悲しさ涙出てこない

手付かずの明日に約束して眠る

鳥取市 岸本宏章

男には抗議の握手だつてある

生きるとはチャレンジ靴を光らせる

陰のある人から学ぶ人間味

拾いたいほどの自転車捨ててある

二十五時今日をゆっくり折りたたむ

鳥取市 福田登美

錯覚の愛がボツケに錆びている

組板も気分次第の音になる

噛み合わせのままにこれから冬がくる

暮れ迫り財布も風邪にかかりそう

見栄もあり光って見たい時もある

鳥取市 倉益一瑤

ひまわりが反省してる秋の空

ピラニアになろうと思う雑魚の意地

したたかに生きて鱗を光らせる

静寂を破るチャンスは今らしい

泣きボクロ蹟くたびにでかくなり

鳥取市 春木圭一郎

公約の羊頭狗肉だまされぬ

羊にも空翔ぶ夢があつたのだ

羊から学ぶ優しさ思いやり

羊飼ひ昼間は何をしているの

寒空に迷える羊どこへ行く

鳥取市 録沢風花

秋風を十指で掴む一万歩

検診に誘ってくれる友がいる

二十四年の涙にもらい泣きの日々

母がいるだけで茶の間の灯が温い

納得がゆくまでペンを持つ夜長

鳥取市 武田帆雀

水琴窟の音色を秘めている女

回り寿司皿の数など無頓着

忘れて取りに行つて忘れてかえる

菜を間引く予定が狂うお客さん

ライバルの家にニンニク吊つてある

鳥取市 植田 一京

思い出はメルヘンチックに輝やかす
ズバリとは言うが眼の奥あたたかい
宝くじ当り沈黙守つとる

珈琲に誘つてくれて好きになり
ファックスでザツクバランな便りくる

鳥取市 近藤 佳子

あの頃の話で電話三時間
他愛ないお喋り仕合わせな時間
白い雪海に降つたら海のいろ
いいことと出くわしそうな春を待つ
哀しみを攫つておくれひつじ雲

鳥取市 加藤 茶人

銀婚を離婚の勇気なく迎え
顔力オカお票に見えてる選挙戦
カーナビのここは極楽何丁目
中流の意識で日本今日を病み
二番手の良さを二番手だから知り

倉吉市 松本 よしえ

酒になるいのち葡萄はまだ知らず
銘水でお茶点てますと呼びに来る
他所の子を叱ると親がとんで出る
老い看取る話に席が冷えて来る
花輪がずらり輝くようなお葬式

倉吉市 最上 和枝

叩かれて折られて伸びる葦である
曼珠沙華どこに咲いても人目引く
もくず蟹鉋振り上げ触れさせぬ
木枯と四つに組んで木守柿
大根は日に日に甘く野分吹く

米子市 光井 玲子

受話器置いて迷いがすつとふつきれる
いい知らせ私の中で鶴が舞う
無口だが老父が溜めてる底力
戦中のランプ戸棚で眠らせる
いざこざは水に流して縁むすぶ

米子市 永井 三津子

子も巣立ち少し理性の帯緩め
顔洗う弱い私が消えるまで
ノーが言えたら金持ちになれていた
解こうか柵世間恐れずに
白髪でも母の歩みはまだ若い

米子市 鷺見 正子

責任者出て来い孫の通信簿
算数は苦手やさしい太郎です
がんばろう兎と亀の例もある
皺退治もすこし太ることにする
四捨五入すれば理想の妻になる

米子市 白根 ふみ

未だし老母おだやかに屠蘇の順

あなたからの一筆箋が初春の使者

山形へ国文祭はとび立った

国文祭送り脱力感その後

晴れる日にお医者めぐりを済ましとく

米子市 木村 富美子

柿の実が世代を譲る貌で熟れ

輝いてくれる若芽に愛の鞭

懺悔する神を静かに呼んでいる

眠れない夜の静けさをもて余す

花を盗る人を静観するも罪

米子市 中井 ゆき

ランブ宿寝るほかはない風の音

十三夜雨にすすきもうなだれる

あと少しでん返しないように

ふりあげたかまきりの斧あわれ秋

一途さが頑固に変わる年のかず

愛知県 早川 盛夫

今度来る時にはブリになって来い

金持って争うよりも無い平和

病んで知る健康という宝もの

何ひとつ包み隠さず露天風呂

いいところで会ったと過去へ連れ戻す

京都市 都倉 求芽

カシミールの平和を祈るひつじ雲

シユレツダーにかけ羊にも食べさせぬ

こころ待ちしているあのひとの賀状

マンネリがまたはじまりぬ三が日

努力からプラスアルファの花が咲く

京都府 稲葉 冬葉

ほどよい松に手こずっている花鉢

ファンデーション換えて弾みをつけて見る

不覚にも晩秋の蚊に刺されたり

ひたすらに待つ人もなく萩の庭

よろこんで下さる人の靴みがく

京都府 丹後屋 肇

インスリン打ってメロンを平らげる

勘亭流まねきを撥ねる川の音

ホスピスの窓にもみじがへばりつく

少子化に閉鎖がつづく遊園地

ヘルパーの指示に素直な頑固者

奈良市 天正 千梢

ランドセル三つ持たされイジメかな

脱線の一つや二つおおめに見

この上に何を望まん弥陀如来

順位などつけたがってる傍観者

人生の答出して足跡

檀原市 居谷 真理子

漫才のような夫婦で隙がない
寝たきりを軸に家族の舞を舞う
いつの日か真実にする嘘をつく
かたむいた老舗に美しい娘
UFOの如くコンビ三十五時

奈良県 渡辺 富子

楷書から草書になって恋進む
情話抱き大和三山しずまれり
試歩の母へ拍手喝采菊日和
辛いことみんな忘れた枯すすき
自分史のところどころへ傷テープ

東大阪市 北村 賢子

限り有る命無限の夢を抱く
帰りたい帰れぬ思い渦を巻く
渦中の人作業服からえんぴ服
さみしくて母に会いたい目を閉じる
平凡の中に気づかぬ幸がある

東大阪市 谷口 義

会長さんは割勘が嫌らしい
割切れぬ割勘だった終電車
しばらくは持っていました二千円
全山紅葉これから風邪を引く季節
この世とは椿の花に雪が降る

東大阪市 指宿 千枝子

しみじみと思う人あり秋の風
外出は鏡に自信確かめて
割りかんのデートに愛を確かめる
行先を風に聞いてるちぎれ雲
補聴器をはずし静かに読書です

羽曳野市 安芸田 泰子

紅葉狩り日はとろとろと雲の中
取入れへ猫の手になり里帰り
パソコンも孫も意のままにはならぬ
まやかしの愛へ返って来たつぶて
このままで消えてもいいよ日向ほこ

羽曳野市 三好 専平

一筆箋破れ障子に張っておき
踊ってるテトラポットに波がじゃれ
点滅の赤信号が気に入らず
娘の顔も忘れて鶴を折っており
わたくしもダイヤモンドに目がくらむ

松原市 小池 しげお

横綱のお尻見てるのがつらい
右左ないスリッパのいいところ
大声で笑えるようになりました
忘れてもよい約束を思い出し
はまらないように昨日の水たまり

藤井寺市 楠 昭子

ひと言が思わぬ渦に巻き込まれ
四捨五入される辺りにいる私
ベテランの手触り偽札弾き出す
荷崩れに気付かず欲を積んでいる
人の世の渦に揉まれた人間味

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

菊花展へと静かなるころざし
カルシウム不足の足で竹を踏む
価値観の違いさみしくなる絆
欠席のひとに心を縛られる
酔うている日のカラオケは別の貌

富田林市 片岡 智恵子

悪友を庇う大きな杭を打つ
割勘を仕切る男の丸い鼻
雑魚なりに逃れる網の目を探す
老いるほど昔はつきり見えてくる
親ばなれ子離れ孫も来なくなり

富田林市 大橋 鐘造

私を信じて影がついてくる
後指さされてるのか重い靴
さつちりと時間通りに腹がへる
頷いただけで味方の数に入れ
一言の情けに開く重い口

富田林市 中井 アキ

おにぎりのブームに弾む老母の指
満天の星に五感を磨かれる
こっそりと毛生えぐすりを飲んで
腹の虫治まるまでを草むしり
仏様少し丸あるくなりました

河内長野市 水谷 正子

賀状には恩師の癖字おどつて
ハロゲンヒーター安くなつて
初場所に寺尾が見えずメランコリー
忘年会都合をつけて梯子する
会社ではライバル外で飲み仲間

河内長野市 村上 直樹

花咲かぬ冬なら下へ根を伸ばす
淡雪が似合う人です後れ髪
ありがとう妻にひと言除夜の鐘
初詣で 賽銭ほどの無事祈る
初日浴び夢さためいて絵馬の群れ

河内長野市 加島 由一

愛情は指輪なんかじゃはかれない
割り切つて活断層の上で寝る
的を得たたとえ話で笑わせる
国旗掲揚今年もあつという間ぞ
糠に釘小言肴に飲んで

岸和田市 井伊東吉

岸和田市 岩佐ダン吉

もみじ狩り主婦の土産は地場野菜
ゆつくりともみじ観る間の無い幹事

おだやかな小春日嫁ぐ隣の娘

木枯しに背中押されてする散歩

四番打者抜けてどうするジャイアンツ

岸和田市 原苑子

妊娠を母に知られた回り寿司

世の流れ逆らえずいるあまのじやく

進化する道具で寿命永らえる

どんな事あろうと続く血の重さ

頭下げ納得させたつもりらし

岸和田市 木村正剛

カミソリよお前に薪が割れるまい

別れても結婚指輪戻らない

熱爛に目刺し五匹の妻の留守

ガキ大将ノーベル賞が見えてきた

医学書をかじって女医に叱られる

岸和田市 高須賀金太

企みがあるのか苦すぎる珈琲

わがままな気候とつぜん冬となる

木枯らしの音通院の足にぶる

天然の七草でないほろ苦さ

枯れた味出そう出そうとして出せず

カロシの予感だ吊皮が重い

飢える子も同じ青い空がある

核ゼロで地球を青く塗ってやる

裏道を歩くと人が見えてくる

サラ金の泣く人出ないコマースヤル

泉佐野市 山本蛙城

去に際の脅しもありの赤十字

お日さまよ今年は秋をお忘れか

頑として背破れ辞書を買ひ換えず

悪びれず宴の中のウーロン茶

ひとさまのために顔あり髭を剃る

大阪府 米澤俣子

うま過ぎる話だ値引きして聞こう

若者のライブが弾むジャズピアノ

一徹を通した父の轍だな

弱そうで強いコスモス見習おう

きつかけが無くて二人は貝のまま

大阪府 初山隆盛

心臓に脳に一献おめでとう

初句会仕事始めの息吹する

人間ドック肩の力を抜いてゆく

眉涼し修羅場を踏んできた男

厄落し松尾の鐘を撞きにゆく

大阪府 澤田 和重

折りたたみ下手な娘の長い足
逃げ道を残し情けをかけておく
歳相応に見られて腹が立つてくる
黒髪の良さを忘れている茶髪
譲られた席へ座ったのは他人

高石市 浅野 房子

手拭で埃はらって父帰る
拉致以来止まった時間流れ出す
白衣脱ぐとたんにただのオッサンだ
相手見てジョーク言わんとおこられる
老人会うそも自慢も聞きあきる

堺市 志田 千代

元旦になると大志を思い出す
雪女ハリーポッター読んでいる
お喋りをすればよくなる病気かも
計算が合うたら離婚するつもり
分骨をしたらお化けになつてでる

大阪市 川端 一步

この年の話題三人田中さん
深呼吸和睦の道を選ぶなり
ひかえ目の注意通じぬ遠い耳
テレビ見て泣いて笑って持たぬペン
老人に医の改悪は百たたき

大阪市 鶴田 遠野

故郷みやげ軽い噂も持ち帰る
家計から抹消された遊興費
夢ばかり語るふたりの観覧車
糖尿の舌が忘れた旨い味
よく吠える子犬と暮らす美人ママ

大阪市 玉置 英子

花を替えおこわ供えるお朔日
一番の古い記憶は母の膝
見てみたい野性の孔雀いるところ
ガラス戸に屈んで歩くのが映る
鴛鴦の雄あざやかに色変わり

大阪市 古今堂 蕉子

平成も十五の春を迎えます
一人居やテレビに向かいおめでとう
一歳と九十歳のバースデー
秋^{しゅう}冥^{めい}菊^{いきく}十三歳のように咲き
小泉さん言葉上手に使いはる

大阪市 町田 達子

祥月の仏に詣る京の寺
和尚さんの話にいつかつり込まれ
帰路に寄る紅葉に早い嵐山
石仏と一とき対話こころ足る
ミュージアムでプリンセス・ダイアナ展を見る

大阪市 神夏磯 典子

ジंकスを抱いて未だに賭けている

孫たちが金持ちになるお正月

母さんの自信何でも目分量

種袋見せ合っている喫茶店

とつぷりと夢に浸ったプログラム

大阪市 板東 倫子

何十回目でもお目出たいお正月

平社員賞が何とノーベル賞

癒しとは優しさそれがむずかしい

神主が集金に来る秋祭

公会堂へ昔のオムレツ食へに行く

大阪市 川久保 睦子

うしろから目かくししたら知らん人

聴診器不倫の音を拾われる

苦い水飲むたび女強くなる

泣いても笑う芸する天秤座

自分史の行間うめる花がない

大阪市 大川 桃花

ウエストに合わせ大きい既製服

煮えきらぬ男は嫌いドラマでも

転がったコインは踏んでから拾う

着ぶくれてシートのだいふ一人減り

霊柩車と並び待つてる信号機

大阪市 津村 志華子

秋の陽を抱いてふるさと柿すだれ

香焚いて心の余白うめている

診療所老母の仲間がたんという

お喋りの怖さ忘れた軽い口

長寿万歳母は菩薩の顔になる

大阪市 奥村 五月

もう三月好きなお酒と別居中

腹黒いとこまで覗く内視鏡

ローン背に息子外車を乗りまわし

会社では叱り屋台でとる機嫌

ノーベルが島津の株を押し上げる

和歌山市 桜井 千秀

安らぎが欲しくて熱い茶をすす

無関心が一番怖い自然界

お芝居かも知れないですな褒め過ぎる

人生の浜辺で拾うさくら貝

手探りで他人の腹は探れない

和歌山市 福井 桂香

仙人もこうだったろう空の旅

切なくて人ごみ泳ぐ暮の街

骨のない男彼女を二三三人

電飾の街に魂見失う

電子辞書 広辞苑も軽くなり

和歌山市 古久保 和子

木枯らしの街で出合った山頭火
交差点ばくも落ち葉も迷い人
天高し迷路を抜けた顔がある
たわいない事に目くじら立てる日も
スクラムを組んで北から冬便り

和歌山市 青枝 鉄治

政治家のラッパで雑魚は踊らされ
金と暇出来て病魔にいじめられ
どん底で組むスクラムに芯がある
主義持たぬ手もあがつてる多数決
途中下車是非にと袖を引く地酒

和歌山市 田中 みね

やつぱりね松井秀喜よ行くんだね
ネクタイをキリリと締めて正念場
読み返しまた読み返すいい知らせ
自分の事は判っちゃいない言葉じり
お金のことはとても冴えてるお姑さま

和歌山市 吉村 さち子

さし水をするとおもろくなる噂
お茶一服のサービス受けて買わされる
拘りを通す明治の使命感
善人の顔でユニセフカード買う
第九のざわめき貰う年の暮れ

和歌山市 細川 稚代

初春やふくらまずめがよく喋る
ひとすじに生きる明日へ積む笑顔
変り身が下手で雑魚の群に居る
聞き役に徹しています午前午後
表裏透かして見てる二千元

和歌山市 上地 登美代

ながい病名貰い即日手術台(腰部脊柱管狭窄症)
我慢強い夫の一夜呻き声
幾たびの挫折よ秋のひとり言
下肢動く涙へ光る星月夜
病む毎に夫婦の絆深くなる

和歌山市 楠見 章子

すきま風で頭の中を引き締める
夢を見るこたつの掛けを派手にする
ピーポーに馴れてこのまち大好きに
曖昧な言葉でおよぐ群れの中
光り物好きな大阪弁のからす

尼崎市 春城 年代

いつまでも夏が居据わるすだれ巻く
表向き波風立てぬいい家族
無神論怖ろしい夢ばかり見る
引き出しの奥の名刺にあわて出す
お隣に留守を頼める仲じゃない

尼崎市 春城 武庫坊

羊の群れに瑞光あたり平和なり
元朝の注連に雀が来て祝う
処々に無駄があるから温い家
しばらく横になって人間取り戻す
車窓から見れば平和な村続く

尼崎市 長浜 澄子

年輪がいい持ち味を出している
りんご剥くおいわき山や友の顔
綾取りが絡まり合ってから不調
カルチャーショックすぐ立ち直るのは女
花が咲き実が落ち四季がまた巡る

尼崎市 山田 耕治

着服れて待合室の髭の顔
カラオケで菊地章子を歌う歳
よく食べてすこやかに老い小春かな
生れたは大阪に地下出来た年
環状線歳末似合う電車なり

西宮市 緒方 美津子

行先のない僕誘う秋の風
酒の恥あの父生まれかわらせた
バラサイトいつしかあてにする歳に
写真嫌いかメラ係に切りかえる
退院し雑煮うれしい対茶碗

西宮市 門谷 たず子

指の傷何も疚しいことはない
風すこし入れて夫の古い看取る
本日晴天心配ごとは後まわし
新米の美味さに偲ぶ里の風
寝心地はやはり我が家のわが布団

西宮市 山本 義子

ひとり芝居春には春のせりふある
わたしなりのテンポで行こう ウン決めた
背は縮むせて心を伸ばす老い
焦げぐせのついたお鍋もすてかねる
寒くなつたね財布のなかのひとりごと

芦屋市 黒田 能子

目を閉じて私を写す水鏡
許せぬが落書きの絵のうまいこと
北風に向かつて歩いてる帽子
美しい人美しい皺刻む
イニシャルを刻んだ遠い日の日記

神戸市 山口 美穂

水がおいしい氷河からの贈り物（カナダの旅 5 句）
静かに今 戦場公園で書く歴史
古いフランスそのままここにあるという
喚声は滝の轟音にかき消され
ナイヤガラの上ぶきで顔を洗うて来た

宝塚市 嵯峨根 保子

箕面市 岩 津 ようじ

拉致五人ぎんなんたわわ友たわわ
母の愛十一桁に余りある

海に立つ母が向かうは北ばかり

自動改札 仮の夫婦で通り抜け

女坂だらだら性に合ってくる

姫路市 古川 奮 水

補聴器をつけて声高よく喋る

懇親会閉会役が酔いつぶれ

寝不足にまた肝臓が怒りだす

色付いた紅葉に雪の化粧見る

高野山合祀の塔も年明ける

相生市 中塚 礎 石

杯がコップになってからの乱

新婚の頃の話に入れ歯浮き

口止めの栓が緩んで酒になる

言うだけは言うて妥協の手を挙げる

軽石が微笑んでいる仕舞い風呂

兵庫県 大谷 幸次郎

一滴の涙が欲しいドライアイ

十中の八九は駄目に立ち向かう

拉致された命消えたり灯ったり

失敗も恥も重ねて伸びてゆく

腹が出て重心低くなるばかり

法善寺昼の灯明昼の月

東海の小島の空気汚れすぎ

理路整然と不況言訳する首相

得手勝手生れ替わらばアメリカ人

長病みの羨ましがる突然死

池田市 栗田 久子

息災を知らず賀状をあの人へ

さまよえる羊は群れを恋しがる

迎春のよろこびもえるシクラメン

思い出の曲でかえらぬ日を思う

ババシャツをちらりと見せて着がえする

豊中市 吉田 あずき

改まる年へ素足で立つてみる

月ひとり飄々として妥協せず

少しずつわたしの胸につもる雪

一人で来た道をひとり帰るだけ

賢さはいつでも馬鹿になり切れる

高槻市 左右田 泰雄

飼主に似たのか犬の人見知り

土壇場でグツとこらえたのはさすが

ほとぼりが冷めないうちは貝になる

裏金がひよんなことから表沙汰

勢いに吞まれ二の足踏んでいる

吹田市 穴吹尚士

交野市 山川日出子

ボロ家になつてもローンまだ続く
喋らずに墓まで抱いて行く秘密
あれこれと持葉並べて旅支度
お歳暮の時事には部下を叱れない
押し返す力が抜けた袖の下

茨木市 藤井正雄

枚方市 海老池洋

赤トンボ消化試合の風に舞う
コンバクトケイタイ車内はばかりず
次の駅確かめながらマンガ本
梅地下は踵が右往左往する
唇を尖らせて来る反対派

四条畷市 吉岡修

寝屋川市 岸野あやめ

待つことに馴れて一日つつがなし
ライバルと認めたらしい握手くる
年だけは負けず一周先にゆく
馬の脚いっぺん見えを切りたから
与党にも野党にもある似た話し

交野市 森本弘風

寝屋川市 坂上高栄

奥飛騨へ心弾ます汽車を待つ
わあキレイ穂高の秋へ叫ぶ妻
出迎えは紅葉と雨の河童橋
からくりで飛騨の匠の技に酔う
お土産は赤かぶ漬けと決めた旅

知らぬ子が増えた日本の明治節
平成に江戸の諺残つてる
関西の国会図書館精華町（京都府）
お寺より今の年寄り趣味の会
行列はハリーポッター本屋さん
リストラの御守り欲しい初詣で
やおよろずの神に縋つて生きている
懸崖菊合唱させてみたくなる
秋の風詩人もどきにくれる
臍に傷しどもどろになる答
これ捨ててこれは磨いてお引越（東京転居 5句）
転宅へ先ずはお寺へ筋通す
大東京蟻が一匹たどり着く
婿殿へよろしく願うお辞儀をし
お別れは次に会える日信じてる

これでもか欲の深さに底がない
乱世の渦に抜手の処世術
豊年の稲のつばやき手に触れる
バス停は村の名前のなつかしい
ランランラン雨垂れ小坊主舞踏会

寝屋川市 太田とし子

八尾市 井尻民

正月の気分をくれた年賀状

無礼講の中で小さくなる上司

想い出の無駄が詰まっている筆筒
錠剤の海に溺れていく命

温室の中でチャンスに気が付かず

座布団の数も祈りも七回忌

足元がゆらいで散ってゆく家族

無を紡ぎ愛を綴っていく命

座らせておけば機嫌のよいお酒

ご先祖の汗が光っている棚田

寝屋川市 堀江光子

八尾市 高杉千歩

秋風の中行く群の一人なり

逆らわず羊の群れに身をゆだね

投函をして秋風の人となる

贅沢は敵だが我慢せず暮す

省略の効いた科白の名司会

新調で行くこともなし自由席

小さい旅芒を振って別れ合う

仏壇と話す六畳のやすらぎよ

秋晴れへ路面電車に乗りに行く

これ以上歳は足さないアンケート

八尾市 生嶋ますみ

八尾市 内海幸生

あの人にまた逢い楽し医者通い

陽に恋し羊は崖を駆けあがる

ひざ叩きマラソン選手構えてる

カシミヤの毛布でどうぞ初夢を

落ちこんでいるがまだまだ諦めぬ

転ばせて怪我させた雪消えている

小春日を吸いこみたくて窓磨く

急ハンドル怒鳴ればかかりつけの医者

ずばずばと当り占い怖くなり

点滴を早めていらち叱られる

八尾市 村上ミツ子

八尾市 宮崎シマ子

寒い夜はとうさん星がよく見える

脇役のセリフが多い村芝居

年金のくらしに葉高過ぎる

中ハイの虜になつてから乱れ

よく見ればきのうと違う今日の花

鎖はずすと男は酒の方へ逃げ

情報に背なを向けては生きられぬ

そつとしとこう痴呆の母は今静か

今ここで止めると全てはあになる

筋道を通すと自分も曲れない

弘前市 櫻庭順風

退学の怒涛に揺れている中二
退めろと言われガラリと変わる情つ張り屋
牛乳を配った方が健康よ
堂々と校門潜る楽しさよ

弘前市 蒔苗果林

山夕焼け見る度合掌してしまふ
禿頭なげて叩いて頬かむり
あの世厭冬ともかくも意地で越さん
雪よりもあとあと怖いつぶら雨

弘前市 岡本花匠

大空に白鳥飛来秋深む
雪の声山から届き着脹れる
深追いはよそう根雪の嵩が張る
無茶やめてこころの花を咲かせたい

弘前市 須郷井蛙

南極が融ける地球のうめき声
役員選あの人上手にいなくなる
アンテナを張つても誰もついて来ず
わが家では秋茄子嫁が先に食う

弘前市 高瀬霜石

分相応凝っているのは塩と水
友だちの子供は天を突くようだ
ブレイキに悔し涙の染みがある
ふるさともう椅子がないブーメラン

青森県 小寺花峯

言い訳は止そうよりゴ丸噛り
人の世に錆びついている私利私欲
言い訳の風が理屈を捏ね回す
説法に改心の首垂れ下がる

十和田市 阿部進

怒ったらすぐにでてくる津軽弁
物捨てることに長けてる若い嫁
美しく生きたいものだ古稀夫婦
遠来の客真心でおもてなし

横浜 小野句多留

ノーベル賞チームワークを憚らず
満員車つり皮の手がややこしい
甘えろといわれ今更御冗談
犯罪の手口に残る幼児性

横浜市 清水潮華

つきものの批判へあえて口閉じる
悪口の限界品位疑われ
上手下手そんなに焦ることはない
猫二匹死なれて秋の夜が長い

横浜市 田中笑子

やがてくる老後の夢をふくらませ
几帳面過ぎて仕事がかどらず
愛一つ掴みそこねてまだ一人
老々で席譲り合う温かさ

東京都 後藤早智

高知県 赤川菊野

ふくいくと香りを抱いた菊人形
外人の度肝も抜いた菊花展
消えてゆく技と菊師がポツリ言い
列島をこんなに揺らす拉致ニュース

静岡県 蘭田 獭 杳

刈り倒す葦に子育てした空巢
街中を染めて朝焼け雨近し
耕運機地球に秋の空気入れ
華やかな表に裏を見損なう

富山市 島 ひかる

今年またカボチャの馬車に乗れるかな
つつ込みの上手い男にある温さ
ゆつくりと話をしたいねえあなた
雪の立山見えるガラスをよく研ぐ

香川県 成重 放任

歯車の狂いが生活左右する
急速の寒さに熱燭舌鼓
悲しみを越えて新春松飾り
仕事より大事なものはこの体

香川県 瀧井 勝

静止する時も上流向く魚
失敗の話も時にして和む
身から出る錆はお金の故らしい
世間知らずの理想余りに白すぎる

煮ころがし亡母の匂いの中にいる
日程はテレビに合わすひとりの灯
紅一点男に負けぬ飲みっぷり
淋しさを隠す笑顔が泣いている

高知市 北川竹萌

笑うても怒りだしても気に止めぬ
負けないぞ鏡に向かいにらめっこ
年金を取りに髭剃り顔洗う
帰郷路次九十若いとほめられる

高知県 小澤幸泉

限りなく0に近づく預金帳
花と鳥に酔えるしばしのパラダイス
日記帳しつかり埋めて今日終える
引き出しを多くかかえて病んでいる

松山市 高橋宏臣

いらないが無料と聞いて貰ったとき
終電の間一髪を笑い合い
投げた石忘れた頃にプーメラン
手を握る強さに油断してしまう

松山市 丹下美津子

欲一つ捨てるとぬくい風が吹く
外面はへらへら芯は怖い人
定年後終いの住みかとなるえひめ
薬草手に孫と図鑑を首つ引き

唐津市 丸 晴 翠

岡山県 小 林 妻 子

手の荒れも癒えた二泊の主婦の旅
全方位計算済みの保身術
七五調の母の手紙に癒される
摂生を血液検査表が褒め

唐津市 山 口 高 明

岡山県 大 石 あすなろ

宣誓の声高らかに障害児
横領の処分も秘密銀行屋
笑顔とはうらはら腹の探り合い
復縁を迫るおとこの泣きおとし

唐津市 井 上 勝 規

岡山県 矢 内 寿恵子

貧乏神後見顔でついて来る
病室に喫茶室が遠すぎる
CTも肚の黒さは暴けない
マンネリと挫折を重ね老いてゆく

熊本県 岩 切 康 子

岡山県 福 原 悦 子

クラス会 食の恨みは度に出る
人混みを避け目的の土産買う
池の水澄んでる所 肥後自慢
同胞でゆつくり過去を語りたい

倉敷市 井 上 富 子

岡山県 富 坂 志 重

仁丹を呑んだガイドと紅葉狩り
札束の浮輪を投げる親心
温かい嘘を並べる枕元
将来のビジョンが見えてきた机

多数決でも良くないこともあるんです
おばあさんと仲良く敬老会に行く
さみしいが今年もたとと喪中ハガキ
正月餅搗く孫達を見えています
ふる里がバックミラーについて来る
記録への期待高まる背番号
この町で生れ育つて井の蛙
雑念をはずめてくれる花の寺
ひび入った器にドラマ盛りつつけ
失うたものの大きさ陽が沈む
老いてゆく母にきかせてならぬこと
あけ暮れも平凡告げる鳩時計
玉砂利をふんで心が洗われる
自分史に尾鰭もつけて輝かす
書き下手で何時も電話で用が足り
断りを決めた電話に嘘も入れ
輝いた花道もある写真帳
物忘れ神のおぼしめしと思う
老いてまだ欲を蓄えおしゃれする
銀の匙すこうしはげて老夫婦

岡山市 井上 柳五郎

文明の利器使いこなせぬ老いのうつ

落書を消し いたちごつこのボランテア

底冷えの待合室は私語も消え

卒業のない人生を生きて行く

岡山市 川端 柳子

春夏秋冬ゆつくりゆるりとしとろう

おつき合い寒暖の差をじかに触れ

死に別れバツ一の友皆ひとり

記憶掘り起こせばザクザク光るもの

広島市 森田 文

利き酒のできぬわたしは別行動

和尚さんしんみり話す地べた族

境内は禁止の遊び解いている

初雪や畑のうねも曲りがち

広島県 福島 万年

すつとんと落ちん椿の花の如

信仰は無し肥えている飢えている

名将も老後は妻の城に住む

大声で大トロと言ひ睨まれる

竹原市 石原 淑子

年金へ打出の小槌欲しい暮

鳶おおう母の美田へ草刈機

赤トンボ私にずっとついて来る

松緑 平常心の素晴らしさ

出雲市 吉岡 きみえ

木枯らしが吹いてことしもまたひとり

ポイ捨ての空き缶拾う帰り道

ぼろり出た嘘が大きな波紋呼ぶ

三日分のくすりを持って旅に出る

出雲市 小白金 房子

命名へ硯たつぷり墨をする

赤ちゃんの泣き声我が家に春を盛る

竹トンボ親子の絆抱いてとぶ

寒風は知らずハウスで花づくり

出雲市 小玉 満江

だんじりを引く若者の勇ましさ

これからと思う時にはお邪魔虫

雨蛙石灯籠にかしこまる

ドレスには中国製と書いてある

出雲市 岡 あきら

誕生日柱時計の音という

小っぱけないのちも七つ目の節に

片隅で起した風に煽られる

産地直送ラベルも賞味時期もない

出雲市 板垣 夢酔

酒の酔い覚めないうちに逝くもよし

葬儀経ひざが辛抱してくれぬ

米を研ぐこんな幸せ神がくれ

腹割って話すに都合よいお酒

出雲市 富田蘭水

コスモスがしきり実家の方を向く
貝がら虫から残った初みかん
不思議だなベアーで熟れてるサクランボ
充電でバンドの穴が一つふえ

出雲市 久谷まこと

屑籠に噂も捨てて年送る
踊りの手鏡に映しなつくる
老母さんにまだ楽させぬ共稼ぎ
物売りが茶呑み話の種配る

島根県 榊原秀子

誘われた旅のプランに気もそぞろ
ささやかな土産へすぎたお礼状
旅帰りに至福と思うお茶の味
試運転早や山あいのラッセル車

松江市 銭山昌枝

脂肪だけ残し水洩れするわたし
鈍行でケジメをつける旅に出る
湯豆腐がグツグツ腹を立てている
整形の鼻から嘘が溶けてくる

松江市 小川注湖

神楽笛夜空にのびて舞いつづけ
良い種のクローン人間ばかりでは
噛み合わぬ話少うし変えてみる
花嫁さんチラシのような料理でき

松江市 三島淞丘

善人の顔にまさかの落し穴
盃を重ね本音がこぼれ出る
白寿まで生きる計画立てている
清すぎる水で魚に嫌われる

松江市 佐野木みえ

絵手紙の鯛は目玉をむいている
三十年実った柿を切る辛さ
ローカル線そばを探しに下りてみる
文化祭絵手紙並ぶ晴舞台

松江市 川本 畔

ひねもすのたり少し枕を低くする
無風なりここは幸せだけがある
困るとき川の流れに問うてみる
ゆつくりと納得をする冬の湖

鳥取市 徳田ひろこ

きれいな事ばかり雪見る障子窓
万葉のさとを背骨にする田舎
ぜいたくな巣箱を出ない子鳥たち
独学のフクロウ首がよく動く

鳥取市 杉本孝男

背伸びしたジェスチャーだから頼りない
ファックスへ留守居任せた二人旅
男なら怖い顔することもある
後がない勝たねば綱も逃げてゆく

鳥取市 夏目 粹

金ないと焦り感じて落ちつかぬ

光線に浮いた埃に息止める

医者嫌いでなく小心だけのこと

死ぬときは運命だから死ぬがよい

鳥取市 美田 旋風

平成の浦島ジェット機で帰る

肩書きが消えて遊びの虫が湧く

夫婦茶碗古いがこわれそうにもない

原点に戻り数えている短所

鳥取市 西村 黙光

雲に乗り宇宙旅行をして見たい

雲海を眼下に浸るユートピア

入道雲男らしさに惚れ直す

約束は必ず守る茜雲

鳥取市 福島 庸二

ゆれ動く攻めと守りの闘ぎ合い

山頂の眺め夢見てまた一步

休刊日手持ちぶさたのモーニング

表には見えぬ夫婦のかくし味

鳥取市 田村 邦昭

今もなお亡母の怒りが夢枕

パソコンを上手に操る妻がいる

似顔絵に恋がいつばい描いてある

疑いが晴れても続く冷たい眼

鳥取市 前田 一枝

信じたりだまされたりで丸く住む

神さまも仏も気づかぬ片想い

もめるのも直るのも早い深い仲

カード入れ暗号忘れ泣きとなる

鳥取市 富山 檳榔樹

まだ熟れぬ青いパイヤ焦れつつい

溜息をやりわり溜める鎮魂歌

桃割れの娘に見惚れ満ちた顔

雪の中森の形骸枯れ立木

鳥取市 山本 益子

立ちばなしどうせ噂の種播きか

左前やり直すには先ず金だ

リストラの位置でゆっくり甲ら干す

風当たり非難の的になる私

鳥取市 山宮 愛恵

過ぎ去つてみるとおいしい人間味

自分へのわがままだから許されよ

輝いて行こうひとりの設計図

晩秋にはしゃぐ枯葉のシンフォニー

鳥取市 岩原 喬水

彼岸花燃えてる恋の色に咲き

ボケそうで心のネジを巻きなおす

脇役のままで定年ついに来た

キャラクター生れつきだと強情だ

鳥取市 宮 脇 道 子

鳥取県 小 谷 はるみ

真白なお皿に遊び乗せている
子の巣立ち鮭と同じと悟ってる
携帯が鳴ると慌てて消すテレビ
脳みそを投句で混ぜて味を出す

鳥取県 太 田 幸 枝

鳥取県 さえき や え

足元の輝く石を見逃した
賞味期限過ぎた娘が売れました
満天の星をくぐって観覧車
限らない家事手抜きして昼寝する

鳥取県 吉 田 孔 美 子

鳥取県 平 井 栄 翁

秘め事も小出しに弾む春祭
空を飛ぶ恋は地球の裏側だ
零れ種艶やかに咲き庭囀う
六法を越えたお方は通せんば

鳥取県 埴 寛 子

鳥取県 黒 田 くに子

それなりに舞えた花道暮れかかる
水門を開けて合併論進む
茶も華も門外漢のうるさ型
つたかずら門柱抱いたままの秋

鳥取県 林 露 杖

鳥取県 国 森 武 子

文化の日筆を洗ってそのまんま
年追って年賀ハガキの数が減り
捨てる夢捨て得ぬ夢と老いの暮
人間は雑食ときにひとを食う

振りむく女海の海は荒れている
拉致をする国に援助は真つびらだ
心からあなたを許す日が来ない
清流に晒すと見える罪がある
我が家にも冬がきました柿のれん
こんな顔貸してくれとは勿体ない
話し相手ミミズは肩がこりませぬ
目を閉じるまで平穩に生きたやな
諸粥の温みに風邪の鼻すすする
包丁を研いで祭りの魚を待つ
人かばう心で何時も乗りおくれ
初雪に犬の足跡踊つとる
裸体画の前でうごかぬおじいさん
未熟でも咲かす画廊へ飾るまで
こだわればわたしの座る場所がない
無駄ばなし道がひらけるかも知れぬ
昼も夜もコタツがいつもはなせない
去年より柿二週間早くうれ
七十歳取り残された予感すら
抜けるよな秋晴れよ来い待ってます

鳥取県 田村 きみ子

ハウスもう春です苺売りに出す
つるし柿ほどよく乾き雪となる
輝いた席から見えぬ紙つぶて
一匹の鬼に仏を抱かせたい

鳥取県 上田 俊路

北朝鮮拉致の所有をまだ主張
先頭に立てば矢面晒される
頭一つ下げればこの世住みやすい
国訛り孫が土産に持ち帰る

鳥取県 西 冲 彰 雄

人間の重さ軽さか叙位叙勲
歳問われ喜寿まで二年まだあると
老眼鏡なくても見える人の腹
我が人生賞味期限は逝く日まで

鳥取県 小 谷 孝 美

犬猫を家族と呼んでいる平和
土鍋から家族の会話もれてくる
味見する子供の舌は嘘つかぬ
あごはずれ歯科で同情かっている

鳥取県 岩 崎 みさ江

まだ若いつもりでリング丸鬻り
バーゲンに目を輝かす群にいる
金婚の舟に鑿の跡がある
ある時は舵を違えて座礁する

鳥取県 西 川 和 子

趣味多才燃えていきいきして卒寿
目覚めたらしい輝き出して来た記録
サムライも世論にとても逆らえぬ
ふる里へ思いは深くなるばかり

米子市 青 戸 田 鶴

忘れた美徳思い出させた田中さん（フーベル賞受賞）
矢面に立つと力が湧いてきた
みの虫がわくら葉のよう揺れている
迷ったらインターネットで聞いてみる

米子市 木 村 春 枝

旅帰り薄茶で私取り戻す
祭り客帰って残る鉢一つ
テレバシー姑に無沙汰の墓参り
おばさんの虫食い野菜先に売れ

米子市 門 脇 晶 子

出不精の母があゝの世に行ったきり
古稀になりようやく歩幅揃います
水底に古い話が沈んでる
客室にムードが揺れる古ランプ

米子市 野 坂 な み

見つめると土器のかけらが輝いた
二十一世紀の曆迷信はなさない
力強い味方にさせる頭数
おばあさん転ばぬように気をつけて

米子市 林 瑞 枝

心を磨いて暁天の星を見る
いい香り天女が新春の空を舞う
笑いこらげて吉報さげてくる皓齒
鳥になった夢見て胡弓聞いている

米子市 神 庭 詩 郎

今年こそ良縁願う初詣で
増えて来た介護産業送迎車
さあ大変孫が反旗をひるがえす
国文祭邦楽演奏に引き込まれ

倉吉市 野 口 節 子

映画館昼寝に丁度好い温度
滑らせた口が大きな渦を生み
不況波受けて撓んだ父の背
八方塞ぎの道で石ころ蹴っている

倉吉市 山 中 康 子

新年を祝う家族に仲間入り
紅葉が風とペアーで機嫌よい
病窓にとけこむまでの日が長い
ナースには最敬礼のしっぱなし

倉吉市 山 本 玲 子

グループ長 美男子だから仲間入り
犬が姫五匹も産んで大わらわ
畑を打つもしやと思う土器が出た
不老長寿あんだお前の夫婦岩

倉吉市 米 田 幸 子

黄昏れてやがて私も夕焼ける
シナリオもやがて峠にさしかかる
すかたんになつてしまった預金利子
節約を強いる割には無駄がある

倉吉市 牧 野 芳 光

土俵際まだまだ策は落ちている
頑張った今日に乾杯してやろう
参道の脇で歴史を競う店
場所の良い店ほど愛想が悪い

倉吉市 猪 川 由 美 子

負うた子がいつのまにやら指図する
金総書記の脳CTで見てみたい
平均余命引き算をして背が寒い
紅葉と雪が同時の大山よ

倉吉市 淡 路 ゆ り 子

八十路来て旨さを知った酒の味
舌下錠記憶の場所にないあせり
死ぬまでに覚えられない十一桁
わんぱくの一きわ静か金魚の死

滋賀県 中 宗 明

握手して仲の好いとこ見てもらう
オベ無事に済んで患者の輝く眼
リストラを受けて味わう孤独感
味覚の秋ブロの腕前見せどころ

亀岡市 井上 森生

脳裏から消えぬと思う闇の拉致

この歳で酒かビールかまだ迷う

家内とは世界が違ふ定年後

香港の孫が電話でハッピー・バースデー

京都市 高島 啓子

言うことを聞かぬ羊も群れにいる

割り勘も領収書は貰います

蜜柑まで甘やかされてすぐ腐る

竹山へ降る紙吹雪津軽三味

奈良市 米田 恭昌

体重差妻はやっぱり横綱だ

田中さん受賞平社員に灯をともし

永住帰国故郷の山河が離さない

拉致帰国同窓の友の温かし

大和郡山市 坊農 柳弘

甦る大正ロマン中之島

こだわりを百八つ目で切り替える

恋心冬の陽炎やさしすぎ

着飾った紅に破魔矢が照れている

生駒市 飛永 ふりこ

キャンパスに未の白で夢描く

待ち焦がれ海原と会うときめきよ(唐津大会にて2句)

唐津焼海のしぶきが皿にある

雪国の列車鈍行選んでる

香芝市 大内 朝子

生みたてのたまごみたいなお正月

念ずれば風が味方をしてくれる

生き方を変えてもやはりもとの道

枯れてゆく容姿ハートに水をやる

海南市 三宅 保州

誰にでも話しかけたい三が日

あなたの直筆が一字もない賀状

このままでは絶滅しかねない風よ

元旦の楽しみ賀状ジャンボくじ

海南市 谷口 義男

エリートに育って別居した息子

殻を割り雛が顔出す自己主張

自分では美人の積り鏡見る

美人画の前で熟年立ち去らぬ

和歌山市 木本 朱夏

呼び鈴が壊れたままに冬される

自転車に積めるくらい欲がある

口中に星が生まれる激辛カレー

肩の荷を下ろして新しい暦

和歌山市 松尾 和香

初雪の合祀供養に清められ(高野山)

晩学の挑戦楽し失敗も

ガッツポーズ皇上に立つ幼顔

夕茜今日の感動ありがとう

和歌山市 西山 幸

うらぶれた軒先へ来る落葉たち
ひとり身は人に逢うのも罪らしい
指人形ほどの自由をたのしもう
それからがいよいよ寒い予定表

和歌山市 松原 寿子

二〇〇三年の地図握りしめマイウエイ
炎のような記憶こぼれるポリグラフ
さよならの風と流れてゆく時間
満足度中流ですと言っておく

和歌山市 榎原 公子

食欲の秋におののく脂肪肝
待ちわびた秋が一足飛びをする
木枯しに急かされて吊る柿すだれ
時どきは迷路に嵌まる縄電車

和歌山市 武本 碧

叩かれて太鼓音色が澄んでくる
脱ダム宣言川のように流れない
雲行きが怪しくなると煙に巻く
一休みする切り株のない都会

和歌山市 山根 めぐみ

宇宙から見れば地球は露の玉
紅茸にウインクをする天狗茸
濃い紅で自戒うながす毒きのこ
軋む世にタマちゃんが来て慰める

和歌山市 玉置 当代

リハビリに励む右手に努力賞
左手が活躍します感謝状
見る人の十色に答くれる月
夏から冬へ一足飛びの衣更え

和歌山県 中後 清史

突き当たる壁を試練と受け止める
フセインの首を挿げ替えたブッシュ
言い分けをすれば誤解が深くなる
お世辞とは知らずほんまにやって来る

西宮市 西口 いわゑ

菊を着た武者人形に惚れ申す
万札を使い果たして気が晴れる
ひと言で胸に大きなばらが咲く
浮世とや劇中劇と思いたし

西宮市 牧 渕 富喜子

雁の棹ゴミ当番の日の余録
祈る掌のその中心へ日が沈む
バスツアー頭の上をひいふうみい
またひとつ歳をひそかに取っている

西宮市 秋元 てる

開き直り余生楽しむおんな達
旅五日手酌の人のひとり言
故郷の海甘え許さぬ藍の色
初詣り来年もまたこの脚で

西宮市 刈田 泰司

美人ではないから笑顔絶やさない
美人より優しい顔のレジを選ぶ
美女が辞め平和が戻る趣味の会
美人ではないが笑うと品がある

西宮市 井上 松煙

凡夫婦小さい夢に惹なし
脳味噌が小刻みながら減る怖さ
テレビ見て行つた気になる菊花展
赤い花植えて若さをもらつて

西宮市 坪井 孝一

ロボットがあなた無用と笑うとる
ロボットの器用な指が羨ましい
笑顔のまま必死に探す忘れた名
おとうさんこらでひとつカーブいこ

西宮市 亀岡 哲子

九九習う子とおさらいのみかん風呂
手間ひまをかけて絆のスープ澄む
母の歯に合うまで柿は仏前に
地下鉄へ花束抱いて退職す

西宮市 菊池 トミエ

名月や月は無くても花すすき
栗ごはんホクホク炊いて姉と居る
菊の酢の物日本料理に色を添え
息つめて秋の蚊ひとつ搏ちもらす

尼崎市 内田 美也子

錦絵の山を動かす滝の音
手古摺った分だけ深くなる絆
不揃いの菊それぞれに自負を見せ
ノーベル賞暗い世紀へ活を入れ

尼崎市 軸丸 勝巳

一番乗り蕾だけ見る菊花展
湯豆腐の角は崩さぬ箸づかい
娘の仕切るただニコニコと喜寿の膳
ケイタイに潜む心を突く悪魔

尼崎市 松下 比ろ志

先入観捨てると道が広くなる
ためらいを捨てて男の顔になる
捨て切れぬ夢も消し去る不況風
波風立つ湖にマリモは育たない

伊丹市 山崎 君子

相席の夫婦も同じ大盛そば
幼なじみ夢追いながら長く咲き
友集い吉を見せ合う初みくじ
蘭の香り届くところに老母の椅子

伊丹市 小熊 江美

価値観が違う娘にさからわず
飴玉を常備薬のように持ち歩く
カルチャーへ通うも無料バス
砂丘に来て馬車に乗るのも旅の興

三田市 久保田 千代

強がりを言いつつ早い冬支度
タイミング義理の拍手はちよつとずれ
渋滞の尾灯の帯をニュースとし
不況とは別に夜景の豪華版

三田市 北野 哲男

つぎはぎもパッチワークに出来る妻
大仏に指紋あったか思案する
登山靴脱いで有馬の金のお湯
ウインドーの百の眼鏡に雲二三

川西市 米原 雪子

抱く腕に無心の寝顔ずつしりと
毎朝の家族の動き音で読む
寝過して駅へ得意の牛蒡抜き
一輪車乗れて得意のすまし顔

川西市 西内 朋月

休日の朝を無粋な選挙カー
じいちゃんの似顔が歪むクレヨン画
ふところの軽さ気にして飲む新地
太閤の夢のまたゆめ名護屋城(唐津)

神戸市 木村 貴代子

君からの便りのごとく小菊咲く
さし芽からドラマが続く菊花展
おろかさを自分に許し長らえん
生きたとは忘れる事か空は蒼

神戸市 池田 善守

五七五創るときめき定年後
気を遣い気を働かせ夫婦仲
運動会祖母の声援孫止める
日陰より日当り好む神無月

箕面市 出口 セツ子

亡くなつていても郵便だけが着く
ゴミ箱へまとめて捨てて今日の愚痴
顔にすぐ出て大人にはなりきれぬ
賞味期限切れて会話の減る夫婦

池田市 岡本 吉太郎

若い人匂いを出さずにゴールイン
若き日の放浪豊後竹田の宿
先生講義脱線ばかりで面白い
八十路過ぎ悟りとは忘れ去る事だ

吹田市 太田 昭

夜なべ終えた母に素うどん作る父
また火種残してアデランスを買った
昼寝から醒めないことをふと思い
腐葉土になる命なら惜しまない

吹田市 瀬戸 まさよ

日朝の握手テーブル離れすぎ
退職金はたき悔いなし豪華船
船のドラ泣いた別離も大昔
オムライス公会堂より明治軒

吹田市 早川 棲世

高槻市 井上 照子

一期一会の人間模様ツアー発つ (旅の思索)

都市遺跡先祖の遺産見せて食い

力は正義王たちの像みな馬上

旅の間は塩爺 円下らぬように

吹田市 野下之男

羊にはなれない妻のこの元氣

亭主など忘れて妻の立ち話

大見得を切れば素直に株下がり

神様も不況風には飽きている

吹田市 山本 希久子

福寿草威儀を正して賀状読む

生者必滅先端医学駆使しても

コンピュータに奪われてゆく記憶力

老いの坂過去ひとつ捨てひとつ捨て

吹田市 大谷 篤子

孫娘もう親の癖そのままに

我が人生今ゆっくりとあくびする

ひぐらしの郵便受けに何もなし

美人だと後姿に書いてある

高槻市 西谷 治三郎

父の日の無かった父は強かった

トンボリの儲かりまっかは自粛する

鵜が俺で鵜匠が妻ということか

落ちこんだ町に騒音選挙戦

追伸は温いあなたの心みる

抒情歌を耳に星見る夢みてる

リストラに負けるなみんなまだ若い

捨て台詞思慮の浅さを恥じている

高槻市 生田 義一

ぼけ防止びつしり組んだスケジュール

永らえて余生は二人前向きに

世の変化終身雇用死語となる

数々の記録残してゴジラ去る

高槻市 乙倉 武史

挨拶にお元氣ですか癖になる

健康は宝と思う病んでから

外面は老いばれ心まだ二十歳

缶ビールも冬の衣装に衣替え

高槻市 傍島 克治

成り行きにまかしまっさと無為無策

外は雪ぬくぬく顔で鍋囲む

体調を崩すはいつも休診日

黄金の穂波恋しや休耕田

高槻市 江原 秀夫

お若いと無理引き受けて医者通り

飯の世の幸せの音爪を切る

ブルマンの香りが癒やす秋のうつ

半世紀関西暮し江戸なまり

豊中市 松岡 久留美

豊中市 安藤 寿美子

お弁当余計に入れる母心
絵馬に見る人の心の哀しみを
山愛し山の魅力に散った人
擦れ違う車窓に見えた過去の人

豊中市 岸田 知香子

木枯しに早火入れ式鬼小屋
チャンスだと孫けしかける老いの意気
色付いた樹々立冬の朝の冷え
アンチ巨人バレードなんかそつば向く

豊中市 山門 タミ

先ず仏前すぐのお下がり待っている
ルーズソックス熱気漲る電車内
車椅子乗ってる方も疲れます
ああ夕日今日も感謝の手を合わす

豊中市 檜谷 郁子

紅葉の街路樹みごと樺坂
冬景色秋はいずこへ行ったやら
涙涸れひとりで歩く影わびし
いい涙流して明日を信じたい

豊中市 江見 見清

秋風が蟬の抜け殻ゆすってる
ばかばかの陽気が誘う物忘れ
お札よりカードの数が多くなる
古時計音で頑張り時刻む

羊頭も狗肉も産地不明なり
おこらした羊に追いかけられる夢
お月様旅ではお世話になりました
午前四時下弦の月をベランダで

富田林市 藤田 泰子

檜山も今は紅葉のまつ盛り
影ひとつ静かについて来てくれる
冬ごもりの穴を静かに掘っている
ありがたや節を毎日踊ってる

大阪市 西出 楓楽

マニキュアをして皺の手をいとおしむ
的ずれたお世辞にやる気消えてゆく
正論に説得力が不足する
善人の群れの中では落ち着けぬ

大阪市 前 たもつ

菊を着てここでも女上位なり
地方版以外は見ない叙位叙勲
すずしろと呼べばうるわし古代人
正業を聞かれて困る大都会

大阪市 寺井 東雲

駅前は何のご用か足早い
肌寒し紅葉前線近くなる
車内放送携帯電話いじってる
大サンマ紀州の沖でスマートに

大阪市 川原章久

極楽へ出した返事が戻らない
双方が聞こえぬふりの老夫婦
転んでから知った我が身のリミットを
あれもこれもするな飲むなで呆けが来る

大阪市 小糸昭子

はや消そう思うていたら家が焼け
形状記憶シャツや眼鏡にあなたまで
何時までも熱い胸の灯つけておこ
ソマリアで幼児の瞳が訴える

大阪市 安達はじめ

初天神孫の受験の絵馬あげる
エプロンがやはり落ちつく妻の春
さりげなく妻は急所へ釘を刺す
愛の灯がラストダンスに炎えあがる

大阪市 星野きらり

木の上で大笑いしているアケビ
ウォーキング影がよそ見をたしなめる
天高く走ってみたいうす紅葉
お誘いへ膝がくすくすわろてます

大阪市 熊代菜月

見得を切る手がだるかろう菊人形
喜寿近し夢は無限のたからもの
辛党も時々鮎をしゃぶらされ
海風いで寄りそのような夫婦岩

大阪市 鈴木トヨ子

紅葉トンネル潜り今年もありがとう
ゆつくりと羅漢に託びる事ばかり
長く生き感謝してます無料バス
白ネギの薬効信じ今日も鍋

大阪市 津守なぎさ

自家菜園ひと味違う香に浸る
ジョギングと行き交う雨の医者通い
くすり漬け抜ける努力の病もち
混んでいる神社いとわぬ初詣で

大阪市 津守柳伸

迎春へはじける夢も古希の足
初詣でほんのり匂う薄化粧
一年の計おだやかにすこやかに
風習に添うお雑煮の地方色

大阪市 中澤伽羅

秋風に御飯おいしくなりました
お友達みな美人ねと褒められる
無視じゃない気付かなかっただけの事
泣いても仕方ないから窓磨く

大阪市 榎本日の出

地球には飢餓と飽食同居させ
身長が三センチ減り重くなる
ゆずられて素直に座る歳が来る
チャック無い口からポロリ本音出る

大阪市 西川 更紗

間が持たず軽い咳して座をはなれ
柏汁で女三人盛り上り
時折はセンチになつて萎れてる
遅刻して最前列に座らされ

大阪市 伊藤 博仁

よその子の声でおもちやが騒ぎ出す
女房の終われのサイン飯が出る
アーケードの切れ目とん堀戎橋
そなあほなすぐ喜寿でつせ五十肩

大阪市 小泉 ひさ乃

古稀が来て七草粥の誕生日
学ぶ事いろいろ追つて来る余生
揺さぶれば音がしそうな骨粗鬆
温かい群で惚ける水すまし

大阪市 大塚 節子

予防注射ころばぬ先の痛さです
張り紙で今日から医療費変ります
居直つて表口から朝がえり
もうお帰りとすか女将程がよい

大阪市 中田 あい子

初日の出ひたすら祈る世の平和
難聴はお歳のせいと医者かるく
器量より心やさしい嫁ほしい
継いだ金へらさぬ苦勞する養子

大阪市 榎本 舞夢

コーヒーをおいしく入れるようになる
スッピンで出かけられない歳になり
私の喪明けましたのと赤を着る
久しぶりショートカットで逢いに来る

大阪市 本間 満津子

小さな湯船つくづく我が家だと思ひ
足を知る幸せ旬の味秋刀魚
胃袋がも一つほしい舌の欲
グイ呑みの新酒一杯秋深く

大阪市 杉澤 汀

百八つも鳴ったかと箸をおく
花見の寒さと紅葉狩りの寒さ
常夏の国は錦秋など知らぬ
電話一本の孝行ありがとう

大阪市 中村 叡子

あちこちと較べて見ればよいお国
義理欠けぬ歳暮せめても早送り
原発が冷やひやさせる綱渡り
もう一度気に入る家を西方に

大阪市 浦田 綏子

ドクターがやさしく話す恐い病氣
木枯しもつけて貰った背番号
人類のないものねだり青いバラ
癒しならハイテク犬よりうちのタマ

大阪市 清水利武

風に舞う風は平和な顔してる
嬉しさが顔に出ている金メダル
健康が一番ですよ今年こそ
日本をたて直す政治家出て来てや

大阪市 清水絹子

いよいよも延命だけはお断り
同窓会友の骨折り出席へ
恩寵の亡姉に只只ありがとう
放し飼いの猫も知ってるごはん時

大阪市 松尾柳右子

家族寄る風が温いねお正月
初仕事今年の体調祈りつつ
羊毛につつまれ深く就くねむり
銀行を出る時あたり見渡して

堺市 和田つづや

丹田に風を感じる時がある
もう嫁に行けよ行かずに居てくれよ
雨よ降れそんな気になるなぜか鬱
ペン置いて夜明け近くのブランドー

堺市 宮本かりん

自分でも読めないメモの走り書き
忘れないように反芻しておこう
履き慣れた靴で自信をとり戻す
秋の風一人占めしている紅葉

堺市 矢倉五月

この人の賀状大事に二十枚
娘を送る空港すでに別世界
棚ぼたの夢を今年は見ぬように
階段を駈けて上れるのも自信

堺市 山本半銭

朝焼けの雲に生まれた羊の子
遊びごろ思い掛けない開花する
どんくさくなつて人生おもしろい
師走風今年一入法善寺

堺市 神原文

芋を蒸すチエチエンの嵐聞きながら
自惚れてでかい空振りばかりする
遠い日の君とほろほろ酔芙蓉
忌が巡りコルク抜く手も馴れました

堺市 河内月子

柿の葉もきれいな色になりました
機嫌よう單車走らせ墓参り
いっぺんに嫁さんふたり増える新春
にぎやかな春になりそう雑煮餅

堺市 齋藤さくら

とうちゃんがガイドに代る空の旅
誉められて菊も満足庭飾る
トロツコに歳を忘れた紅葉狩り
北風に炬燵出したら動けない

堺市 村上 玄也

買うつもりない松茸の値段見る
待ちぼうけ心配もして腹を立て
禁煙の誓い今年も三ヶ日
ショーウインド覗く女房置いて行く

堺市 西村 りつえ

ノーベル賞ライトに照れる作業服
がらくた捨て笑顔飾ってお正月
今年こそ下積みバネに飛ぶつもり
こっそりと孫に貯めてる小引き出し

堺市 源田 八千代

猛暑から一足飛びに冬仕度
有終を飾る落葉に惹かれます
不祥事に世襲のポスト危ぶまれ
肘掛けの椅子で責任押し掛かり

八尾市 宮西 弥生

夢で会う亡母はどうして後向き
つきささる言葉を抜けて来た修羅場
字の書けぬ指がケイタイよう動く
文庫本秋をひとりにくれる

八尾市 吉村 一風

優しさに脆くて今日もついほろり
生き上手一歩ひかえる老いの皺
止まり木で時どき媚薬吞まされる
善人の顔板につき戻らない

八尾市 神原 まさと

隠しごとと有って無駄口多くなり
展示場これが家だと見せつける
遺言書乏しい資産書いている
縄張を妻にとられてゆく気楽

八尾市 山本 宏至

疎ましい日もあるスーパ冷めぬ距離
ばつくりを仏に願うバスの旅
あらくたい言葉にひそむ思いやり
学のある振りをするから馬鹿にされ

八尾市 長谷川 春蘭

耳遠き人との対話秋灯下
むしばめる柿の葉美し余生とは
換気扇に助け求めて秋刀魚焼く
句心を誘う山路のこぼれ萩

寝屋川市 江口 度

待つ間ほんとに疑い深くなる
真実を当用漢字では書けぬ
マツタケで埋まりキッチン笑い出す
空気より水に存在感がある

寝屋川市 平松 かすみ

五十鈴川鯉は悠々自適なり
お賽銭ふたり分だということわって
お詣りの衣装とりどりお伊勢さん
スタンプ探すおかげ横丁うろちよると

寢屋川市 籠島恵子

エンピツの先で揺れてゐたところ
あきらめたはずが辞書などくつてゐる
寝不足をいろいろ言訳に使う
もう少し干していたいのが急な用

寢屋川市 森 茜

鉄瓶がちんちん茶室ひきしまる
あさつての方を向く子に小言など
アンテナをいっぱい伸ばすかたつむり
いっぱいの論理で父を攻めている

寢屋川市 富山ルイ子

懸命に一病なだめ生きている
約束をまたもやふいにするめまい
ごちそうに作句に心弾まない
予定みな病院行きにふりかわる

寢屋川市 酒井勇太朗

古希近しラストチャンス（ニュージランド語留学）の夢叶う
ヒアリング早過ぎ左脳悲鳴あげ
ホームステイ共（共）に笑顔で孫自慢
カルチャターの違い朝昼超粗食

枚方市 鈴木政子

拉致と言う犯罪認めぬ北朝鮮
武士道の国の考え通らぬ国
リズムに乗り有頂天で骨折し
心から謝る気のない中高生

枚方市 森本節子

拉致されて帰れた人に帰れぬ人
抱き合う父娘の姿佐渡の島
しみかくし裏わざ器用にパフはたく
金銀あかね衣裳のこして陽は沈む

枚方市 宮川珠笑

洗い物夫に任せヨガの真似
強情な妻に抵抗する無口
電線の雀仲間に場所ゆずる
メモと鍵預け一泊だけの旅

枚方市 安達忠央

菊大輪天女の舞いのように咲き
一鉢の菊で我が家も秋の庭
かえり道影に悔しさきざみこみ
うかうかときをすごして古希となる

枚方市 二宮山久

初孫の声聞き我は退職す（平成14年11月末日退職にて4句）
退職の日を見つめてるカレンダー
退職の準備へ心ゆれうごく
まだまだ働きたいが社の不況

東大阪市 安永春

忘年会カラオケの部屋押えとく
呑まんでも唄でカバのお付合い
拾うた子犬可愛いリボン付けてやり
あのウソはゴム風船に入れ飛ばす

東大阪市 中岡 妙

藤井寺市 中島 志洋

人情も大鍋の内芋煮会
外食で老人ランチ探します

五体満足米寿を祝う果報者
賀状こぬ酒好きの友気にかかり

機知のある人横に居て疲れます

初詣で神と仏を梯子する

思い切り買うてストレスまた増やし

三ヶ日妻も付き合う祝い酒

東大阪市 笠井 欣子

藤井寺市 太田 扶美代

掃く手止め金木犀の深呼吸吸

三回忌母の小言がまだ続く
六十路坂ちよつと歩みを止めてみる

米をとぐ女忘れぬようにとぐ

偶然だ君も泣き虫だったのか
価値観が違つて洒落が通じない

また一人出世払いが手を合わす

一ランク下げれば気持楽になる

羽曳野市 吉川 寿美

羽曳野市 川口 信子

爽やかな目覚めを今朝もありがとう

鍋の湯気みんなやさしい顔になり

ワイシャツの衿に男の自負がある

安売りをしてお店が消えていく

眼薬をさして明日の風を読む

良い方にとつて幸せ足してゆく

スナップ写真わたしの知らぬわたし見る

堪忍袋つくろいなながら嫁姑

羽曳野市 酒井 一壺

守口市 井上 桂作

友人の医者到时々電話する

少子化で生れる子もかわいそう

モラル失墜医師に教師に責任者

二度と来ぬ今日という日を大切に

頼まれて医者となースの仲を持ち

言い訳がうまくなるほど寒くなり

割勘を言い出す女酒強し

町角の銀行の名も良く変り

藤井寺市 高田 美代子

大東市 児玉 蛙

一六時夕日は沈むべく沈む

自己暗示かけてのんびり生きている

一年をふんばつて来た年賀状

生きんが為心の隅に鬼も飼う

熱くなる割にはすぐに冷めている

逢う度に炎え上つたり沈んだり

あきらめのいい方だから利那主義

お年玉が届き今年も頑張ろう

大東市 南 原 正 和

セールスマン断る途端豹になり

風邪引くよ駆ける孫追う風呂上がり

酒呷り月に吠えたい友が逝き

野路菊も床に直せば畏まる

和泉市 岡 井 やすお

被拉致者に最早個人の自由なし

颯持って上昇気流待っている

ファックスに孫からマンガ年賀状

上には上中途半端の九十一

和泉市 西 岡 洛 醉

満点の色香漂う花の精

投棄の一粒生きる助け舟

一日を真面目に生きる髭を剃る

年金の歩幅に添うた我が暮らし

和泉市 中 川 楓

産土神さん付けで呼ぶ初詣で

怪我をして思わぬ夫のめし支度

存分にこんがらがって来し頭

洗い物済ませ見舞の友帰る

大阪狭山市 矢 野 梓

嘘ついたツケは忘れた頃に来る

お世辞だと分かっているも頼ゆるみ

露天湯に稔高は雪を着て見せる

旅帰りすぐにストレス溜まり出す

岸和田市 原 さよ子

納得のいかないままの多数決

信じない手相もやはり気にはなる

イエスよりノーの返事にいる勇氣

居眠りの出来ない席があいている

岸和田市 藪 野 けい子

飲むほどにグラスの小指たててくる

まごついてふとんのはしで転んでる

預金残利子の二円が含んでる

食卓にアメリカ産の肉カレー

河内長野市 山 岡 富美子

柿熟れる祭囃に急かされて

新生児室で光っている未来

口悪い仲間ばかりで温かい

枯れ葉舞う景気の底はまだ見えず

河内長野市 植 村 喜代

幸せは片寄るらしい閻魔帳

流行にボロを着せたり脱がせたり

阿呆なこと言っても稼ぐ芸能人

揉め事をつれて来るから困ってる

河内長野市 井 上 喜 醉

みな他人ばかりで気楽バスツアー

不器用で失敗しても気にしない

ちぐはぐな音で楽しい古時計

さあおいで霊園今なら一等地

訂正

12月号P.121

岸本水府句碑建立…………… 平成15年2月8日(土)
 当日投句「続く」早川双鳥選・「開く」土居哲秋選
 事前投句のうち「抜く」福島直球選 他は変更なし
 会費二〇〇〇円・欠席投句一〇〇〇円同封

平成14年度大阪文化祭川柳大会(54回)は、大阪市立北区民センターで11月16日、167名の参加を得て開催された。
 当日の秀句は次のとおり。(太字は同人)
 席題「移る」(川柳塔社)奥田みつ子選
 禅寺でその移り気を論さるる 辻 葉
 席題「手入れ」(番傘川柳本社)内藤 光枝選
 まんまるく爪の手入れをする介護 大内 朝子
 宿題「ことば」(川柳塔社)河内 天笑選
 一匹の蟻でことばを飾らない 柿木 英一
 宿題「時事川柳」(川柳瓦版の会)前田 咲二選
 ノーベル賞より難しいダンス 谷口 光穂
 宿題「大 阪」(番傘川柳本社)竹森 雀舎選
 なんやかや言うて大阪捨てられず 河内 月子
 宿題「隣」(川柳天守閣)中井 大八選
 お隣の水琴窟は覗かない 柿木 英一
 宿題「乱れる」(川柳瓦版の会)辻 葉選
 乱れないために何杯水を呑む 板野 美子
 宿題「風」(川柳グループ明暗)吉田 右門選
 冬二忌の風は悲しんだりしない 久保田元紀

第23回ときせん賞作品募集

雑詠2句(未発表句)
 選者 大野風柳 河内天笑 去来川巨城
 森中恵美子 小松原爽介
 投句締切 平成15年1月31日消印有効
 発表 平成15年4月号誌上
 賞 ときせん賞1名・準ときせん賞2名
 佳作7名
 投句料「時の川柳」購読者は500円(定額
 小為替)購読者以外は1000円(定
 額小為替)発表誌進呈 ▼切手拝辞
 投句用紙 便箋大(B5サイズ)用紙に作品
 2句と住所氏名を明記のこと。
 投句先 〒650-0026 神戸市中央区古湊通
 2丁目1-21 土井喜久栄宛
 選句方法 無記名清記の上、選句。一句ごと
 にその合計点で順位を決め、上位10句を入賞
 句とする。(平抜2点・五客3点・三才4点)
 ◎多数のご応募をお待ちします。
 時の川柳社

第52回 西大寺会陽川柳大会

日時 平成15年2月23日(日)開場 9時30分
 開会13時 閉会16時
 会場 西大寺ふれあいセンター
 岡山市西大寺中2-16-33
 ☎086-944-1800
 JR赤穂線・西大寺駅から南へ700m
 兼題と選者(投句締切11時30分)
 「力」 河内 天笑選
 「迷う」 前田美巳代選
 「ランプ」 前川千津子選
 「声」 小野真備雄選
 「そして」 東 おさむ選
 「煮る」 林 瑞枝選
 「弱」 西村みなみ選
 席題(当日発表) 山口 流木選
 主催 西大寺川柳社
 連絡先 岡山市西大寺上1-15-28
 久本にい地 ☎086-942-3074
 又は岡山市金岡東町3-4-16
 山口 流木 ☎086-948-3463
 岡山市ほか
 後援 協賛 西大寺会陽奉賛会ほか

自選集

迎春苦寒

喜寿にして若水湧くがごとく汲む

人形は喋らせぬことお元旦

犬の名が猫の名に似る松飾り

除夜の鐘アルツハイマーの妻と

妻ははや虚空を行けり魔界なり

拉致疑惑テレビの王座占めている

本音ちびり冗句の陰に秘めておく

やるだけはやった挙句のノンハウス

渋滞を横目にそそと駆るバイク

収賄官 暴漢今日もトップ記事

雪化粧靈峰不二は世界一

髪染めて女も一度舞うつもり

短所には触れず一家にある平和

松竹梅活けて床の間迎春にする

毒舌を吐いて老翁まだ去らず

橋 高 薫 風

榎 本 吐 来

木 村 あきら

赤色の服着て今日もショッピング

まだ少し生きるつもりを米を研ぐ (93翁)

細腕で一家支えて七十年

鉄兜石垣島に置いて来る (敗戦武装解除)

網の目は粗いが天は逃がさない

不況風心の隙間開けておく

ひたすらに光の灯る方へ行く

暗闇になつても唄う歌がある

恋人の一人に似てる曾孫出来

傘持つて来た山陰で日向ぼこ

御来光拝む若狭の歩が揃う

鳳凰の夢を信じて後を追う

祖母の数珠静かに仏との対話

五百羅漢を呼べば中から亡父の声

茶髪した男へ日本背負う日も

工 藤 吟 笑

黒 川 紫 香

小 西 雄 々

小林 由多香

さて次は何をしようか喜寿むかえ
落ち着いてたばこを吸える場所がない
老いふたり家中みんな隠居部屋
積んでおくだけで楽しい句集買う
コーヒーを一杯ずつで姦しい

斉藤 効

ガーデニング小さな知恵を子と咲かせ
花のある道で優しくなるペダル
気配りのかたち演じるミニトマト
りんご ふじ 美味しくなつて山に雪
ラーメンを啜る音をもやがて冬

田口 虹汀

筆とれば先輩の顔大映し
年賀状今年も書ける楽しさよ
今年もやれやれ暮れがそこに来た
編集長に一年間の礼申す
三十番神祭は一年間の締めくくり

竹内 紫 鏡

八十四も年男です課題文
身の内の空振りを知る不整脈
地下鉄の勾配 川の底くぐる
アマの芸巻いて届けるカレンダー
ヒヤリ地図つくるシニアの現場勘

田中正坊

ひつじ年羊の国を訪れる(ニュージーランド)
羊年 金食い虫の孫がいる
雑兵で終わる一生それもよし
大正琴わたしはいつも少数派
湯の中で労わつてやる膝小僧

玉置 重人

鼻ピアスぐらいで街は驚かぬ
私は私ものさは替えませぬ
年金で終のプランを組みなおす
都市砂漠他人の素顔はのぞかない
飽食のツケがきつちりきた肥満

恒松 町紅

いい空に染まり羊の歳が明け
いのししも八十路羊についてゆく
みかんむく故里はいま無人駅
乾杯のコップ料理が欠伸する
北風が吹くと話がこじれだす

遠山 可住

ワンカップ飲むとすらすら走る筆
お月さん新酒を唄いてくれますか
パトカーを見るとブレーキ踏む癖に
プライドへ年金泣いてばかりいる
太陽がちよっと動いて秋深し

扉を開ける二〇〇三年春よはる

土橋 螢

十七音字芸術性を問うなかれ

生きざまを人間らしく初暦

拉致をするわけではないが手を握る

年輪を一本ふやす墨をする

西田 柳宏子

頑なに煎じ薬に頼る祖母

職人の目は水準器より確か

泥んこになって体験学習する

進むよりバックの不器用さが目立ち

医薬分業FAXでとぶ処方箋

西村 早苗

体力ルンルン無料のバスに気がねして

血圧があがる気分揺れた朝

おむすびをがぶり梅干し一つ出た

見つければ笑うしかない隠し場所

枯葉路すべるな怖ごわ杖ついて

仁部 四郎

病名で知る日本語の完璧さ

服従を誓って入る手術室

付添と病人我慢の天秤棒

通院の復路にあった薬師堂

看護師の名称までの九十九折り

老いの兆しか体がだるい

爺様元氣酒好き祭り好き

知りそめし頃の容姿で夢に出る

ドラマに飽いて野球を見れば負けている

最後に釘を打ったが婿養子

野村 太茂津

正月に袖を引かれたことがある

正月は炬燵で言葉遊びする

八方破れで正月三日欲がない

心ゆたかに正月の首尾諒らわぬ

倅せな旅は今年も続きそう

波多野 五楽庵

目も耳も閉じてつららの人になる

故里の雪茫々静かなり

交差点渡って忘れようとする

自転車も私も中古の音だった

はおずきのひたひたひたと遠ざかる

藤井 明朗

初詣で世界の和平北鮮の和

趣味もって祖母の笑いも久しぶり

ひ孫のお客さま新春笑い初め

自然のリズム紅葉は消え雪山へ変身

家族の健康とそで乾盃羊年

藤村ノ女

遠く来て一句を拾う砂丘馬車
踏めば鳴る砂丘私も踏んでみる
絶景の紅葉紅葉へ深呼吸
思わざる再会互いに肩を抱く
銀髪のおえるがままの秋を着る

舟木与根一

不景気で他人の命を粗末にし
見はらしがよかった父の肩車
かまきりも青刈りだけは氣に入らず
売り物の頑固が消えて好々爺
達者だと言われ遠出の初詣

芳地狸村

町並みが京に似ている三町筋(飛騨高山)
面影に昔が残る陣屋跡
からくりのまつり屋台に酔っている
大きさに肝をつぶした大太鼓
あちこちに匠の歴史生きている

宮口笛生

盗人酒妻買物に出て行った
幸せは俺の老後に酒がある
喜寿過ぎてまだまだ元氣畑仕事
安いので助かりますワ発泡酒
これ以上呆けないようにのんでいる

森下愛論

福寿草春のリズムにふくらんで
虫メガネ斜めに見てる相場欄
リズムを覗けば多彩な人と知る
余念なくメールと遊ぶ春日暮
老いの一徹崩れぬ自省心

八木千代

もう少しで上がる椿のお綴帳
綴帳に繕いきれぬ穴の数
あるがままお見せしましう支度部屋
幕間はしつかり食事とる時間
朱の椿 ことしも朱い実を残す

八十田洞庵

化けている女の歳を聞く無礼
相聞歌今日もそらんじ髪を梳く
恋猫に内緒話を邪魔される
町はみな無口で悲しそうな顔
ほつれ毛を梳き出稼ぎの夫待つ

両川洋々

まだ余生恋の火種はまだ赤い
対岸のアフガンなどと言うとれぬ
シナリオも演出もない人生よ
コマ切れの党で政治がややこしい
ロボットもいつかはハートくれと言う

阿 萬 萬 的

好奇心あり過ぎだよと妻笑う
乗り易い自分に隙がたとある
妥協癖つくづく自分が嫌な日も
生真面目に生きて皮肉が通じない
ざりざりまでねばり切り札フイになる

石 川 侃 流 洞

始皇帝黄泉でも戦兵馬備
国の約束守る保障はせぬ判こ
禁煙奮闘もう飴玉に飽きて来た
ガンが治った体験談はチラシだけ
ふく通の肝食う話怖く聞く

板 尾 岳 人

ひとり旅逢う人もなし能登の海(能登半島 5句)
朝市に人間らしさの頬かむり
しとしとと人の情けや能登の雨
能登に来て能登のやさしき雨の中
千里浜和倉輪島も雨夢中

奥 田 み つ 子

幼子もエンやエンやと曳山やまの綱(唐津くんち)
主なき書斎にひそと座る冬
記憶力あやしくなってきた手帳
去年とは角度の違う初光
穏やかな年を願って羊の絵

越 智 一 水

草にさえ争いがある生え変り
遠回りして木犀の匂い嗅ぎ
紅葉を拾い老妻若返る
般若心経の心に映える紅葉道
かみ合わぬ歯車それでも五十年

河 井 庸 佑

添え書きのひと言温かい賀状
沈黙を守る男に深い読み
カーナビの声に逆らう天の邪鬼
見切り発車思わぬところから煙
四分六を逆転させた徳俵

川 島 諷 云 児

真実の鐘は心の奥で鳴る
横向いて何も言わないのも返事
節目かもしれない今朝の立ち眩み
フライングの癖がいまだに治らない
忘れてたときめき裸婦像からもう

河 内 天 笑

たいがいの風邪生姜湯でとばすなり
減量が出来たら飲もうあれやこれ
飲んでないので検問は恐くない
水割りや思うて飲めとウーロン茶
ウイルスは土日を選つて暴れます

水煙抄

奥田みつ子選

檀原市 安土理恵

理不尽に首曲げられて生花展

カトレアは受け唇どこか甘ったれ

正眼に構え向き合う人がない

視界ゼロ アンテナの位置かえてみる

真紅のコート女は反旗ひるがえす

冬の刑 風に追われる男の背

愛媛県 黒田茂代

コスモスの海からふわりしゃぼん玉

海鳴りの果てにまだ見ぬ夢が棲む

落葉はらはらまた逢える日のありやなし

素直に見えるように心の眼鏡拭く

リラックスして恋には遠いひととお茶

不条理という悲しみの闇がある

奈良市 乾春雄

意外性を買われチャンスをものにする

オルガンの校歌に遠い絵がよぎる

風の噂に胸のトレモロ鳴りやまず

好きな花渡れぬ川の岸に咲く

ふところにまだ飼っている見栄と意地

傾いて回る日もある夫婦独楽

高知市 小川てるみ

爽やかな風が運んで来た噂

正に秋白いご飯がよくうれる

思慕一つ抱くと心に雨が降る

石路の季節はめぐり人を恋う

平凡と言う幸せの丸い椅子

きつかけが欲しい火種は抱いている

岸和田市 亀井皎月

春浅く雪に気丈の落の臺

親切に出会い一札したくなる

長老と乾杯の辞の指名来る

少年の頃の思い出抱いた山

まだ見えぬ明日に向かって動き出す

日立市 加藤 権 悟

いくさ幾度母は独りの米を研ぐ
叙勲には遠く無冠の軍手はす
向う疵笑う男の剛毅だな
百薬の長に休肝など無縁
初日の出瑞祥大地みな光り

堺市 藤井 一二三

ひたむきに前を見つめて喜の祝
父よ母よ見そなわせ今日喜の祝
散る決意秘めてもみじの潔し
控え目に生きコスモスの揺れている
蜘蛛の糸光らせ秋日豊かなり

大阪市 三浦 千津子

心地よい目覚めで掴む今日の運
頂上のパノラマ心遊ばせる
ユーモアで人を和ます生き上手
歳末の街 ハイトーンで暮れ泥む
気を抜くとやんわりささる母の釘

香川県 原 賢

ぎりぎりの妥協がつづく夫婦箸
合併で民話の地名ひとつ消え
逝きし子に語りかけつつ墓洗う
脇道へそれそう男の土踏まず
古稀過ぎてキャッチボールがうまくなる

米子市 足立 由美子

美しく咲けと念力かけてやる
新年へ抱負いっぱい持っている
神妙な顔でお願いして帰る
感動がみんな静かにしてしまふ
太陽に活力もらいやり直す

鳥取県 澤 裕子

赤ちゃんの笑顔みじんの嘘も無い
ふるさとを歌えば浮かぶメダカたち
反抗期孫は試練の中にいる
予期しない握手ライバルから貰う
やさしさに触れて心が癒される

岐阜市 平野 あずま

四代が揃って囲む祝い膳
おふくろの雑煮が好きと子の帰省
少子高齢くにの田圃へ泡立草
積んどくの本に人間狭く住む
大輪を突如枯らした秋の冷え（友人急逝）

倉吉市 森川 あらた

嘘かくすために何度も嘘をつく
どうせならみんなに好きと言わせよう
欲いえば切りがないこと知っている
他人の目気にして仮面外せない
赤ちゃんの瞳を濁してはならぬ

札幌市 三浦 強 一

鯨鯨の吊るし切り見る雪催い
長所とも短所ともなる人の好き
貧乏神だけを残してみな出雲
鬱の字をまた確かめる虫メガネ
いい話聞くお銚子の上機嫌

秋田県 湊 修 水

老いて知る結ばれていた赤い糸
人恋ししと雨の秋の夜
勲章はマジメに生きた笑い皺
郷愁のコスモス揺れる無人駅
戦争に経済学が通じない

東京都 やまぐち 珠 美

亡き師から届くガンバレヨのエール
夜を編む秋雨の音聴きながら
友の声恋が輝く花にする
胸襟を開くと紐のない財布
苦い日々溶くひとかけのチョコレート

横浜市 金 森 徳 三

日本の良さが消えてくカタカナ語
温暖化も一つ地球欲しくなり
悔しさに昭和引きずり酔いしれる
ハンバーク母の匂いがかくし味
新世紀早や三度目のお正月

横浜市 秋 元 和 可

表裏見せて紅葉の散る美学
無添加の食がエンゲル跳ね上げる
電磁波が全部見えたら恐ろしい
生き甲斐のぶらり人間ウオッチング
想い出もそろそろ整理しなければ

横浜市 平 達 也

曖昧な記憶が連れて来る不安
なつかしみ手酌で歌うふたり酒
ほめられて個展夢見る絵筆とる
塩漬けの老後になった株価格
昨日今日変りもなくてもの足りず

横浜市 近 藤 道 子

忘れてもいいこと忘れられずいる
いつの日か捨てる写真を整理する
生き方の上手さを学ぶかこみ記事
生きていく姿勢で顔が变ります
どんな明日あるかこの眼で見るとする

横浜市 芦 田 鈴 美

ハンゲルの中で英語に救われる
オルマエヨ（いくらですか）あとは五本の指に問う
ジェスチャーも駄目でにこにこ笑うだけ
ハムサミダー（ありがとう）だけを覚えて旅終る
空港の文字で日本に包まれる

京都府 前上 英一

夫婦の会話少し途切れるもの忘れ

忘却の彼方に生きている昭和

一つ覚え一つ忘れて生きていく

人間の愚かさ戦火まだ交わす

ポケットの木の実去年を語りだす

大阪市 岩崎 公誠

無添加の軽口だから聞き流す

鉛筆でパソコンのミス書き替える

口達者以下同文で切り取られ

灰皿へもみ消し捨て黒い過去

自分史に笑いのページふやして

大阪市 伴 洋子

聞き上手相手の心読んで

読み通り事が運んで怖くなる

ほっとする場所で二人のティータイム

魂が抜けて弾けるシャボン玉

我儘な男が描く亭主像

和泉市 横山 捷也

昨日と同じ話題の老いの床

ライバルを捜して競う畝作り

贅沢に縁など無いが健康だ

後戻り出来ぬ二人で渡る橋

言い過ぎを笑いで流す妻と嫁

泉佐野市 稲葉 洋

生き別れ二十四年という時空

ただ今の一語にこもる顔と顔

この今を抱いて涙の他はなし

モノクロにグレーが占める意味がある

翳ったり照ったり世情描く空

柏原市 永浜 加津子

道すがら移ろう紅葉見届ける

退院へ小春日和のプレゼント

亡母のこと話せる姉が側にいる

孫四人バランスとってお付き合

病む夫へ紅葉黄葉を持ち帰り

河内長野市 大西 文次

誕生日松茸飯のてんこもり

軍資金ない連休をもて余し

卒寿越し大器晩成死語となる

人生はすったもんだの綱渡り

あの世から同窓会の通知来る

河内長野市 石堂 潤子

有難いののに年金にケチつける

人柄を滲ませている霞草

悔しさを言えず夢見の中で泣く

控え目な妻が握って居る手綱

婦長さんが来るとシャネルの風が吹く

吹田市 二宮 栄子

大阪府 前田 忠子

いい姑とおだてられては悦に入る
帰りたい帰りたくない児等の顔
留守番の亡夫に土産話する
久し振り一人ゆっくり夢を見る
いい家族に守られながら一人住む

枚方市 二宮 紫鳳

孫の声聞いてブルーの霧が晴れ
野仏を落葉うずめて無名寺
落葉踏む西国巡りのベアシューズ
人生のターンのひもを締め直す
退職の夫に日だまりプレゼント

藤井寺市 若松 雅枝

蟹ツアー海へストレス捨ててくる
三世代鍋を囲んで和む夜
新聞の記事から貰う今日の知恵
落ち込めば友が一杯提げてくる
主義主張曲げない父も丸くなり

八尾市 松葉 君江

耐えぬいた母の匂いの古手紙
咲きほこる牡丹知ってる父の汗
やぶいりの愚痴をとことん聞いてやる
盛り場のかげで汗かく婦警さん
病む父へ明るい柄の羽ぶとん

ほのぼのと人柄しのぶ句集読む
子の寝顔そおつと覗き疲れ取る
生きるとは入院棟で考える
糸通し亡母の仕草に似ておかし
ジルコニアダイヤモンドに似て侘し

神戸市 山口 光久

お返しの笑顔が嬉しボランティア
初孫に天下取られて初日の出
星空に大きな夢が浮かんでる
過ぎた事あつからかんと進むだけ
笑顔さえあれば明日はきつと晴れ

神戸市 両川 無限

酒タバコまだまだ旨いから死ねぬ
何もかも許すが釘は差しておく
原色の死角に白と黒がある
一本のワラにも義理が絡みつく
何もかも神の試練と受け止める

川西市 井本 清山

お見舞いに真心こめて嘘を言う
よそは余所わが家は牛のもつおでん
デートする予定はないが髭を剃る
ワークシエア妻と仲良くする老後
独り居の叔母を訪れ母偲ぶ

和歌山県 辻内次根

ワンカップ美味しい時と不味い時
冬の空雲が不安になつてくる
夜の雨ぞろぞろ過去をひきずつて
たまさかに影と意見を異にする
疑問符を持った孤独を飼ひ馴らす

和歌山県 土屋起世子

停年でかすがいになる登山靴
いつも二人花も嵐も越えて来た
歩くたび落葉鳴つて人恋し
手を鳴らす方へ進んで生きのびる
金婚式堪えた辛抱同じ量

和歌山県 中村君枝

つつがなく屠蘇酌み交わす初春の膳
知恵の輪で丸くおさめる母の愛
何不足ないと思うは他人さま
生き恥を晒し続けて早や六十路
傍に居るだけで力をくれる夫

倉吉市 前田喜美子

青畳大の字に寝て天下とる
年金が瘦せて来ました長寿国
おじいさん百面相でひげを剃り
ダイエット果物たちが魅惑する
健康器具そろえ長生きするつもり

鳥取県 細田裕子

赤いリング存在感で勝っている
反抗期親の心を子は知らず
心の窓たまには開けて大掃除
心から笑える今日は元氣です
負けん気の鬼を一匹飼っている

鳥取県 西垣美知子

山紅葉静かにゆらぐ秋の画布
数珠の手に紅葉はらはら水子塚
脇役に徹した亡母の芸学び
輝いてほえみ給う観世音
静かな夜お空に母が父もいる

鳥取県 竹信照彦

ブランターを叩き無情に降る氷雨
冬支度軒に吊した柿の色
春からの約束果す菊の花
霰降る空に炎暑は蜃気楼
何事も目くじら立てずほどほどに

鳥取県 前坂なお美

気負うからストライク球なげられぬ
夏バテの花にたつぷり水をやる
計画をたてて挫折をくり返す
出る幕でないから聞かぬふりをする
学ぶこと五十路の坂に多くなる

松江市 山根邦代

宇都市 高山清子

然りげ無い言葉に針がかくれてる
胸の奥さぐられてゐるレントゲン
欲言えばみじめが先になるばかり
幸せの秤はどこに置いてある
相棒の孫がこの頃指図する

島根県 福岡博利

長命に笑いがいいと言われても
ふりむけばわが足跡に悔いはなく
孫たちに自慢した齒だ磨かねば
出雲弁で言えば鮎愛みんなアイ
電線の泣く夜はシベリヤの冬のこと

岡山県 国米きくゑ

平凡をしあわせと読み今日も暮れ
踏んばって時を止めたい女坂
マニキュアの指で鯖ずし漬けている
生真面目な足跡亡父をふと想う
四半世紀家族の温み如何ばかり

竹原市 正畑半覚

みちのくの雲や芭蕉の顔をして
人の手のはいらぬ松の映す影
別れても消えぬ紅葉への想い
溪流を下る運命の木の葉舟
啄木の賢治のほとけの津軽富士

階段に喜怒哀楽の音があり
ついうっかり敵の意見に手を叩き
女子駅伝花の勝気の手構え
白黒をつけて友との深いみぞ
カロリーがどうあれ母の握り飯

今治市 塩路よしみ

はらはらと花びら散らす風挽歌
花切手ロマンの人の匂いする
てにをはの流れを変えて生きのびる
ためらえば逃がしてしまう青い鳥
四捨五入四捨にやさしい風の彩

愛媛県 花岡順子

顔のないメールに少女誘われる
豊作の予感土に聞く雨に聞く
さわやかな風に触れると咲き始め
こつち向いて笑ってくれたい予感
舞台裏ビエロが一人泣いている

高知県 桑名孝雄

縁あって十一桁と結ばれる
耳よりな話が減った散髪屋
過疎バスの廃止句材が消えてゆく
偽装表示ではあるまいな恋女房
雑学で育てた孫が骨太い

河内長野市 木太久 正一

健康を神に感謝し喜寿生きる

平穩に過ごして何かもの足りぬ

ドングリを拾いポツケに能勢の里

迫力の見えぬ国会老化かな

東京都 清原悦子

幸せが小さな家で弾けてる

ワンテンボ遅れた耳を掃除する

終着のない夢を追う目が綺麗

子守唄母の温もり聞いて寝る

香川県 伊勢八重子

今日のウツ月に預けてから眠る

人情に触れて戻った落し物

子と思う心が女強くする

大空と大地に抱かれ生かされる

交野市 田岡九好

反省があんまり過ぎてノイローゼ

歳をとる犬も一緒に歳をとる

昏れる日の頻伽のひびき孫の声

またもとの二人にもどる膳に坐す

岡山市 大森純子

秋咲きのバラになろうが合言葉

感動に理屈は要らぬ美術館

特訓はしましたあとはセンスです

温度差がどんどん進む父と子と

倉敷市 撰 喜子

拉致された二十四年を埋める風

後ろにも目のあるように子を叱る

花の精母ひまわりの元氣者

ブランコに揺られ大望空駆ける

箕面市 寺井柳童

駆けっこの跡ひとつずつ波が消し

改札口三つもあつた待合わせ

休刊日忘れポストに笑われる

人の世は上り下りのすれ違い

高知県 百田幸

素直すぎちよつと心配三代目

仕舞い風呂静かに今日をふりかえる

気まじめな人にジョークは通じない

飼犬にお辞儀している午前さま

神戸市 木村忠義

また雨か雲が喪服でやって来る

集中力好きなこととして取り戻す

百薬の長がこころの常備薬

心にも花をたやさぬように生き

横浜市 荒井広和

残り時間へ秒針の音無常

快方に向かうと欲の皮が張り

調律も利かなくなった老いの脳

陶酔の境に誘うクラシック

青森県 福士 トキ

つるべ落しに縄を掛けたいりんごもぎ
木枯し去つてあなたは何処の木の葉さん
教え子の還暦祝うほどに生き
年賀状送つてやりたい黄泉の国

野田市 那賀島 雅子

捨てたはずの故郷の訛舌に乗せ
つぎはぎの心を晒す秋の風
諦めを映す溜息古鏡
心まで盗まれそうな秋日和

東京都 井上 つよし

露天風呂銚子浮べて紅葉狩り
人生の荷崩れ防ぐ趣味の紐
札所巡り娑婆氣が一つずつ抜ける
もがくほど事件の糸は纏れ出し

府中市 馬場 利子

燃え上る炎を抱いて散る紅葉
青い鳥探す翼があるといい
水溜り越えて明日の虹がみえ
ベダル踏む少年包む春の風

町田市 土田 今日子

平凡な朝が始まる洗濯機
天敵は愛かもしれぬまだひとり
バラに棘わたしに翳が有るがゆえ
昭和史へ喜怒哀楽が堆い

武蔵野市 亀井 円女

妥協にヨイシヨは死んでも出来ぬ損な質
腐つても鯛は鯛だと言えぬ歳
大阪はええ たこ焼心ぶら通天閣
ペイオフなんか笑い飛ばせる果報もん

横浜市 長島 亜希子

欲がないから大賞を受賞する (田中耕一氏)
よそ様の工事の音は気に障る
山頂の宴に見知らぬ人も入れ
百万部他人の印税数えてる

横浜市 布山 嘉信

秋更けてセンチなギター歌い出す
ゴミ捨て日鴉メモリー持つている
故郷のリングが届く母の無事
歳時記に酒の口実もらい受け

横浜市 山梨 雅子

予報官寒い寒いと言いつぎる
杖ついて火事の現場を確認に
消防車音に安否の電話鳴る
あの時に許せばと悔いまだ一人

川崎市 浦野 昭志

日本中ノーベル賞に励まされ
挨拶をしたらやさしい人ばかり
拍手を打つて自分に気合入れ
子の寝顔見ると体熱くなる

藤沢市 妹尾 安子

威張つてもダメダメ影が震えてる

早起きの褒美のような富士の峰

調べれば誰も秘密の二つ三つ

服用後効能書きをじっくりと

草津市 久保 和友

二重橋ここは選挙を知らぬとこ

本物とにせものレンブラントの暗

夜警見たこの感動へ旅三日

ボクもまた独居楽しむさんま買う

京都市 清水 英旺

ギンナンのタフな臭いがバスに乗る

流れ雲のたりのたりと七変化

角ごとにモクセイ匂う散歩道

ネクタイもスーツもくつも妻の趣味

京都市 三宅 満子

大河ドラマ菊師が作る美男美女

久々に鯉とたわむれ子にかえる

時代遅れ超アナログで生きている

遊亀さんの生きざま凜として清し

大阪市 尾崎 黄紅

丁稚からという老舗の温かい

叱られて慰められた老医逝く

掴んだら掴み返してくれた愛

枇杷の種に西瓜の種のひとり言

大阪市 寺井 弘子

古里の壁に涙の跡が有る

同窓会笑いが溶かす幼な恋

一病と仲良く暮らす老いの知恵

法善寺灯りを守る心意気

大阪市 池上 清治

人の恩脳に刻むが霞みがち

七十が元気を貰う白寿の絵

行政も企業も慣れた謝罪劇

故郷の海の夕日は変わりなし

池田市 多田 契子

拾われた子犬がいつかあるじ顔

ほのぼのとする話には孫がいる

今は亡き友とひととき古手紙

大根が主役をはれる農業祭

和泉市 小坂 凡英

独居して声出なくなる電話口

年経ても苦手意識へ舌もつれ

妄念を払い切れずに経を読む

手習いを笑う自在の孫の図絵

泉佐野市 備後 三代子

一年を無為に過ごした愚か者

華やいだ吉報届く孫の声

後や先語った友の通夜灯り

事無きを祈る最後のカレンダー

大阪狭山市 羽田野 洋介

どの顔でどれ着て行こうご招待

今日だけは歳隠せない同期会

孫からも手加減される歳となる

古希近くまだあれこれと迷う日々

岸和田市 坂口 英雄

法善寺浪速の顔で通り抜け

もう一杯飲めば自慢の武勇伝

無職でも暮れは勝手にやって来る

ありがとうたくさん言つて敵はなし

岸和田市 土橋 房枝

三が日慣れぬ装い白い足袋

六十路来て生きるヒントを搜してる

S・M・Lまだ成長がとまらない

去年の今日思い出して一年忌

堺市 河盛 龍三

亡くなるとけんか相手も懐かしい

負けるのが嫌いな癖に囲碁を打つ

何故なのか理屈通りに行かぬ俺

結婚をするという娘の美しさ

吹田市 木村 無禄

老妻の帰りまで待つティータム

泣き顔は止そう僕には似合わない

初恋の夢それぞれに妻と老い

どんな夢飛ばそう今日の空は青

吹田市 須磨 活恵

逆らわず流れに沿うて溶けてゆく

たなごころ合わせて包む今日の幸

ゆつくりと命いたわる仕舞風呂

まるい石撫でると自然に輪が描ける

吹田市 木下 敏子

赤い靴小さな秋に誘われて

ボケたのかあのあれそれが多い日々

忙しい一日だった佳き日なり

ご先祖に守られている命の灯

高槻市 執行 稲子

切れる子にほとぼり覚めてから意見

白寿翁のまだまの言眩しい絵

灰汁を抜く術を知つてた灰の知恵

改めて歌う大きな古時計

高槻市 安田 忠子

市井の人嬉し忙しノーベル賞

墓参り道いっぱいに曼珠沙華

遍路旅地酒で祝う結願日

江戸の世にタイムスリップ 臘月 (於住まいのミュージアム)

高槻市 大崎 侑子

どこまでも歩きたいよな菊日和

秋風が煽る二人のグルメ旅

暗がりの日本に明かりノーベル賞

亡き友の刻んだ仏友に似る

豊中市 藤井則彦

君が代に帽子を脱いだ茶髪の子
デザートで妻と読み合うサザエさん
隙見せぬ上司と飲んだまじい酒
しゃくなほど帽子の似合う老紳士

富田林市 稲川 惠 勇

弁当を開けると妻のラブコール

役得の接待仇で胃を切られ

勲章を心に飾る定年日

好々爺苦勞ばなしの笑いじわ

寝屋川市 中川 恵 子

親の癖返品出来ず子に譲り

同窓会友を鏡と我を見る

お洒落する主婦から女へ衣替え

鍋奉行いつもと違うパパの顔

羽曳野市 吉村 久仁雄

退職日朝陽にかけが濃い大樹

玄関の妻が大樹の退職日

退職の至福アサシヤン朝ビール

ヒトゲノムに遊び心があると知り

羽曳野市 福田 悦 子

合格を願う絵馬には母ごころ

雪月花酒はぬるめのかんていい

表札に書いておこうか冬ごもり

窓の雪ベチカの歌を聞いている

羽曳野市 森 下一 知

解雇から始まる鬱の雨つづき
人柄が放つ香りに人が寄る
何気ない癖に本音を見抜かれる
父の墓洗うビンタを思いつつ

東大阪市 田 中 美弥子

急勾配へ庇い合うてる夫婦独楽

波いくつ越えて来たのだろまだ未完

喜怒哀楽の味がしみてる夫婦箸

ああ夫婦六十路に立つてほんまもん

枚方市 小川 良 吉

なれそめの妻はおきょうんな写真帖

失言が胸から去らず手酌酒

パソコンやケイタイ無いが息災だ

振り向けば挫折も人の一里塚

藤井寺市 吉田 喜代子

夜半ふと目覚めて母の寝息さく

秋に酔い童のように山くだる

一年を無事に過ごして年賀状

達筆だった人の賀状も歳をとる

藤井寺市 西村 栄 一

元日の朝ただいまと帰る職

夕焼がきれい涙は今日限り

土も満足燦々と陽を浴びて

負けまいととつさに河内弁となる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

カロリーの計算に秋邪魔をする
年金の現況届け生きてます
しみじみと庭の落葉を眺めてる
ふるさとの亡母の匂いのするみかん

箕面市 北川 ヤギエ

信号に余裕を持てと諭される
団欒の蜜柑が美味い堀ゴタツ
妻の絵に市長がくれた奨励賞
擬装だと孫に言われた白髪染め

八尾市 平川 幸枝

捨てられず苦の種になる棚の本
棚のボトル亡夫の笑顔が詰めてある
晩学の明日を調べる積み残し
仏心に半歩近づくと曼珠沙華

八尾市 驚見 章

ハワイアン流れて昼食別世界
ラムネ玉少年の日の思い出よ
窓外の山静かにねむるが如し
寝ては夢起きてリハビリ寮ぐらし

八尾市 中島 春江

秋桜したたかさ秘め煽やかに
今日は愛想よく言い誰だっけ
戀という旧字の文を手文庫に
淋しい時は鏡見る笑めば笑うよ

大阪府 畑中 節子

散る花も種を残して世を繋ぐ
老いの耳笑って済ます秋の雨
今朝の冷え霜こぼれ落つ青菜摘む
指折りて短詩に遊ぶ老いの脳

神戸市 田中 章子

さわやかな笑顔のわけは恋ですか
コスモスはあなたまかせに首を振り
暑ければ文句寒いとまた文句
いい妻を演じられない歳になり

神戸市 伊勢田 毅

待望の初孫に鷹期待する
七人の敵に負けない靴磨く
矢印に逆らいけもの道を行く
すき焼きで明日に延ばした休肝日

尼崎市 林 昭三

跡継ぎの出来が良すぎて過疎となる
七回忌小さな秘話がほころびる
あの頃は過疎とも言わず寺の鐘
猫だけの障子を明けて読書かな

尼崎市 河津 正治

墓参して重荷下ろした瞳に出会う
肩の荷も鎖もとれた日の辞表
札束の心交りに追いつけず
新しい絆をつかむフルムーン

尼崎市 桑原東園

三拍子揃わず生きる知恵が湧く
老醜も有終の美は飾り度い

来る来ない期待は淡いけれど待つ
まねぶとも読むこと学び真似る知恵

尼崎市 古川正子

秋晴れの天皇賞に馬駆ける

パパ抱く子しつかり掴む小さい手

小春日とおにぎり美味い運動会

散歩する転ばぬようにスニーカー

伊丹市 延寿庵野霧

里民話夢がひろがる囲炉裏端

スタートヘリセット出来ぬ人生譜

キラキラと街並飾るルミナリエ

産声が部屋いっぱい跳ねる朝

篠山市 谷田多美子

ブライドを捨てて雑草生きのびる

灯明を消して一人の夜が更ける

まぼろしに帽子もたせて散歩道

冥土から呼びもどしたい鍋料理

三田市 石原歳子

正倉院天平の美が目を奪う

年季入り姑の奈良漬天下一

いいなりになって波風防いでる

勘違い増えて互いに笑ってる

兵庫県 安達厚

季節感持病の方が早く知る

ありのまま生きたら呑気だと言われ

この国の行方を示す地図がない

次は喜寿次は傘寿と生きていく

奈良県 江波正純

ちぎれ雲しばし浮き世の舞を舞う

始発電車メークの仕上がり見届ける

百薬の長と交わらぬおつきあい

残したくない遺伝子も子にのこし

和歌山市 前岡健三郎

領くが納得じゃない老い二人

モンゴルとハワイが交える大相撲

孫成人夜叉も仏になってゆく

百均で充分揃う文房具

和歌山市 根田美子

吹っ切れず落葉舞うのを眺めてる

そは降る夜みんな無口で急ぎ足

補聴器は風の音までつかまえる

そわそわと孫の出産待つ廊下

和歌山市 橋爪佐一

過去の罪入れた引き出し封をする

少しでも歳に逆らい化粧する

古傷は洗えば洗うほど疼く

へそ繰りがジャンボに消える大晦日

和歌山県 森下 順子

キッチンにいつも果物あるくらし
輝いていたくていのち磨く旅
深く静かにデフレ進行する不気味
翔び終えて余生静かに羽根畳む

鳥取市 永原 昌鼓

明日実る美味しい種を蒔いている
良心も一緒に捨てたごみの山
反戦へ世界の母は旗を振る
正直で嘘がたちまち顔に出る

鳥取市 岡田 信恵

山里に軒並赤く柿すだれ
冗談が本気になって輪がくずれ
幸せのすき間に風邪が舞いこんで
一言が思わぬ深い傷となる

鳥取市 西尾 敬之介

秋祭り踊る若手はアルバイト
老骨も諸肌ぬいで秋祭り
みかん狩り老いの欲目で汗をかく
松葉ガニ高値で売れて酒弾む

倉吉市 青砥 菊枝

赤ちゃんの目が見つめてる恥ずかしい
静々と悲喜交々の野辺送り
年輪を納得してる顔の皺
実力はあれども運がそつぽ向き

米子市 小塩 智加恵

深呼吸して錦秋を胸にため
美人にはちよつとやきもちまだ女
化粧下手人形の顔画くは好き
胸を刺す言葉を溶かす薬飲む

米子市 猪森 スミエ

曾孫抱き老化防止と言うページ
大法螺を吹くとランプが消えそうだ
反核の力集める輪に入る
秋夜長ランプ引き寄せ読む漫画

鳥取県 奥田 保子

人間のエゴに地球が悲鳴あげ
子育ての秘訣半分誉めること
ふれあいが心の刺を引っこ抜く
時たまの愚痴なら聴いてあげましょう

鳥取県 岩崎 和子

菊花展まつと利家生き返る
少しでも元気に生きる赤を着る
いつの日か輝く私自然石
和紙人形私の心織りこんで

鳥取県 竹森 富久江

陽の零れゆらしサザンカ目を覚ます
眸を凝らし未来の風に遭うつもり
おばあちゃん雨が違うよ驚くる
母の掌に居眠りできる丘がある

鳥取県 橋谷 静江

浮き沈みしながら広い海へ出た
転ぶたび闘志を燃やし生きている
ありがとうその一言に気が安む
無口だが父の一言威厳あり

鳥取県 山下 節子

静かさの中に一人で居る怖さ
逢いたくてアルバム帳を出してみる
この顔もキャラクターです温かい
キャラクターになりきっている孫二人

鳥取県 鈴木 一弘

落ち葉焚く煙に懷かし友の顔
夕焼けが稲田を染める過疎の村
ときどきは野末地蔵に会いにゆく
手鏡をひとつ残して逝った亡母

鳥取県 吉田 弘子

女三人静かな人がよく目立つ
少子化のサムライ様が闊歩する
髪一本DNAの鍵握る
拉致疑惑静かな祈り未だ続く

松江市 松浦 登志子

昼の月いつも無口で気にかかる
天ぶらをますます好きにさせる秋
雨の窓許可をいただきまする読書
雲低く点 点 点と夫婦鴨

松江市 松本 知恵子

くるくると世情変われどサンマ焼く
いち日は眺めることにラフランス
本当の涙忘れているビエロ
船出した自由な海が吠えている

出雲市 川島 和歌子

折々の花で和ます無人駅
十五夜の月を砕いて露天風呂
控えめで無口な人も孫自慢
無人市秋の味覚の勢揃い

出雲市 加藤 スズコ

青空に叫んで見たい人がいる
陽が沈む匂う暮らしの窓灯り
鮮やかにびっくり水で色を出す
歳月が許す心になっている

鳥根県 菅田 かつ子

スマイルはいま美容院出たところ
ナイフフォークわたしはやはり箸がよい
お月さま地球この頃荒れてます
哀愁の中できらめくもの拾う

鳥根県 武島 ちよえ

目に映る皆真新し年明けて
喜寿すぎて次は傘寿と欲が出る
文化かも短語横文字カタカナ語
人寄せて弾む他愛のない話

岡山県 土居 ひでの

夫という強い味方を忘れがち
まごころを総身に嫁くと決めている
冗談のうちに内緒をほのめかし
変化球投げて相手の出方待つ

松山市 山之内 八重美

四万十の落鮎狙う手投網
人と人つなぐ言葉が温かい
もの言わぬ母へ詫びたい事ばかり
日本一温州みかんのある誇り

今治市 野村 清美

百態の花を演じる万華鏡
御無沙汰を記念切手で詫びて出す
旧姓の少女にかえるクラス会
趣味持って明日へ燃えてる余命表

今治市 渡邊 伊津志

有難うみんなに言えて惚けてない
損な質損な遠慮をして嘆き
感動はものの哀れを知る心
瞑想と憧憬が湧くチェロの音

愛媛県 安野 案山子

チェーン巻く峠で聞いた安来節
悪友と腹の底まで酌み交わす
飲み会の父いそいそと鍋奉行
廃屋になった母校と夕暮れる

南国市 小原 圭二

番号で呼ぶ病院に返事せず
夏の傷乾かしてゆく秋の風
スーパ―ヘタクシーで来るおばあさん
かすがいも取れて夫婦をやり直す

高知県 近森 功

定期検診ナースの笑みをもらうため
白髪染め茶髪にかえた祖母の春
年金を孫の愛車に投資する
八十の余白に植える花の苗

高知県 貞岡 佐紀子

秋桜ゆれて国体幕を閉じ
淋しい日心が弱る妥協する
振り向かずリハビリの母生きている
茜雲に倅せ色を捜しだす

北九州市 岡田 幸生

減反の田んぼの愚痴を聞く案山子
娘の愚痴を溶かした母の笑い皺
妻の吹く笛に合わせる年の暮れ
雪国の樹に雪吊りというお洒落

アルゼンチン 松井 美稚子

老梅も出番を構え人生譜
ドル紙幣不況焦らず居待月
言い訳はタバコの吸いがら役立たず
子の系譜夫婦移民のちぎれ雲

寝屋川市 岡 本 勲

和歌山市 今 一 歩

定年を迎え素顔の父になる
定年で野心キッパリ捨てている
辞書友に漢字に挑む老いの日々

堺 市 梶 本 哲 平

美しい日本の四季のスクリーン
プロットは癒しの映画寝てしまい
海が見えるお寺と句碑と坂道と

米子市 猪 森 スミエ

(前月分)

万歩計つけたとたんに背なが伸び
褒め上手叱り上手に育てた子
歯並びが自慢リングの丸かじり

海南市 堂 上 泰 子

子犬のワルツ画像メールに添えられて
ゼロからの出発誓う日本晴れ
絵手紙の花より結ぶ友との和

鳥取市 森 美智代

身の丈に合った暮らしの二DK
決心の付かぬ冷たい雨続き
街路樹の黄色拾って秋を行く

堺 市 萩 野 像 山

形容詞並ぶお膳に笑みあふれ
酒うまし紅葉まぐらの岩魚皿
寒かろうと墓石に魔法びんの酒

球根の植え付け済んでこころ春
OB会タイムスリップ弾む声
秋日和友を誘って遠出する

大阪府 藤 井 郁 代

スケジュールに強迫される大掃除
年賀状届くはずない友偲ぶ
孫達と新春祝い弾む声

新潟県 高 野 不 二

カラオケになると会議にない元氣
年金をまたおびやかす慶弔費
酒止める話賛成者がいない

鳥取市 横 田 春 名

ふわふわの愛実らせて古稀も過ぎ
ちらちらと歯の浮くお世辞さな臭い
散会后反対意見かましい

藤井寺市 俣 野 登志子

はやくから額のシワがまた増える
いいのかな私も女性専用車
仕切り屋が二人居るからよく揉める

東大阪市 今 岡 貞 人

晩学にまだまだ涸れぬ海がある
傘寿過ぎまだまだ望み天を衝く
気の若さ余生の芸に艶が出る

秋田県 秋野 宏

封を切る愛をもらさぬように切る
逢いたくてバラは真赤な風になる
広辞苑老いの知識の杖となる

日高市 根岸 方子

雪が舞い野良着の亡母が目につぶ
飲み会は匂いだけでも酔ってます
心には薄いベールの旅の宿

横浜市 石原 三郎

寒暖計見てから急に寒くなり
元旦の孤独酒でも癒されぬ
医療費の負担がひびく縄のれん

川崎市 大島 三四朗

さんま焼く煙り気遣う換気扇
地下街で出口が消えた老い二人
カルチャアの晩学もえて無限大

静岡市 中西 雅

花びらの来る来ないかと占う娘
逆縁で狂わす神のいたずらか
瀬戸際の息子の声が断たれない

大阪市 中村 忠敬

作業着の人に好感ノーベル賞
ウォーキング紅葉の道を万歩計
夫婦ですカラオケデュエットよくハモる

大阪市 辻本 登季子

何事も言わぬが花と昔人
年金で生涯学ぶ戦中派
愛犬のしつけに悩む老夫婦

大阪市 平井 露芳

ごろごろが一番楽と動かない
血液も脳も元気で今日も無事
神仏を恐れ台風近畿それ

門真市 矢阪 英雄

仕事減り句作専念まぎらわす
川柳と俳句の垣根どう跨ぐ
相手にはならんと結果口閉じる

河内長野市 印藤 智子

一月号目出度い川柳作られず
孫からのハリーポッター持て余す
旅行前遺書を取り出しチェックする

岸和田市 森元 ふみよ

外相と参与女性を見直され
古希で尚輝きの増す薄化粧
隣国を知れば知るほど不気味です

岸和田市 雪本 珠子

酒のせいみんな美人に見えている
マンションの窓は浮世の走馬灯
湯豆腐でひっそり過す京の宿

堺市 柿花和夫
職業はフリーターです平和です
無機物のように生きても腹は減る
鰯鯖の見分け教えて嫁がせる

高槻市 田中千枝子
不眠症かこつ患者の高軒
言い訳の嘘に相槌打っておく
怒ってる自分がいやでなお怒る

羽曳野市 濱口フジ
木枯しが吹いてさらした柿の味
秋の七草目にとめながら畦の道
いにしえのロマン思わす妹子の墓

羽曳野市 永田章司
女房が重い財布は持たせない
石畳大阪匂う法善寺
石ころに躓く足を叱咤する

枚方市 莊司弘之
借りた恩汗して返すボランティア
故郷を唄うと何故か涙目に
未年 あはやささと温かさ

枚方市 大昇隆広
外は雨来ないあなたの訳作る
母言わずいい息子かと子も問わず
Uターン胸から潮香消えぬから

藤井寺市 喜島芳江
終電は疲れて帰る顔ばかり
我が家には亭主閑白まだ残り
母連れて散歩の歩幅せまくする

八尾市 田中トシエ
小刻みに生きる三年日記買う
福袋他人のつめた夢がある
てのひらに自分史重ねほりごたつ

八尾市 與田明
晩秋初冬脱いだり着たり忙しい
七五三お祝いごとに増えるしわ
文化の日せめて書棚の埃拭く

大阪府 野田栄呼
鍬や鎌持つ手がベンに汗をかく
よく眠りよく食べ歩き靴笑う
案じてる不自由知らぬ子の鰻

大阪府 東文江
棟上げのつち音はずむ清き空
年ごとに口数多く手はにぶり
自然から仕事をもらう落葉はき

大阪府 高木道子
リハビリで明日の元氣予約する
フレイになれなかったね落葉焚く
木守柿夕日に光り自己主張

恩返し出来る頃には親はなく

大阪府 小 栢 こずえ

白い雲乗れば天国行けるかな

一寸出た軽い言葉で傷がつく
心がけ重い荷物も軽くなる

生駒市 小 西 稔

過去忘れ今が良ければ幸とする

三角の帽子なつかし時計台

大阪府 桑 田 ゆきの

動くとも見えぬ秋蝶掃き兼ねる

食べ物にお国確かめ買っている

和歌山市 宮 本 三喜夫

幸運は作業服着た律儀さに

謎とけぬめぐり合わせの運不運

苦を楽に包む風呂敷探しおり

折角の詩集計画未刊です

姫路市 服 部 一 典

床の間の造花へ妻の小旅行

気配りが過ぎて迷路に入り込み

和歌山県 村 中 悦 男

主人のうつに泣いている床柱

階段は老いの程度の試験場

貧しさが親子の絆離れない

さからえぬ定めと抱いて妥協する

兵庫県 岩 本 美緒子

山陰道娘の運転に乗った旅

ハンチング老いの散歩が増えている

和歌山市 北 村 光 男

宍道湖畔の予約ホテルへ母娘連れ

妻の声うしろで聞いて塵芥を焼き

霧に勝てず紅葉大山ユーターン

躓いた指の痛さを子に教え

兵庫県 黒 崎 美紗子

苗交換話のはずむ和やかさ

白菊を生けて眺める茶の美味さ

鳥取市 山 口 千代子

目くるめく秋いっぱいの花会場

控え目に地味に咲きたい老いの花

近況の話題のつづく電話口

先よりも今日を元気に生きる幸

奈良市 田 中 賢 治

草原に紙飛行機の夢が舞い

芋洗い夕陽がてらす丸い背な

鳥取市 谷 岡 清 子

傷口へノーベル賞が元気づれ

あわし柿たべて血圧下げている

目を閉じてトライアングル聞く父兄

紅葉をめでて一人の錦絵か

鳥取市 大坪 天涯
親らしいことはなんにもせずに飲む
突つかれた傷を残して梨熟れる

瞬間に出る言葉だけ真実だ

鳥取市 河田 のり代

城までも税に消え行く御時勢だ

若い風吹く日待ちわび暦読む

炎燃え陶芸の道百までも

鳥取市 近藤 秋星

皇后になられる方と語を交わす
(奉迎)

雅子さま春風のように温か味

終生の思い出になる方と会い

倉吉市 大下 智子

子の古い人形ケース捨てられぬ

広告に誘惑されて貯まらない

夢貯めて老後の為に残してる

鳥取県 平木 公子

輝いて百歳生きる好奇心

褒められていつそう菊は咲き誇る

ストレスを紅葉の山へ捨てて来る

鳥取県 山岡 久枝

霜おりて一段うまい大根煮る

母娘です娘はグレー母は赤

今日だけの花で終らぬ水をくむ

鳥取県 松川 行男
天照以来女性がもてた国
人垣に火照った花は散りにくい

夕日にも手を合わす人居りました

鳥取県 蔵本 悦子

コスモスよ冬が来るのに恋はまだ

還暦が今も反抗して困る

雨風に耐えておいしくなつて行く

鳥取県 平尾 菜美

目に余る気まま風でも許されぬ

鍵の合う扉にめぐる春うらら

報われぬ事はさておくいい日和

鳥取県 岡村 孝明

省エネは時代の流れ我が家でも

聞き上手つられて話し止められぬ

北風が風紋美学語らせる

鳥取県 池澤 大鯨

先送り不精決めこみ旬を過ぎ

老友の集う場所ありせめぎあい

淡きこと水のごとしの友ばかり

出雲市 荒木 英子

嬰兒の柔らかな指頬に寄せ

犬は素直に猫はクールに生きている

前向きの人生歩む老いの知恵

秋の月私の願ひ聞いてくれ

出雲市 梅

ミツエ

赤とんぼ秋の香りに酔つて飛ぶ
デュエット曲男女で歌う楽しさよ

安来市 原

煩惱児

墨を摺るゆとりで父の候文

人徳という知恵もある聞き上手
根っからの好きだと思ふ酒二合

島根県

毛利

幸

人間が地球の機嫌悪くする

減塩し加減いろいろ台所

神仏を信じて暮らす背に学ぶ

島根県

松本 聖子

子や孫を恋うる雨の日明日は晴れ

お互いにワンクッションの嫁姑

立冬に夢破られるもがりぶえ

島根県

持田 多輝子

口利きで首をとられる永田町

石つぶて心の憂さが弧を画く

雑魚だつて鯛に負けない自負がある

府中市

岩本 雅代

山陰の宿はおいしいカニづくし

茶柱が今朝のうれしさ置いてくれ

いい仲間旅のお宿は花ざかり

松竹梅生けた田舎に嫁が来る

香川県 松村 輝夫

口添えて目頭潤む芽出たい日
嫁ぐ娘に裏口開ける親心

香川県 向山 治延

海峡に吹雪舞うよな津軽三味

雨あがり傘杖にする峠道
バイバイしてまだ立つて居る母の傘

愛媛県 宮本 末子

老農はくさび叩いて鋤始め

死ぬと言う大事なことがまだ残り

妻病めば平和な家が乱れたす

唐津市 坂本 兵八郎

良性のポリープでした秋祭り

老い二人輝く知的好奇心

コスモスの咲く女子高の通学路

宜野湾市 杉谷 一栄

私生活何も知らずに趣味の友

差込んだ月の光に手を合わす

ライバルに空けられている車間距離

予 告

第九回川柳塔まつり（アウィーナ大阪）

平成十五年十月五日（日）

同人特集

私の一句

白日紅虹 灯台と喜寿よき友ぞ
 悪人もうれしい時は笑顔よし
 年寄り少し惚けてるのが可愛
 ありのまま生きて卒寿の笑い皺
 走っても終着駅のない悪夢
 長江（揚子江）の水海水の嵩を上げ
 舞い扇老いの心に春を見る
 一隅を照らして生きた父のペン
 弾みから言うた世辞です悪しからず
 有名になったらサインしてあげる
 長男の嫁とはこんなものでしょう
 雨よ雨やさしく戻れ広い海
 人待ち顔の犬と目が会う風の中
 息抜きのつもり天声人語読む
 ふり向けば一年ほどの哀しみぞ

弘前市	鳥取県	島根県	国分寺市	和歌山市	岸和田市	和歌山市	豊中市	香川県	香川県	相生市	出雲市	和泉市	堺市	豊中市
波多野	小西	西村	酒井	田中	高須賀	桜井	田中	工藤	木村	中塚	園山	岡井	河内	橘高
五楽庵	雄々	早苗	輝	みね	金太	千秀	正坊	吟笑	あきら	礎石	多賀子	やすお	天笑	薫風



懐に包んであげるさあお泣き
他人よりも小さい器に幸を盛り
石ぬれて石と語るも春の雨
魂をすっかり抜いた花の毒
老木にまだ花咲かす根が残る
嫁自慢出来る私は幸せだ

煩惱をシックに包む秋の風
菩提樹の下で勝ち負け口にせず
酒飲めて妻あり八十路竹を踏む
銃口を持つ少年の遠い道

見て見ないふりして女を見て居ます
お山に雪が降り安堵する津軽
霞を食って一〇〇〇号に生き残る
学校のポプラ時効にしてくれる
振り向かずひたすら走る古希夫婦
絵手紙に包んだ旅のいい話
お互いに灰汁取り合って夫婦鍋
ちぎり絵の港で眠る冬ほたる
ふるさとに道路一本村が活き

四条畷市	高知市	今治市	鳥取市	鳥取市	大阪府	吹田市	奈良市	八尾市	横浜市	尼崎市	弘前市	京都府	松原市	十和田市	岸和田市	松江市	東大阪市	松江市
吉岡	川竹	越智	倉益	岩原	安達	藤村	天正	吉村	小野	黒川	櫻庭	稲葉	小池	阿部	芳地	津川	森下	小川
修	松風	一水	一瑶	喬水	はじめ	メ	千梢	一風	句多	紫香	順風	冬葉	しげ	進	狸村	紫晃	愛論	注湖



お先にどうぞ少し利口になりました
ペン先が嵐に向かう芯がある
居酒屋へ苦勞を知った顔でゆく
菅公は梅の香に酔い絵馬に酔う
大工さんの作った家に住んでいる
わたしにも出来る笑顔で輝こう
転んでも命輝くまで走る
隅に咲く花も微笑み忘れない
あいまいな返事で風を読んでいる
だまし舟あなたと漕げば海は風ぐ
生かされて友の恩気が身にしみる
奥の手はまさかの時にとっておく
均等法男も子ども産みなさい
如月の事故からずっと疎遠なり
まだ女淋しがりやで身勝手
雪月夜こっそり一人歩く幸
戴いた命に感謝して生きる
取巻きがいいからきつといい人だ
たくさん温もりもらい生きている

熊本市	大阪府	宝塚市	茨木市	東大阪市	鳥取県	岡山県	吹田市	大阪市	大阪市	出雲市	藤井寺市	海南市	和歌山市	大阪市	弘前市	鳥取市	鳥取市	香川県
永田	八十田	嵯峨根	藤井	谷口	羽津川	大石	野下	河井	星野	小白金	中島	三宅	玉置	津村	蒔苗	岸本	岸本	川崎
俊子	洞庵	保子	正雄	義乃	公乃	あすなろ	之男	庸佑	きり	房子	志洋	保州	当代	志華子	果林	孝子	宏章	ひかり



ラッキーな旅富士山が見えかくれ
花ざくろお前はいい娘刺がない
細く長く続いた家計簿の重さ
花筏ゆらりゆらりと春が行く
乗り替えの旅が始まる喜寿の駅
じんわりと何時か効き出す父の鞭
腹立てた時の笑顔は面白い
親不孝八月三十日生まれ
地団駄を踏んで男の靴が減り
妻に無い優しさを見た昼の月
信号のたびに仕上がる娘の化粧
悲しみへマイク突き出すインタビュ
ー
弱虫で神に頼って生きている
梟雄は邪神と亡ぶ日本書記
いつまでも手を振る母の田んぼ道
橋杭岩息飲む自然夕陽炎ゆ
地図にない花野の果ては何だろう
一行の自筆の重み年賀状
花愛でる皆善人の顔に見え

大阪市	伊丹市	唐津市	河内長野市	河内長野市	海南市	鳥取市	大阪府	吹田市	倉敷市	唐津市	堺市	伊丹市	吹田市	香川県	大阪市	美称市	神戸市	大阪市
津守	山崎	久保	植村	水谷	谷口	西村	西村	太田	小野	樋口	村上	小川	早川	清川	津守	安平	池田	松尾
柳伸	君子	正剣	喜代	正子	義男	黙光	隆盛	昭	克枝	輝夫	玄也	江美	棲世	玲子	なぎさ	弘道	善守	柳右子



単調な日々うちろちよろで消えてゆく
神様でないので悪いこともする
バターを溶かす程の温さは持っている
一枚の踏み絵に野心試される
師の技を盗んで弟子が脱皮する
春夏秋冬故郷のお山は美しい
螺子を巻く私を待ってる八角時計
一本の葦であらんと立ちつくす
初あかり宇宙のすみでたしかなる
第一ヴァイオリン弾くてっぺんの柿一つ
し残したまだがあるので生きられる
偏屈と正義感とが見詰め合う
満天の星に会いたい街ぐらし
大声で唄う音痴に笑みもらう
やさしさは痛みいっぱい知ったから
少年のピアスが光る盆の墓地
ラッキーマン愛の指令をまるく抱く
マイペース凡人でよし目刺焼く
うっかりの教で増えてく笑い皺

岡山市	奈良市	藤井寺市	和歌山市	大和郡山市	米子市	出雲市	羽曳野市	米子市	米子市	西宮市	西宮市	西宮市	西宮市	鳥取市	米子市	吹田市	和歌山市	奈良市	熊本県
井上	宮口	高田	青枝	坊農	澤田	石倉	吉川	白根	八木	門谷	坪井	山本	権代	木村	岩屋	松原	米田	高野	宵草
柳五郎	笛生	美代子	鉄治	柳弘	千春	芙佐子	寿美	ふみ	千代	たず子	孝一	義子	康女	富美子	美明	寿子	恭昌	宵草	



氷雨降るきびしい音をひとり聴く
人間の匂いがしない人が増え
マジシャンの箱から鷹は出てこない
紅ほのか白木蓮にあるところ
世紀越えここに陽の目や一葉忌
過去未来今日を生きてるシャボン玉
塩壺に天下の頃の姑がいる
目が合うて以心伝心する本音
音痴だが今日も与作の仕舞風呂
地図にない川を渡って父母還る
セコムマーク貼って新築出来上がり
本物の光り本物知っている
長生きはうれし疎ましこの矛盾
ほろびゆくものみな美しい花火
いい日だった茶漬けゆっくり胃に落ちる
大柄な妻が酸素になつてくれ
捨て犬を孫の涙に負けて飼う
生きている今日という日に深呼吸
広辞苑開いて閉じて手になじみ

大阪市	宇部市	京都市	堺市	大阪市	弘前市	堺市	寝屋川市	唐津市	和歌山市	八尾市	松原市	吹田市	広島県	羽曳野市	鳥取県	岸和田市	大阪府	寝屋川市
大塚	平田	高島	神原	清水	一戸	西村	岸野	井上	木本	神原	玉置	瀬戸	藤解	徳山	黒田	原田	米澤	平松
節子	実男	啓子	文子	絹子	ツネ	りつえ	あやめ	勝視	朱夏	まさと	重人	まさよ	静風	みつこ	くに子	さよ子	倭子	かすみ



美しい花に意地悪したくなる
風呂敷も夫婦結びが嬉しそう
生命線きょうはきれいに延びている
金持ちはケチケチだから金貯まる
人間のどこかに光るものがある
あくせくと生きて未だに遊び下手
母さんの紙袋から鳩が出る
無い無いと言って海外行く不思議
とほとほと裸踊りが宴を去る
子を産んでこの世を仮の宿とせず
歳月と言うくすりに任す時がある
時々は狡い眼鏡もかけて見る
ステップを弛めて夫と歩を合わす
それぞれの揺れで吊り橋渡り終え
いつ仏になれる石屋の隅にいる
少年のボールが空を突き抜ける
うどん屋は肩の凝らない旅仲間
白桃に刺激与えてしまう指
目覚ましを止めたことだけ覚えてる

大阪市	大阪市	池田市	箕面市	大阪市	大阪市	高石市	横浜市	枚方市	樺原市	米子市	出雲市	大阪市	芦屋市	富山市	東京都	米子市	藤井寺市	川西市
寺井	鈴木	栗田	岩津	前	板東	浅野	田中	宮川	居谷	野坂	岡	神夏磯	黒田	舟渡	播本	木村	鴨谷	西内
東雲	トヨ子	久子	ようじ	たもつ	倫子	房子	笑子	珠笑	真理子	なみ	あきら	典子	能子	杏花	充子	春枝	瑠美子	朋月



長らえて心静かにやる誓い
日本には気のいい神サン仏サン
初孫の育ちへかける電話ベル
親切にされてげん顔を
ふるさとにだあれもないかくれんぼ
台所磨いて今日も恙なし
カレンダー印はお金出ていく日
春を待つ心へほろり梅ほろり
健やかに一汁一菜掌を合わす
生れし時死す時命つつむ白
淋しさと自由の城にひとり住む
お松明走って春だ火の粉撒く
わたしにも一票がある利用価値
年金の杖は下まで届かない
わきまえて野原は木々を欲しがらぬ
つき当たる壁に初心を掘りおこす
大らかに迷う羊になるも良し
不景気にしてはでっかいゴミ袋
満月の声を聞こうと寄っていく

高知市	豊中市	枚方市	豊中市	出雲市	東大阪市	大阪市	島根県	鳥取県	西宮市	大阪市	姫路市	篠山市	八尾市	鳥取市	出雲市	寝屋川市	大阪府	米子市
北川	安藤	二宮	吉田	吉岡	指宿	玉置	榑原	林	緒方	川久保	古川	遠山	村上	有沢	岸	堀江	澤田	政岡
竹萌	寿美子	山久	あずき	きみえ	千枝子	英子	秀子	露杖	美津子	睦子	奮水	可住	ミツ子	せつ子	桂子	光子	和重	日枝子



うらなりの茄子にもあつたへたの棘
夢も現も愛憎の草枕

雪燦燦たのしい便り待っている

カタツムリお前も宇宙目指す気か

お化けよりお菓子が怖い血糖値

土俵からふみ外したい時もあり

距離感をとっても大事にして夫婦

吐き捨ててみても同んなじ血が流れ

雑音の中にもあつた天の声

ああそうかそうだろう俺の孫

うたた寝の顔年輪が浮いている

祈らねば今の平和が逝きそうで

大切な人の記憶だけ消えず

白い雲手をつなぐように流れ去り

これ以上譲ると消える目鼻立ち

ことごと煮詰めた味になる夫婦

綿毛ふわふわきれいな山へ子を生みに

笑うより外はないので笑つとく

空襲の話になると起き上る

大阪市	堺市	八尾市	鳥取県	河内長野市	大阪市	八尾市	東大阪市	富山市	倉敷市	兵庫県	八尾市	大阪市	豊中市	黒石市	竹原市	鳥取県	鳥取県	鳥取県
杉	山	宮	土	山	小	宮	笠	島	野	大	内	西	江	相	古	田	土	岩
澤	本	崎	橋	岡	林	西	井	島	田	谷	海	出	見	馬	谷	村	橋	崎
汀	銭	半	シ	睦	ト	弥	欣	ひ	素	幸	幸	楓	見	一	節	き	み	み
		子	子	子	メ	生	子	かる	身	次	生	楽	清	花	夫	子	螢	江



父と娘に似て鉄道橋ハープ橋
磨かねば脳が退化を狙ってる
プライドを捨てた数だけ丸くなる
体力に応じた亀の歩を守り
生き方を問うには石が丸過ぎる
そして今わらしべ長者の手にミカン
春夏秋冬待ち呆けには馴れている
散る日まで熱中出来るうた愛す
やがて娘も知るだろ川の深さなど
家にある時計それぞれ違う時
トップにもビリにもならず越えた坂
ぼけ防止夫婦で歩く道がある
二十年未だ生きている腕時計
たった一夜舞うた死骸が落ちている
争いのもととは神様違うから
口だけは達者で酒の壘が空く
ころ磨けば渋い光を放つだろ
良い方に解釈しよう空も澄む
時空こえ喜怒哀楽を知る電話

町田市	和歌山市	富田林市	東京都	西宮市	竹原市	和歌山市	米子市	尼崎市	交野市	松江市	八尾市	交野市	愛媛県	亀岡市	松江市	大阪市	弘前市	東大阪市	
竹内	福本	片岡	後藤	牧	岩本	西山	光井	長浜	森本	銭山	生嶋	山川	山中	中居	井上	恒松	町田	宮崎	安永
紫	英	智	早	富	笑	幸	玲	澄	弘	昌	ます	日出	善	森	森	達	ヒ		
錆	子	恵	智	喜	子		子	子	風	枝	子	子	信	生	紅	子	子	子	春



矢印がほしい人生まがり角
生きるため一匹ぐらい鬼も飼う
身の丈に合ったくらしが温かい
逆風の中で女を立て直す
残された余白急がぬことにする
明日が有る明日の光を期待して
墨の香が好きで筆とる月冴えて
大地踏む足だ太めの方がいい
さびしくはないとさびしい声でいう
未来図を書けなくなった若い人
仕合せを押し戴いて生きている
息子には輝く汗を見せておく
葉の小さきは小さく宿す露の玉
戦争をするなと柿の木が叫ぶ
W杯水に飛び込む群の音
出し合えば人間の知恵限りない
バスに乗り遅れてもよい歳になり
自由席だから皆なが寄ってくる
神様になるテストなら受けようや

大阪府	大阪府	和歌山市	松山市	砂川市	大阪府	高槻市	鳥取県	藤井寺市	横浜市	出雲市	米子市	弘前市	鳥取県	泉佐野市	鳥取市	西宮市	和歌山市	鳥取市
小	大	吉	宮	大	本	井	西	楠	菊	佐	鷺	今	新	山	小	長	牛	春
泉	川	村	尾	橋	間	上	原	地	地	藤	見	愁	家	本	林	谷	尾	木
ひさ乃	桃花	さち子	みのり	政良	満津子	照子	艶子	昭子	政勝	治代	正子	愁女	完司	蛙城	由多香	緑良	圭一郎	



説得が利いて柱が太くなる
年々歳々同じ想いの年用意

毎日が元気でボカの二つ三つ

テコ棒になりコロ石になり女房

研修会ちよっと勉強しては飲む

ほんとうの仲間だ痛いことも言う

あじさいは一雨欲しい色で咲き

長かった峠をこえた海の色

一番近くて一番遠い空が好き

生かされて無限の慈悲に手を合わせる

揺れながら吹雪に挑む葦となる

偽ブランドこころ豊かに身につける

織り上げて絹に木綿になる言葉

さざ波の浜辺に母とさくら貝

期待させがっかりさせて子は育つ

今日という一日の味まろやかに

大自然シャッターチャンス無限大

ネジ巻かれ回る人形になれぬウツ

くすぐれば僕の裸はまだ笑う

出雲市

岡山県

大阪市

鳥取市

唐津市

和歌山市

和歌山市

米子市

京都市

生駒市

倉吉市

鳥取県

出雲市

和歌山市

吹田市

倉吉市

大阪市

東大阪市

藤井寺市

伊

矢

川

武

宗

細

堀

中

都

飛

最

石

城

松

穴

山

榎

中

太

藤

内

端

田

帆

水

稚

端

井

倉

永

上

谷

尾

吹

中

本

岡

田

玲子

寿恵子

一歩

帆雀

水笑

稚代

三男

ゆき

求芽

ふりこ

和枝

美恵子

多喜

和香

尚士

康子

舞夢

妙

扶美代



後に続く者を信じる大夕日

魁けて寒梅凜と香り立つ

電気カミソリ髭一本が駄々をこね

ドア開けて笑いの中へもぐりこむ

美しい人と被って見たい波

修正の写真と添うて五十年

不景気の痛みに耐えた名馬たち

嘘だとは知ってる母の広い胸

困ったらしいつも神さま仏さま

風下でうわき話を四捨五入

眼を入れて風絵いのちの血が流れ

投票日性善説が試される

胸の修羅つづいて汗の多いこと

振り向けば棘の道も茜雲

大好きなあなたへのびてゆくハート

九十二が闘っている暑さかな

風にそよぐ葦が力を溜めている

ストレスをまた持ち帰る旅靴

傘寿なおやりたいことがたとある

西宮市	堺市	下関市	吹田市	鳥取県	寝屋川市	岡山市	出雲市	大阪市	大阪市	弘前市	唐津市	大阪市	大阪市	香芝市	八尾市	島根県	大阪狭山市	大阪市
奥田	源田	石川	大谷	土橋	妻谷	川端	久谷	中澤	鶴田	斉藤	仁部	熊代	西川	大内	長谷川	伊藤	矢野	西田
みつ子	八千代	侃流洞	篤子	はるお	重三	柳子	まこと	伽羅	遠野	脇	四郎	菜月	更紗	朝子	春蘭	寿美	梓	柳宏子



決断をうながす広いひろい空

輝きたく男七十詩を詠む

いつだって笑顔で越えてきたピンチ

しあわせな一日でしたひとり風呂

つる茎を草は短く風を避け

惚れすぎも今では尻に敷かれおり

土に感謝夕日に祈るミレーの絵

一つ屋根の下で時々遠い妻

凡人のままでゆっくり傘寿です

注ぎつがれ揚句の果てのつかみ合う

女傘畳んで愚痴を聞いてやり

温暖化だらうか桜の狂い咲き

迎春の流儀めでたく花ばさみ

もう余生捨てねばならぬ我意を飼う

仮の世の舞台一人で舞いつづけ

百歳にペロリと長い舌で生く

もぎ取れる位置から熟れてきた果実

背の低いところに撓む希いごと

この部屋でうっかり忘れてる戸籍

八尾市

井尻

民

鳥取県

上田

俊路

堺市

河内

月子

八尾市

高杉

千歩

大阪府

浦田

綏子

大阪府

奥村

五月

吹田市

阿萬

萬的

堺市

矢倉

五月

大阪府

川原

章久

寝屋川市

角野

仁清

堺市

板尾

岳人

羽曳野市

塩満

敏

大阪府

上江

勝子

大阪府

中村

叡子

高知県

赤川

菊野

鳥取県

中原

汲香

鳥取県

中原

諷人

鳥取県

中原

みさ子

鳥取県

徳田

ひろこ

麻生路郎物語

—『川柳雑誌』の誕生—

(13)

東野大八

『川柳雑誌』が創刊されたのは、大正十三年二月であった。盟友日車と半文銭の新興川柳誌『小康』への参加を厳しく拒否した路郎の脳中には、すでに川柳発刊への構想が潜在していたことは明らかだ。

（愉快な雑誌で、広告の利く雑誌を出すことにした）

という『土団子』発刊当時のモチーフが、いぜん彼のこころに強くわだかまっているのはジャーナリストに加味された経済センスがそうさせたとも思える。もともと路郎は、経済畑の学識素養のうえに育ってきた人柄でもある。

柳眼を六厘坊によって開かれ、この人物に兄事し古典川柳の中におのずと短詩型部門での詩眼を開いた若き路郎は、柳界の『子規たらん』（川柳雑誌古稀特集号参照）との作句志向を『新短歌』川柳の道に求めたが成ら

ず、古典川柳を近代化した庶民の中の新川柳に活路をみた、少くとも川柳創刊の背景には、こうした意識が色濃く漂っていたことは否めない。日車、半文銭の『小康』への誘いに対し冷たく袂を分ったのも、路郎の新短歌運動の敗退が大きな要因を成しているからだ。

亭々たる堂前の柳の大樹を見上げた遅日荘の当主路郎は、清貧の風趣に決して甘んじてはいなかったのである。時に彼、三十七歳。

『川柳雑誌』の創刊号は、大正十三年二月十五日の発行日付で、菊判三十六頁。兵庫県武庫郡鳴尾町字寺ノ後四四番地・編集兼発行印刷人麻生幸二郎（発行所川柳雑誌社）一部三十銭・十二部三円、振替大阪三五一四番で、裏表紙の川柳社同人は主幹麻生路郎の下に同人岩崎柳路はじめ二十四人・支部は十一（大阪七、神戸三、山口二）である。創刊号のトビラには、つぎのような短い発刊の言葉

が記されている。

「現代人の思想にびつたりと触れた詩と云えば、川柳の外にはない。我等は此の川柳によって人生を的確に批評して行きたいと思っている」

内容を眺めてみると、まず巻頭に特別活字で「誤れる川柳観を排す」とあり、傍見出しで▲現代人は刺激に生きる▲白紙になつて研究せよとあり、本文は二段組総ルビ付で四頁にわたり、標題の絵解きを試みている。一口に言えは、それは庶民大衆への川柳の啓蒙認識に尽きるだろう。川柳には無関心な一般社会人へのこの川柳PRのための語りかけには、路郎の烈々たる川柳愛が熱っぽく紙面にほとばしり出ている。この巻頭言に終りのくだりに路郎はこう結んでいる。

「単に川柳というものは決して世間で考えているような、つまらない謎かけのようなものでもなく、俗悪でお座敷にのほせぬようなものではないというだけを知って頂ければそれでいいのです。そして今迄に先人主となつていいる曲解をさりと西の海へつて、全く白紙となつて真実の川柳を研究して頂きたいのであります。私達が『川柳雑誌』を発行することになりました主たる原因は、世間の人達に真実の川柳を知って頂きたいからであります。（中略）従来の川柳雑誌は申合せたように初心者に不親切でありました。それは自分達の研究に忙しかつたのによりましようが、

初心者を導いたり、世間から誤解されている川柳を釈明するために用いるだけの紙面を持たなかったのにもよるでしょう。私達はそうした点を特に、この『川柳雑誌』で補って行きたいと思っております。

作品欄は「近作柳辨 路郎選（三頁）があり『募集句』には「仲人・井上剣花坊」「花輪・岸本水府」があり、一頁を埋めて麻生路郎の名によるつぎの十句がある。

ひるひなか蠅とる用があるばかり
疑ふたまゝで一週間は過ぎ

暇な日は三味張替へる気にもなり
平凡の幸福豚へ話しかけ

豚の子へ続く豚の子ばかりなり
時計にまでうつる神経衰弱症

さされる気がこの頃暫に結はぬ也
踊子へ雲でも降りて来そうなり

青いソフト東京の夢巴里の夢
初恋の思ひ出になる夏蜜柑

初心者指導、古句研究の発表、並びに川柳の社会化運動の機関誌として刊行に踏み切った『川柳雑誌』は、まず経済的確立、月刊断行、量的発展、それから質的完成への方針を定め、その第一巻第一号を世に送ったのである。こう述べたあと、路郎は川雑二九号の戦時の『雑誌奉還 終刊号の』苦斗四十年の稿でつぎのように川雑発刊時の思い出について記している。

勿論その反響は大きかったことは言うまでもなかった。久良伎氏は『川柳雑誌』という名は憎越だと言つてきたが相手にしなかった。しかし『川柳雑誌』が出てから、川柳の雑誌を川柳雑誌といえは混同の惧れがあるのて柳誌とか、川柳の雑誌とか言わねばならないうことになった。その不便さは他誌に対しての柳の毒ではあつたが、社会を目標に刊行するためにはやむを得ないことであつた。これも一つの反響に相違ないが、それよりも大きな反響の幾つかがあつた。

『川柳雑誌』の月刊断行は、他誌の脅威となり、『番登』の如きは年三回乃至四回位の不定期刊行であつたが、しどろもどろに追隨してきた。合併号まで出して漸く三年目に月刊誌になった、他はおして知るべしといえよう。

型についても『川柳雑誌』の菊判型が、従来の豆本式や四六横版にどんな影響を及ぼしたかは、紋太氏が度々書いてある位であるから、手前味噌でないことが知れるであらう。『きやり』の豆本、『番登』の四六横綴などをはじめ、全国の柳誌という柳誌が、『川柳雑誌』にならつて遂に柳誌菊判時代を出現するようになった。我社では従来の寄贈本位を改めて定価売を断行した。それには面白い話がある。

私が東京へ出かけて、内幸町の旅館に泊っている際、宮尾しげを、川上三太郎の両君が

訪ねてきたので、三太郎君から一カ年の購読料をまきあげた。しかしまだまきあげた訳ではなかつた。一カ年分は、社の会計へ繰り入れたが、三太郎君にはビールを半ダース吞ませることにした。ビール代は勿論、私のポケットマネーであり、その金は私の勤勞によつて生れたものであつた。川柳雑誌社へ多年つぎ込みこそすれ、社からビター一文の収入もないことは言うまでもなからう。

私は私の理論を徹底させるために、運動費持ちで駆けずり回つたものである。路郎はオレから購読料をとつた。誌代（柳誌）を払わされたのは生れてはじめてだと三太郎はよくこのことを誰彼に話していた。当り前ではないか。私が着服する誌代ではなし、川柳を愛すればこそ誌代の請求をするのだ。呉れてやることはイトやすいことであるが、それでは購読者が殖えれば殖えるほど、社は廃刊に近づくことになるのだ。それでは発展は遂にのぞまれない。発展どころか潰れる外に道がない。

これが私の所論だつた。柳誌の多くが兎薺的刊行に陥ち入り榮華不長となつた主たる原因はそこにあつたのだ。私は友人であつても決して無代ではやらなかつた。やむを得ず無代で送つた友人の誌代は私自身のポケットマネーで支払つた。弁護士をしている友人が、麻生君は偉くなつたネ、といつて快く誌代を払ってくれた。この友人は二十年後の今日で

も誌代を払ってくれている。宮尾しげを君には購読をすすめなかった。当時は漫画家であつて川柳家ではなかったからだ。

その当時の柳誌は、何れも発行部数の一割か一割五分位しか誌代の入金はなかったものである。あとはみな呉れてやつたものである。呉れてやるというは聞きなれないが、誌代を請求されるだけの値打ちのある雑誌を発行していかなかったとも言えるのである。

そこで話は常に誌代に値する立派な柳誌を出すように心がけた。月刊断行もその一つであつた。句の上に於ての主義主張には一歩も譲らない私も、社の経営に於てはつとめて摩擦を避けた。斯くして『川柳雑誌』はグングン伸びて行つた。

「飛行機に、競馬に、全国中学校の野球試合に、全国のファンを熱狂させる鳴尾から『川柳雑誌』が生れたということは、なんだかい意味でかつぎたくなる。『川柳雑誌』によつて天下の鳴尾にしたいと思つてゐるところが創刊号の発行部数とその売れ行きは、こうした専門雑誌のレコードを突破したので同人一同歓声をあげて、更に活躍を期している。この調子でいけば『川柳雑誌』の鳴尾ができあがるのも遠くはあるまい。『路郎生』(川柳雑誌 号・編集太与里)

ここで路郎が川柳創刊に踏み切つた、いわば引金となつた一つの事柄について述べてお

こう。当時大阪に川柳以交吟社というのがあり、柳誌「みをつくし」を出していた。路郎はその顧問格であつた。川柳の出る前年、結成三周年を迎えた以交吟社の連中が

「柳誌みをつくしの在り方にあきたらず、その同人連がそろつて私を迎え、私が主盟となつて大改革をして貰ひたいと要請してきた。もし腰をあげて頂ければ、この柳誌を廃刊して、新柳誌を改めて刊行したいという。私はそれを受けることにした。同柳誌は直ちに廃刊が実行され、私の手によつて『川柳雑誌』が生れた」(山雨楼メモ)

このとき路郎は大阪毎日新聞社の経済主任の職にあつたが、右の事件とともに直ちに辞職届を出している。かねて抱懐する新柳誌発刊の夢に、片手間仕事ではモノにならずと判断した、とみる向きが強い。

このような事情から「みをつくし」同人であつた吉川唾人、高橋古城山が宣伝担当、竹田蘆穂が編集、橋本二柳子が会計、太田一声が広告、といった川柳発行のための部署が定められ、他の同人は居住地域中心の川柳支部責任者となつてゐる。したがつて川柳のスタートは、既刊三年の柳誌(四六版横綴二〇頁の実績をもつ)スタッフが支柱となつていたのである。そのため路郎はひとりで全力投球の筆陣を張り、作句の一方純正川柳の社会普及の講演や指導に馳せ回つてゐる。活力に溢れた川柳のスタートであつた。

川柳二号には口絵写真がある。二月十八日(T13)川柳第三支部(酒井零骨)主催の下に観梅吟行を金熊寺一目千本に催す。その際の一行の記念撮影とある。鳥打帽子に背広ネクタイにオーバー姿の、壮年期の路郎の微笑を囲んで、マント襟巻、中折帽子や毛皮帽子の一見三十代の連中二十一人の楽しそうな貌が並んでいる。

また、この二号には本社創立川柳大会(一月十九日於大阪南堀江書林倶楽部)の盛況ぶりを特集した総ルビ付六頁にわたる一大デモストレーションがある。路郎は本誌に「一句を遺せ」と二頁にわたる論説を発表している。

「私には未だ真に後世に遺してはぢないような句は一句もできていないのであります。二十年の句の中から自分で捨てかねる句を撰り抜けば或は十句位はあるかもしれません。けれども識者に見れば一顧の価値もないかもしれぬのであります。しかし、私は川柳を捨て得ないのであります。それは私の生命を永久に伝えるものは川柳の外にはないと思うからであります。せめて一句でも後世の識者に示しうような立派な川柳を遺しておきたいと思つております。本誌の読者も後世に遺し得る一句のために力作せられたいのです」

後年の有名な路郎の川柳訓「生命ある一句を遺せ」のこれがその原典である。

愛染帖

波多野五楽庵選

東京都 やまぐち珠美

慎みを今日も描けなかつた舌

ふちどりを軽く逃げ口上で縫う

幸せでふくらんでいく嘘が好き

和歌山市 古久保和子

五万分之一の地図にも現住所

帰らねば母が縮んでしまいうそう

和歌山市 木本 朱夏

叫びたいこと捻じ伏せて柘榴割く

影踏み影が帰ってこない夜

堺市 和田つづや

ゆるぎない愛が通った針の穴

吉報を待つ日は何故か風が出る

岡山県 富坂 志重

指十本つかみそこねた物はかり

無に還るまでやさしく連とあきらめる

弘前市 斉藤 岳

妬まれて妬んで花は過ぎていく

幸せがこぼれぬように眼を閉じる

大和高田市 鍛原 千里

まだ女 仄かなバリア張ってます

淋しくて素直になれぬくすり指

弘前市 高瀬 霜石

ネクタイへどんな積もる牡丹雪

留守電に入れる正直者の顔

和歌山市 福井 桂香

溜息のときおり洩れる秋の髪

勾玉は愛しいかたちして眠る

大阪市 神夏磯典子

逢いたいがあなたと会えば雨になる

結局は白紙へ戻る理想論

和歌山市 桜井 千秀

喋る時計が相槌入れる物思い

現在地教えてくれぬ昼の月

和歌山県 辻内 次根

水の面 殺し文句を考へる

厳粛なお別れでした白い雨

和歌山市 楠見 童子

巢籠もりのままで森から出られない

仮定の上に仮定重ねて眠らねず

鳥取市 夏目 一粋

コトリともしない空気の重いこと

力むまい梯子は天にかけ終えた

鳥取県 さえきやえ

愛の詩を綴り無題としておこう

八尾市 井尻 民

さつさとひとり涙の橋を渡り切る

八尾市 村上ミツ子

松江市 安食 友子

接点が脆くなつたらわつと泣く

和歌山市 榎原 公子

秋風は酷で女をやつれさす

弘前市 宮崎ヒサ子

白菜ざくり割って難題解いてみる

大阪市 浦田 綏子

心眼を蹠につけ背にもつけ

富田林市 池 森子

雨も風も仏わたしを耕して

米子市 白根 ふみ

善良に生きても敵が追ってくる

和歌山市 吉村さち子

人間の味になろうと逢いにゆく

大阪市 川原 章久

初雪は人の噂を連れて消え

和歌山市 西山 幸

的の中心でゆっくり爪を切る

弘前市 高橋 岳水

コトコトと団欒を生む落し蓋

弘前市 福士 慕情

里帰り樟脳の香の夜具へ寝る

青森県 西谷 大吾

田を売って胸の奥まで吹雪かれる

高槻市 乙倉 武史

も一人の私ブレーキ掛ける役

八尾市 高杉 千歩

別れとは突然がよし冬の蝶

唐津市 宗 水笑

藤井寺市 高田美代子
冬の樹になんにも奪つものがない

和歌山市 川上 大輪
捨てられてからカナリやはよく歌う

岡山県 矢内寿恵子
風にゆれ情けにゆれて生きんかな

西宮市 西口いわゑ
女坂 面を塗りかえつつ登る

香川県 木村あきら
裏切りはやつぱりしない影法師

和歌山市 松原 寿子
突き当たつてから錯覚の愛と知り

吹田市 山本希久子
字余りと字足らずですがうまが合い

西宮市 牧測富喜子
ひたすらに走り続けた背広十す

藤沢市 妹尾 安子
本音吐く前に洗茶をぐつと飲む

尼崎市 春城 年代
やせたくもありやせたくもなし秋がゆく

海南市 三宅 保州
誰にでも正月やつて来るけれど

高槻市 生田 義一
は何をしに来たのかと首ひねり

羽曳野市 徳山みつこ
ホテルの聖書一度も開けたことがない

寝屋川市 森 茜
疲れたら小さな繭になり眠る

鳥取県 西原 艶子
結び目がいつか緩んでいたのです

弘前市 一戸 ツネ
お静かに明日のために眠ります

富田林市 中井 アキ
一片の雲から童謡踊り出す

寝屋川市 江口 度
夏みかん母の一字が攻めてくる

唐津市 山口 高明
鉄形を買えば宿題みな終る

弘前市 蒔苗 果林
雪掻き機 出番少ないのに不調

吹田市 太田 昭
火傷する噂を今日も聞きにゆく

尼崎市 春城武庫坊
諸々の喜劇の幕を引く師走

海南市 堂上 泰子
なるようになれと心を解き放つ

富田林市 片岡智恵子
ふりかかる火の粉他人と割り切れぬ

羽曳野市 吉川 寿美
晩学を歩むに靴が大き過ぎ

倉吉市 牧野 芳光
深刻な顔を吐き続ける電車

寝屋川市 太田とし子
恨めしやと夢にも出たい人という

鳥取県 岩崎みさ江
薄墨で描く人生の余白かな

藤井寺市 太田扶美代
秋ですね高鳴るものが少しある

熊本県 高野 宵草
侮った風邪に仕返し受けて病み

松江市 津川 紫晃
冬が来た冬の命とつきあおう

海南市 谷口 義男
言い訳をすればするほど疑われ

富田林市 片岡智恵子
まだ生きるつもりへ影も達者なり

富田林市 大橋 鐘造
零困気につられて叩く手が寒い

奈良県 渡辺 富子
辛いこと全部忘れて陽が沈む

四条畷市 吉岡 修
そのうちに冷飯組がしゃべりだす

愛媛県 花岡 順子
強い人ですな付け入る隙がない

倉敷市 井上 富子
肺癌で逝つたあなたの煙草盆

川崎市 浦野 昭志
病む友に頑張つてよと言えただけ

岡山県 山本 玉恵
心地良い返事に酔つた昼下り

美祿市 安平次弘道
雑音の中で孤独にさいなまれ

弘前市 岡本 花匠
屠蘇機嫌外のふぶきに逆らえぬ

東大阪市 北村 賢子
ライバルの鼻はとてつもな高く

倉吉市 米田 幸子
知恵借りに来たら六法広辞苑

倉敷市 小野 克枝
整形の二重まぶたといつ言おう

義母さんの本棚にある魔女図鑑 東京都 播本 充子

ポトンポトン愚痴か涙か夜の蛇口 鳥取県 石谷美恵子

眼を閉じて母の面影あたためる 竹原市 正畑 半寛

積荷なおして大正の貨車まだ走る 岡山県 大石あすなろ

いい人になりいい風を待っている 鳥取市 田村 邦昭

リーダーの椅子を揺すりにやつて来た 倉吉市 野口 節子

歯車の一つになって自己主張 吹田市 岩屋 美明

歴史の網に掛ることない雑魚魂 堺市 山本 半銭

尾を振れぬ父はいまだに堅い椅子 和歌山市 青枝 鉄治

咳一つ噂の人が来た合図 大阪府 澤田 和重

わめいても泣いても風は独りぼち 尼崎市 田辺 鹿太

一人では一人舞台も成りたらず 三田市 北野 哲男

外見で判断される出来不出来 横浜市 田中 笑子

無風地帯このぬくもりに住み馴れる 西宮市 門合たず子

無限だと信じた愛にけつまずく 香川県 川崎ひかり

遠い日の砂丘眩しい恋だった 松江市 川本 畔

ロスタイムまだまだ使わないで 高知県 桑名 孝雄

立志伝 序章で落伍してる僕 泉佐野市 稲葉 洋

演奏会おたまじゃくしにとり込まれ 唐津市 坂本兵八郎

計算だけは見事に合った年の暮 日立市 田口 虹汀

飽食のツケを血糖値が笑い 和歌山市 田中 みね

人生のゴールは見えぬ自己暗示 大阪市 町田 達子

言葉磨いて少し上品にしよう 倉吉市 淡路ゆり子

さざ波で足を洗っただけのこと 鳥取市 美田 旋風

泣いて気が晴れるものなら泣けばよい 唐津市 市丸 晴翠

長生きの脚が抱える不発弾 鳥取市 徳田ひろこ

剪ることに始まる華のいろは坂 奈良市 乾 春雄

消印の向こうに好きな人がいる 枚方市 海老池 洋

強かに生きるしかない冬木立 武蔵野市 亀井 円女

上出来だかぶりつきたい初曾孫

ちよこ一杯天下を取った顔になる 鳥取市 録沢 風花

寡婦の家まだ置いてある男下駄 唐津市 樋口 輝夫

三枝の礼現代つ子には解るまい 米子市 光井 玲子

親になるこの簡単な修羅の道 横浜市 芦田 鈴美

ストレスは駄目とストレスかける医者 高槻市 乙倉 武史

長生きの所詮極楽ゆきを待つ 安来市 原 煩悩児

市となってやはり売れない米作る 札幌市 三浦 強一

好奇心旺盛でまだ死ぬません 大阪府 初山 隆盛

酒とろり天下を取った父になる 鳥取県 西沖 彰雄

貧乏ゆすり勇氣だんだん湧いて来る 松江市 三島 淞丘

忘れ去る酒ならとことん飲むがいい 今治市 越智 一水

真白い歯だけが笑うインタビュー 和歌山市 玉置 当代

勝ち取った回転椅子が落ちて着かず 羽曳野市 酒井 一壺

医師よりも頼りになった置き薬 大阪市 津守 柳伸

賞味期限切れて香水派手になる

俳風柳多留二四篇研究 50

安八天 1

切を見たて仲人のあん氣也

一七三

橋本 秀信・粕谷長生
山田 昭夫・伊吹和男
大野 秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤 要人

清 「娘の顔見せも」とあるから、見合いの相手たる男の方から、結構な娘と言われることもあり、ノーと言われることもある、との意ならん。

佐藤 同。

388 献立へ又ふりかへりこけをふき

橋本 献立は料理のメニューという一般の意味のほかに、「日国」には、②物事を行う順序や全体の計画という意味もある。こけは②こけらに同じ。魚の鱗。こけ・虚仮。②思慮内容が浅いこと。浅薄。③愚かなこと。馬鹿。間抜け。(以上「日国」)

この句、よく判らないが、一般的に考えて、料理人の句とする。

呼ばれた家で、宴会料理に腕を振るう料理人。書き出した献立表を再確認してから、魚の鱗をはがす作業に取りかかった。「念には念を入れよ」の職人氣質を詠んだもの、としておく。

料理人のさばつてふく鯛のこけ 明元義 4
清 賛。予め用意した献立に従つて料理を拵えて行く。

佐藤 賛。

389 娘の顔見せもあたりはづれ也

橋本 十一月の顔見世狂言で、芝居見物を利用した見合の句。芝居も役者の当たり外れがあり、狂言の出来不出来に関係するが、見合も同じこと。美人に当たることもあれば、醜女に出くわすこともある。未知の女との見合なのだからしかたがない。断るか、諦めるか。思案のしどころ、というところである。

顔見せの見会狂言うろおぼえ 七六二
いもがあるいやと一トまく切りて立す

390 才蔵ハ草履けんくわの中を出る

橋本 才蔵は三河万歳で、太夫の相手をする道化役。大黒頭巾を被り、鼓をたたく(「江戸語の辞典」)。

三河万歳には、路上で行う「町万歳」と、出入り屋敷が決まっています。檀家帳を繰りながら決められた日に檀家を歴訪する「屋敷万歳」の二種があった。屋敷万歳は太夫も才蔵も三河から出てくるが、町万歳の才蔵は、江戸橋南詰めの才蔵市で相方を雇いコンビとなった。屋敷出身者が多かったようだ。：申斐久次郎氏「三河万歳・ひめはじめ」より。

これは、屋敷万歳の句であろう。座敷での三河万歳の披露に、近所の子供たちも、座敷に上がって一緒に見物していた。才蔵が観客の腹をよじらせて笑わせてお開き。退出するときに子供たちも外へ出る。上がり口で、自

分の草履がないことに気づく。「草履を間違えるな」「いや俺のだ」なぐと喧しい。

あまり面白い句とも思えないが、類句を見るとそんな光景があつたようだ。子供は正月になつて、新しい草履を買つてもらつていたのである。

万歳にぞうりを持つてかしこまり 六二

万さいがたつとぞうりのけんくわ也 二〇五

万歳ハそうりをはくとつけられる 七〇
清 賛。万歳を追つて行くために、我がちとなり、履き物を間違えたり踏んづけたり、てんやわんやになるのであらう。子供達は万歳にことのほか興味を示したようだ。

佐藤 賛。

391 引ヶ過の初会なまいき過たやつ

橋本 引ヶ四つ（ほぼ午前〇時）、吉原は閉店時間になる。この時間に初会をやつて来るのは、お茶引きを免れた売れ残り女郎である。感謝して当たり前なのに、図横柄で態度がでかい。何ということだ、というところ。さしずめ、客はあまり歓迎されない浅黄裏か、引ヶ前に飛び込んできた商家の雇い人なのだらう。

引ヶ前の初会振られて来たの也 一七三五

引ヶ前の初会ひき茶を吞に行 九二二

山田 生意気なのは客。意気がつて引ヶ過ぎに登楼したのは、身の程知らずというものである。それは深い馴染客か、間夫のする事であるというものであらう。

引過の客小ひたいのある男 拾七一九

清 山田説賛。こうした手合いがよく居るものである。

佐藤 同。

392 片桐か為にハちやくのつほね也

橋本 片桐は片桐市正且元。秀吉の家臣。若い頃は「賤ヶ岳の七本槍」で名を馳せた。秀吉没後、豊臣家の家老として秀頼の後見役であつたが、方広寺の鐘銘事件以来、徳川家との関係調整のために苦心したが、淀君とその側近らと合わず、暗殺される危険もあつたので、居城の茨木城に隠居した。

茶々を入れるは、邪魔をする。妨害する。水を差す。

片桐且元が徳川との和平策をまとめ、何とか豊臣家の安泰を図ろうとしたが、淀君の合意を得られず、ことごとく反対された。そのことを、本名「茶々」に懸けて、片桐にはま

さに茶々を入れるお局様だとする句意。

片桐も淀へ申スハ口チ車 五一一三

水車片桐質におくところ 四八一九

水車しちに置ぬて城かおち 八三七三

清 豊臣家存続のために、徳川家康と交渉した結果を全て反対されたうえ、命までも狙われた。

これは余談になるが、晩年家康にまねかれて駿府に暮らし、墓はところろ汁で有名な鞠子のすぐそばにある。

佐藤 賛。

393 いつちいゝくせの生酔詩をつくり

橋本 「酒仙」とも「詩仙」とも称された、中国唐代の大詩人李白を詠んだもの。とかく酔つぱらひは始末に負えないもの。しかし、酒好きの詩人李白は、「李白は一斗、詩百篇」とうたわれているので、酒に酔つても、あんないい詩が作れるのなら、こんないい酒癖はないだろうと、うがつた句。

詩をつくるのがいつちい、上戸なり

二〇一八

詩の出来るたびに徳利かかるく成 二七八
李太白壺合ツ、に詩をつくり 拾四二七

清・佐藤 賛。

荀香のむ

政岡日枝子選

丁寧に化粧していて顔がない
 学びつづけて罪一つずつ償おう
 冬枯れの桜並木を行くふたり
 反抗期小骨を立てたよう黙る
 動かない櫂を握って離せない
 壺割れてきつとわたしの片思い
 一本の縄にも長い文化の灯
 ふるさとの橋は差し込みコンセント
 甘酒で心をなくさないように
 さわざわと異変があつた川の水
 葉擦れの音がしてわたくしが落ちる
 取つときのころでひとり芝居する
 愛しさに耳すませたり遠木霊
 急に来た寒さに自浄されている
 句読点流れに杭を打つように
 人はみな追うものがあつた明日がある
 他人には教えてならぬ化粧液
 このところ無口になった日記帳
 守り抜くものあり男の腰すわる

和歌山市	古久保和子	和歌山市	野坂	なみ
米子市	門谷たづ子	西宮市	福井	桂香
和歌山市	驚見 正子	米子市	太田扶美代	
三田市	久保田千代	鳥取市	徳田ひろこ	
和歌山市	西山	松江市	川本	幸
富田林市	池	森子		
米子市	白根 ふみ	高田美代子		
西宮市	牧瀬富喜子	吹田市	山本希久子	
大阪府	米澤 俣子	西宮市	西口いわゑ	
米子市	足立由美子	岡山県	福原 悦子	

矢印の先にも一度賭けてみる
 片思い渡り廊下の長さかな
 石橋を叩くたんびに消える夢
 信じ切る他に手立てのない絆
 風向きで捨てた未練が舞い戻る
 米洗う間に結論がひとつ出る
 トンネルの長さに笑い忘れそう
 地球ごと崩壊しそうな恐い記事
 冬の天何かせねばと気をもらう
 流れ藻の下で行くさき知りません
 風呂敷に心包んで差し上げる
 潤いが欲しいシャワーを全開に
 聞き流すぐらゐの意地はもっている
 鉛筆の芯でここを掘り起こす
 菌にきぬを着せたら奥歯疼きたす
 着ぶくれてまたいらを大にする
 人間でよかった泣いてまた笑え
 化けるのが上手くてホホホと笑う
 夢拾い続けて時間たべつくし
 秋の陽に出る溜息が長くなる
 花との対話すつと心が軽くなる
 ギヤマンの皿の母がよく喋る
 競つても無駄と知ってるかすみ草
 かすみ草ほどの脇役見つからぬ
 長い道時には石になりすまし

大和高田市	鍛原 千里	羽曳野市	吉川 寿美
富田林市	片岡智恵子	富田林市	中井 アキ
大阪市	川久保睦子	堺市	矢倉 五月
倉吉市	野口 節子	八尾市	高杉 千歩
芦屋市	黒田 能子	米子市	中井 ゆき
八尾市	村上ミツ子	羽曳野市	徳山みつこ
東京都	播本 充子	鳥取県	岩崎みさ江
倉吉市	米田 幸子	横浜市	近藤 道子
米子市	木村富美子	出雲市	伊藤 玲子
大阪市	三浦千津子	岡山県	矢内寿恵子
大阪市	町田 達子	出雲市	園山多賀子
和歌山市	武本 碧	鳥取市	永原 昌鼓
米子市	澤田 千春		

落し穴にきつちり嵌る癖がある
遊んだ川が街の地図から消えている
ひとときを水速に繋いでおく記憶
半熟のたまごが群れている都会
着慣れると赤も恥かしくなくなった
地蔵さま一円だけの願いです
うっかりと言つてもことは生きていく
D51がハナハトみんなのせていく
浮雲と流れていたい古都の秋
生かされる薬この頃飲みやすい
誘われて負けずに回る風車
ダンゴ鼻ハナであしらうことはない
明日があるあしたがあると終忘れ
夫婦して想いおもいの落葉道
庭の石心で見れば語りかけ
リハビリの指導患者がしてくる
世渡りを教えてくれた広辞苑
身の丈に合った幸せ盛る器
紅りんご昔のわたし思い出す
月下美人いよいよ見得を切りはじめ
腑に落ちるまでは足取り鈍くなる
つまらない物と老舗の包装紙
同窓会喜怒哀楽の自己紹介
グルーブをまあるく仕切る笑い声
ぼろぼろの心に植える花の種子

和歌山市	森下	順子
米子市	門脇	昂子
鳥取県	西原	艶子
和歌山市	吉村	さち子
愛媛県	黒田	茂代
東大阪市	中岡	妙
神戸市	田中	章子
鳥取県	さへきやえ	
東大阪市	田中美弥子	
米子市	小塩智加恵	
愛媛県	花岡	順子
堺市	志田	千代
米子市	木村	春枝
西宮市	緒方美津子	
寝屋川市	坂上	高栄
和歌山市	福本	英子
今治市	塩路	よしみ
和歌山市	玉置	当代
羽曳野市	濱口	フジ
東大阪市	安永	春
和歌山市	榎原	公子
横浜市	秋元	和可
交野市	山川	日出子
横浜市	田中	笑子
熊本市	永田	俊子

詰まつてはるはずの記憶が出てこない
虫食いの野菜を選つて買つてます
量り売り情けあるならもう一寸
病葉を踏まないようにそつとよけ
二三日経てば笑えるほどのこと
小羊も仲良く混じつて来る賀状
食べ歩きして帰つく母の味
鈴振つていつまで続く旅だろう
新船に残されてないもやい綱
切り詰めて趣味を楽しむい余生
石あたま柔軟剤に浸しとく
独り笑ひしてます独り暮らしです
大根とレタス欠かさぬ自己管理
むだ金を掬うバーゲンのチラシ
十七歳夢一杯の元氣者

岡山県	富坂	志重
三田市	石原	蔵子
松江市	安食	友子
東大阪市	笠井	欣子
寝屋川市	森	茜
出雲市	石倉美佐子	
鳥取市	録沢	風花
寝屋川市	岸野あやめ	
鳥取県	吉田孔美子	
今治市	野村	清美
大阪市	小泉ひさ乃	
和歌山市	桜井	千秀
大阪市	津守	柳伸
八尾市	井尻	民
大阪市	松尾柳右子	

和子さんの句―流行を身に纏い、有名人を真似たメーカーアップ。
群の中にいて、同じレベルにいますかそれ以上という不安堵
感。しかし焦点を絞れば、自負を持った顔が浮かんでこないという
今が上手く詠みである。なみさんの句―投句の中に必ず仏様とのつ
なかりの句がありますが、目が覚める思いで私の胸に入ってきます。
仏様の御手の真ん中で一日一日を大切に作る姿が目につきます。
そして皆に問いかけられている句でもある。たず子さんの句―俳句
になりそうなところを、ふたりの後ろ姿で踏みとどまった処に私の
目を向けさせてくれた。桜並木には、既に新しい時間は生まれてい
る事も教えてくれる。桂香さんの句―大人の世界にも子供の世界に
もある反抗期。それを小骨を立てて、その領域に立ち入り禁止にし
た手法は見事です。反抗期を取り囲む暖かい周辺を連想させてくれる。

拝む

安芸田泰子選



一年をまとめて拝む初日の出席一つゆづって老いに拝まれるふり向けば母が門出に手を合わす逆境が続いて拝む神はとけ他人さんの背中を拝む初詣できつちり拝むきつちり手を合わす神仏に拝むしかない子の入試ハハキトク心で拝む汽車の窓境内を近道させて貰う礼病床の中から妻の背を拝む無神論者でいわしの頭拝まない一粒万倍祈り通して農に生き拝む手をやさしく包む仏の手ゆつくりと拝む形で大豆の芽神の目に止った拝むもみじの手介護する老母が私に手を合わす祖母の膝仏を拝むこと覚え危機一髪無神論者が数珠を繰る野仏に佇み拝む万歩計
 老いひとり夢を拝んで花遍路
 お陽さまを拝む心に嘘はない
 千手観音にたつたひとつの願い事

水 笑 半 覚 徳 三 岳 水 志 華 子 し げ お 倫 子 慕 情 あ ず き 兵 八 郎 善 信 寿 恵 子 碧 子 美 明 ひ かり 庸 佑 清 史 正 雄 愛 論 重 人 玉 恵

ありがたい妻と陰では拝んでる豊作を拝む農婦の掌が厚い
 二礼二拍神はお気付きなされたか期限切れの絵馬ではいくら拝んでも拝まれて神様も気が重いだろ
 日の出拝む故郷の海は黄金色あの人を拝めば力もらえそう
 四度目は仏も横を向く祈り折鶴の千の数だけ拝んでる
 万人に万の祈りの初詣で
 拝み通せば鬼も仏の顔になるにぎりめし拝んだ遠い日の記憶
 拝みたい心はいつも突然に見えて来ぬ神だ大きく鈴を振る
 拝んでた神が時どき横を向く
 佳
 産声へ素直に拝む神仏
 いつかいつかと男は飽きず陽を拝む
 深い森拝む両手に陽があたる
 地に伏して拝めば聞いて貰えそう
 病む母へ子はひたすらに鶴を折る
 人
 究極は拝む形になつてくる
 地
 落日を拝む今日の続きがあるように
 天
 何もしてやれぬお百度踏んでいる
 軸
 お願いがあつて亡夫と向い合う
 一 壺 保 州 章 久 あ や め シ マ 子 典 子 (編) 洋 千 里 伊 津 志 さ ち 子 晴 翠 扶 美 代 洞 庵 鐘 造 勝 規 正 剣 と し 子 美 代 子 大 吾 ヒ サ 子 ヒ サ 子 た ず 子 高 瀬 霜 石

白

神保坊太郎選



世渡りに白黒つけぬ方がよい
 白紙にはしてやれないが明日がある
 子の育ち何にも染まる白い画布
 真実一路菊の白さに裏切れぬ
 真つ白いですか百年後の雪も
 何色に染まるう白に自負がある
 白い皿目玉が映るほど洗う
 白黒をつけるから酒まずくなる
 まっ白な紙にまさかが伏せてある
 わたくしにペールをかける白い闇
 白蝶になるプロセスは触れさせぬ
 黒い土ついでる指紋なら白だ
 書き込みの余白は明日のためにある
 画布は真つ白さあ明日から何を描く
 腕白を自慢に語る成功者
 Yシャツは真つ白今日が大事な日
 白黒を閻魔さんにも見てもらう
 検診の結果が白と出た吉日
 吐く息が白い地下足袋履きながら
 ワンマンの白と言わせる社の論理
 黒でなきや白だと決める窮屈さ
 続編も夫婦で余白埋めてゆく
 一 粹 し げ お た ず 子 俊 子 保 州 典 子 正 剣 一 風 洞 庵 美 代 子 雄 々 次 根 紫 晃 勝 巳 霜 石 螢 花 善 信 尚 士 勝 規 ひ かり

白無垢の下に七色抱いて嫁く
まっ白い画布をこぼれる炎の想い
究極の墨絵の白へ辿り着く

一徹を曲げぬ親父の白袴

白拍子手を背に退く戦士

空白のページに私の過去がある

拉致の子の悲しみ空白の二十年

白旗を揚げた男に読みがある

白票は無効票とは違うはず

白い指炊事洗濯しない指

白蟻が大黒柱餌にする

白旗にまだこだわっている敗者

出来ちゃった婚に眩しい綿帽子

純白じゃないけど洗い上げた白

昭和史の空白染めたきのこ雲

佳

自分史の余白に妻よありがと

真っ白な画布一枚を子に残す

白地図を持たせ息子の一人旅

白魚のような小指にしてやられ

噴火後の夢空白の三宅島

人

三文判押すと白紙は重くなる

地

真っ白な紙が一番よくしゃべる

天

自分史の余白に埋めてある涙

軸

アリバイは梅田で買った京土産

修

寿恵子

早智

柳弘

恭昌

千里

倫子

庸佑

棲世

正雄

喬水

鈴美

あずき

花匠

権悟

岳水

千代

一花

晴翠

鉄治

ミツ子

大橋鐘造

運

永井三津子選



ひょいと目が合ってしまったのが不運

運のよい人だわたしのつれあいは

逃げ腰の運を粘りで引き留める

拾われた猫は美人の膝で寝る

運だけでは無いぞと汗を流している

運動はせぬが煙草も酒もやる

結果見て運と不運に分けたがる

勝因は運だけですと敵を立て

福だるま片目のままという不運

二人にはほどよい運と笑い合う

老いてなお運勢欄に気にかかる

運否天賦やるだけやった空の青

薬一本掴んで運は風まかせ

幸運の女神笑顔でひきつける

運開く手立てはせよと神の声

阿弥陀くじ最後の角ですつこける

間引き菜へ半分運と言ひ聞かす

一枚の辞令に託す運不運

天運に任せこころが弾み出す

ちよつとした悪事見逃す神無月

ささやかな運を願つて神詣で

玄也

千代

武史

鉄治

鐘造

ちかし

一粹

恭昌

徳三

風花

寿美

みつこ

ミツ子

巳代一

安子

富子

旋風

圭一郎

美代子

倫子

重人

生き下手の運は儚い夢のまま

運がよく鮎も鯛も釣ってくる

晩運を信じてちびた靴を履く

塞翁が馬を信じて生きていく

晩年の運を掴んだ太い指

年金という金運に恵まれる

女運 安全靴に履き替える

運のない障子で骨をまた折られ

北風と契り通してきた命

ダダダターの音が聞える日本国

運のない男の背なを軽く押す

生え抜きで終える一社に運の良さ

糸とんぼ運お怪力なる蟻よ

赤紙一枚むごいさだめに散った花

曲がり角一つ違つた運不運

佳

神様が昼寝をさせていた不運

運勢は貴男委せの綿帽子

運命論もつ逆らえぬ風の中

父の名で故郷を運ぶ母の文字

ハローワーク運を呼びたい冬の蟻

人

運鈍根 種は一粒ずつ時こう

地

運ばれたところで根を張る草の種

天

好運の女神へ小窓開けておく

軸

運命に負けない寡婦の日を刻む

志華子

螢

正剣

正丘

充子

隆盛

しげお

天涯

寿恵子

綏子

千里

一知

妻知

俊子

洋介

保州

虹汀

たず子

哲男

雄々

半覚

ひかり

斎藤

嘉

初歩教室

題一初

三宅保州

このたび初歩教室を担当させていただくことになりました。とてもブレッシャーを感じていますが、前任の吐田公二氏をはじめ先輩諸氏のご指導も受け、この教室に投句される皆様と共々勉強して参りたいと思いますので、よろしく願います。

おがましいようですが、私の作句の基本的な心得十カ条を紹介してご挨拶代わりとさせていただきます。

- 一、五・七・五の十七音字の定型を守る
- 二、多読、多作、多捨を心がける
- 三、発想、表現、リズムの良さを心がける
- 四、説明句、報告句にならないよう心がける
- 五、誤字、脱字をしない——辞典類を活用する
- 六、差別的な用語の使用や誹謗、中傷的な句を作らない

七、推こう（添削、練り直しなど）を重ねる
八、作句を休まない

九、句会に出席する

十、成績にこだわらずに

番外—良い師、良い柳友を得る

少しでも役に立ちたい初歩の道 保州

初姿會孫と立っている父だ

和友

怖ごと初孫抱く娘ハイポーズ

栄子

孫會孫二十五人の初写真

トシエ

初笑い孫の仕度さが主役なる

ゆきの

初孫は成人してもばあちゃん子

郁代

宝物初孫抱いて宮参り

文江

初孫と天下気取りで宮まいり

更紗

初孫に男の名前用意する

章司

いきなり辛口で恐縮ですが「孫の句は詠むな」「孫が可愛い的な句は駄目」などと言われます。私は「孫」の句そのものが必ずしも駄目だとは言いませんが「可愛い孫」の発想を超えないと佳句は作れないと思います。

孫を詠んだ句のお手本として次の句を見習いたいです。

マスメームとうとう孫が見当たらず 三恵

孫を抱くいくさの句い消して抱く 黙朗

添削句（原）は作者の作った原句、「添」は私が添削した句）

原 初舞台本人よりもはた疲れ 三喜夫
添 初舞台本人よりも親疲れ

共感を呼ぶ句です

原 初めての同年二人ノーベル賞 忠子

添 二人同時ノーベル賞という快挙

原 下六音字、作者の思いを込めてほしい

添 躍くと初心に戻り一歩から ふりこ

添 躍いたときは初心に戻りたい

「初心に戻り」と「一歩から」が重複意味

原 前向きに初歩教室で学びます 弘子

添 初心者の苦勞はきつと報われる

原 川柳としてはもう一工夫ほしい

添 初雪に銀杏紅葉も凍り付き 鈴美

添 初雪にびっくりさせられた紅葉

原 あれもこれもと読み過ぎ 過ぎたるは…

添 初めからきくしくしてたボタン穴 敏子

添 初めから掛けまがっていたボタン

原 ボタン穴は落ち着きが悪い 満子

添 食べ始めの孫の口元拭く祖父母

原 食い初めの孫と一緒に口を開け

添 いろいろと説明しすぎ 省略も大切です

原 初心者をライバル視してはじめ抜く 大鯨

添 初心者も容赦はしない親心

添 初心者も同じ土俵の仲間です

「はじめ抜く」はいただけません

原 言つたのに初耳だとすねられる 栄呼
添 初耳とすねて男を困らせる

原 女心の句に仕上げませんか

添 七五三戸惑い乍ら履いている アヤ子

添 本人は戸惑っている七五三

字はきちんと調べましょう

原 初顔に弱い巨人の打撃陣 侑子

添 初めから勝つと決まっている巨人

強すぎる巨人は川柳にもし難いですね

原 初盆に亡き人しのび墓参り 稔

添 墓参りだけは欠かしたことがない

報告すぎます 墓参りは亡き人偲ぶもの

原 宝くじ初めて買って運試し 敬之介

添 社運賭け初めて買った宝くじ

「運だめし」ではあたりまえすぎます

原 古稀過ぎて初心に帰り絵筆持つ つよし

添 若い気で初心に返り絵筆持つ

「古稀」は動く句になり勝ち

原 一輪車初めて乗れた孫の笑顔 節子

添 一輪車初めて乗れた孫の笑い

笑顔を「かお」と読むのは無理

原 初孫におしっこ掛けられ泣き笑い 勝久

中八音字

原 元旦は初ものづくしで光ってる 英旺

中八音字

原 初日の出露天風呂で見てる夢 弘之

原 我が家から初めて国立大学生 智加恵

中八音字 下六音字

原 助手席に誰も乗らない初運転 芳江

下六音字

以上の五句は中七と下五が守られていま

せん。川柳の音字数は五・七・五の十七音字

が基本的な定型です。特に中七音字と下五音

字を守ることによりリズムの良い句になりま

す。推こうで工夫すれば守れるものであり、

推こうすることが上達のコツでもあります。

どうしても中七、下五にならない場合は上に

収める工夫をしましょう。上五は上六以上に

なつても中や下より収まりよいものです。初

心者の方は基本を忠実に守ることが上達につ

ながるものです。

原 精こめた初の果物仏壇へ 孝明

添 仏壇へ亡父が育てた初みかん

具体的に作ると句が生きてくるものです

原 初春に妻えゆずろうこの判子 清

添 実印も妻にゆずって初春の空

この場合は判子より実印でしょうね

原 初心者はさすがと煽てられ 千枝子

添 初心者にしては上手いと煽てられ

添 初心者にしてはと但し書きが付き

原 初詣だけ神様に手をたたく 美弥子

添 初詣だけは欠かしたことがない

添 賽銭を少し張り込む初詣

一つの課題に対して何句も作り、そのう

ちから自選することを習慣づけることが大切

です。一句だけ作って終わりでは上達は見込

めないものです。

原 初体験する事増えた六十路坂 こそえ

原 六十を過ぎてまだまだ初体験 九好

十七音字の川柳に同想、暗合句は避けら

れませんが、解決法は非凡な発想ですね。

佳句 賽銭も妻に握られ初詣 惠勇

晴耕の初心遮二無二畑打つ 照彦

初ものはご先祖さんが待つてはる 円女

お互いに名刺を持たぬ初対面 洋介

初孫の命名祖父の筆確か 武

初めての恋は終身刑に似る 栄一

今月の推せん句

失敗は初心忘れた頃に来る 登志子

初恋はドアを叩いて走り去り 昌鼓

私の句

初対面でも通じ合う趣味の道

誰にでも今日という日は初体験

川柳塔唐津支部

二十周年記念句会

に参加して

山本義子

十一月二日(土) 晴時々曇、三日(日) 雨
 と言う天気予報のなか、早朝の山陽新幹線経
 由、一路唐津へ向かいました。

現地で一列車早い薫風名誉主幹、よみう
 り・産経教室八名グループ、岳人理事長、
 みつ子副主幹、選者の千代さんたちと合流。
 熊本川柳会の選者晴翠さん、俊子さんたちと
 一緒になりました。

四郎副主幹自ら受付におられました。ご
 挨拶もそこそこに出句締切に間に合いました。
 句会出席者は、「佐賀番傘」さん二十二余
 名と合わせ五十余名の満席でした。

定刻、樋口輝夫さんの司会で開会、来賓ご
 挨拶、四郎副主幹挨拶と進み句会の雰囲気にな
 ってきた頃、薫風名誉主幹の「古川柳の穿
 ちと奥の深い知識」のお話を聞きました。

披露は、さすが九州と思わず朗々として、

関西とはちよつと違う力強い句会でした。

懇親宴は、ご自慢の焼酎が席をめぐり、和や
 かなうちに、七時半頃から曳山が出ると言
 うので街へ出掛けました。まあ沢山の見物の人
 で馴れない街は、たいへんでした。やつとよ
 く見える場所を探して当てる土砂降りの雨
 になりました。(念のため申します。決して
 負け惜しみではございません。)雨が幸いい
 たしましてというのは巡行中の曳山が一斉に
 ひき上げるとのこと、ビルの軒下で雨を避
 けている目前を「一番曳山赤獅子」から「十
 四番七宝丸」と呼ばれる十四台の山が怒涛の
 ごとき間をおかず、といつても風格は損なわ
 ず立派な引き上げを拝見できました。

ご承知の方も多しと存じますが、「漆の一
 閃張」という工法で二百年前に作られたのが
 一番で、十四番は明治九年とのこと。町内が
 保管維持し手入れし毎年ヒカピカを競うと
 か、ともかく脱帽。

唐津支部の皆様、いろいろお世話様にな
 りました。厚く御礼申し上げます。

当日の秀句(本社関係)

めぐる

井上 勝 視 選

キャバレーをめぐる落ち目のヒット曲 正 剣

遊ぶ

市丸 晴 翠 選

綾とりで遊ぶ十指にある祈り

岳 人

境

撫尾 清明 選

あなたとの境に深い深い森

みつ子

軽い

永田 俊子 選

神さまの軽いタッチで独楽まわる

義子

雑詠

久保 正 剣 選

待つてます板門店の店じまい

千代



仁部四郎会長の挨拶

唐津くんちの旅

熊代 菜月

十一月二日、薫風先生をかこみ、川柳塔唐津支部二十周年句会へ。

朝の早さもなんのその嬉々として新大阪駅のホームに集う。すべり込んで来たのぞみ号の席に着くなり、句会への意気込みを見せる人、まだ作句に夢中の人あり、早々にお八つが出て来る。お八つを食べながらの作句なのに、句会では全員が全没にならず良かった良かった。薫風先生さへ抜けたのは一句だけという厳しさだったもの。懇親宴では唐津の民謡を教えていただき皆で合唱、唐津支部の方の熱意が伝わる。

その後雨にもかかわらず曳山見物に出る。あざやかな山車が広い街の通りや狭い町の家々の屋根を擦るように過ぎる。赤獅子、青獅子、亀に乗った浦島など十四の山車、幼い子供たちを先頭に、青年も老人も町ぐるみの総出演、競演でした。武田信玄の兜が雨に光り、風林火山の旗指物が風にはためく。エンヤエンヤの掛け声とともに緩急のスピードが興奮をそ

そり、夜は更けて行きました。

翌日は九人乗りのバスで観光、夜は宴会、呼子の活きのよい魚に舌鼓を打ちながら、カラオケに興じ、お疲れの先生を担ぎ出して時間一杯歌いまくる。

三日は憎いほどの快晴で、鏡山窯にて土いじり。その間も先生は選句に余念なし。大変なんだ……。薫風先生を中心に柳友八人、小学生的の修学旅行のような本心に楽しい旅でした。見帰りの滝や鶴殿の磨崖仏など、予定外の隠れた所の観光も出来、全員ニコニコ顔で帰阪いたしました。

仁部四郎先生をはじめ、唐津支部の皆様ありがとうございました。田口虹汀先生のお風邪も快くなれたことでしょう。またお会い出来る日を願って思い出の記いたします。

おくんちの雨の寒さがなつかしい 菜月

秀句鑑賞

同人吟 西原 艶子

— 12月号から

国民文化祭も終り、はっとしているわが家に秀句鑑賞の依頼状が舞い込みました。

迷いに迷った果てに由多香会長にご相談致しましたら、「名譽なことだからお受けしたらどうですか」とのこと。そう言えば、私はいつもいい加減に作品を素通りしてしまう癖が抜けない。勉強をやり直す気で、同人の皆さんの作品をしつかり読んでみるいいチャンスをとっていただいたと思い、お受けすることにしました。

中旬になってゲラ刷りを拝受。三八六名の作品一九五六句の中から秀吟を選ぶのは至難の技です。期間は十日ほど。とても時間が足りないと思います。

作品を読み進むとカタカナ語がとても多い。わからない句も多い。身近な所へしっかりと目と関心を向けた句も、描写だけでは写生画と同じようになる。時事吟のような火災に遇った法善寺横丁、ノーベル賞の句もありました。川柳の穿ちの中にも温もり、やさしさがあり、何より定型であることが川柳の命

であるという観点から鑑賞してみました。

今日は飴あしたは多分鞭だろう

吉岡 修

九頁のこの作品になるまで秀句がなかったわけではありません。予想以上に秀句がたくさんあつて困つたほどでした。

この句は飴、鞭という相反した言葉で、サラリーマン等の上下関係の厳しさを表現していると思う。「よくがんばりましたね、ご苦労さんでした」と今日は上司から頼まれても、明日は「もつと成績をあげなさい」と鞭のような言葉が飛んでくるかも知れない。使われている立場の悲哀が感じられます。

飛び跳ねてふと見失う現住所

西出 楓 楽

いつも思うことであるが、この作者は何の街にもなくサラリと句を詠まれる巧さがある。川柳界に必要とされて、ほつそりとしたお体に似ず東西南北へ飛び跳ねる如く活躍である。お家のことは若い方に任せておられる。きつと亡きご主人様が見守つていらつしやる

からではないでしょうか。

母さんの小言綴ると愛になる

藤田 泰子

この句の作者も茴香の花、他いつものように賞を独占される名吟家でいらつしやいます。どの句にもあたたかさ、やさしさが見え隠れして、安らかな気持ちがただけです。

母さんの小言を綴るとは聞いている方のやさしさも思われます。どこの母さんも憎くてお小言を言っているのではないのです。それらを綴ってみるとそれは母さんの愛の何ものでもありませんよね。素晴らしい作品だと思います。

愛すれば濁った川も澄んでくる

上地 登美代

私が住む日本海の近くにかなり大きな川が流れている。農村なので田畑から農薬も生活排水も流れ込む。きつと川底にヘドロが溜まつているにちがいないけれど、青々と流れ釣人が岸边で魚を釣っている。川の水は海から天へそしてまた川へと無限の旅を繰り返すことを思えば、大切に水を使うことが川を愛することに繋がるのだと教えられました。

大雨の後など濁流に乗って桃ならぬ、発泡スチロールやプラスチック容器など様々な燃えないゴミが大量に流れて行く。心しなければいけないと思います。

国文祭の義にも風もらう

福田登美

つい先だつて第十七回国民文化祭川柳大会が、鳥取県鹿野町で終つたばかりである。

平成七年開催県として決定して関係者は視察、研修等積み重ね大成功の中に幕を閉じることができたことを嬉しく思いますし、感謝と御礼を申し上げたいと思います。

今必死に御主人様の介護の中で川柳も熱心に続けておられる作者。国文祭当日も汽車、バスを乗り継いで参加された。この日を逃しては国文祭の風は吹かない。六五〇名というたくさんの方の参加者に川柳の風をいただいて、とてもいい刺激になったのではないのでしょうか。ますますのご健勝を祈ります。

いいことは幾つあつても困らない

牧野芳光

毎日の生活の中に、自分にも家族にも社会にもいいことがたくさんあつて欲しいですね。芳光さんにとつていいことは？と思ひ巡らす。川柳界へ入られてもまだ数年の若手だと思ひますが、お仕事柄真面目で才能がぐんぐん開花する、といった感じで次々に賞を擧うおひとりである。鳥取県中倉吉で谷口次男倉吉川柳会会長と共に川柳界を担う方である。川柳界へいいことをどんどん創造して下さい。

一年の早さにしがみついている

小林妻子

「しがみつく」とは辞書を繰ってみると、つかんでいる物から離れまいとして力を入れていることとある。

私が川柳を始めたころには、もうこの作者は大ベテランで鳥取へも選者として見えておられました。

歳老いて行くと一年がだんだんと早くなるように感じるのは誰も同じですが、川柳にしがみついていらつしやるので毎月あちこちの大会、例会へ参加されている。一昨年川柳塔賞の大石あすなろさんも同じ会の方であり、武蔵の里大原の川柳はいつも光っています。

通帳という年金の仮の宿

山本蛙城

「年金の仮の宿」とは本当に旨く表現されたものである。

社会保険庁から口座に振り込んで下さる年金は私の場合も通帳にはほんの束の間しか滞在してくれない。羽が生えていつもどこかへ飛んで行ってしまう。少しは通帳に定住させて、せめてこの世を去るときの費用位は、子に迷惑をかけたくないと思つている。けれど、一家の主となれば、子や孫に近所づき合ひにと交際費も高みます。好きな川柳も楽しみましょう。

落葉抱く大地母さんなんだろう

岩佐ダン吉

大地は母であるというスケールの大きな発想から生まれたすばらしい作品だと思ひます。

春まだ寒風の去らぬ中で芽吹き、梢で夏の陽を浴び秋風がやがて吹くころ、はらはらと地を染めて散り敷く落葉。大地に抱かれて朽ちていく。落葉もそして私達も。

男尊女卑のお考えでなく温かくやさしい母親像、女性像を心の中に思ひ描いておられてこの句が生まれたのだと思う。水も空気もそして大地も汚さないように大切にしたいものですね。

時どきは群をはなれて群を見る

楠昭子

テレビの映像などで、大草原を駆ける野性の群でも、放牧の牛や羊の群にもボツンと離れている一匹を見ることがある。まさかここまで考えて群と離れているのではあるまい。人間は群の中にどっぷりと浸つてしまふと、自分を見失つて染まってしまうかも知れない。

自分が自分であるためには、少し距離をおいて観ることも大切なことも知れない。人間だからできる賢い生き方だと思ひます。貴重な頁を戴きありがとうございます。

本社 十二月句会

十二月六日(金) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大阪

師走にしては、まだ暖かい一日、翌日から冬將軍の訪れがあるという予報であったが、本年最後の本社句会には11名の参加があった。お話は先月に引き続き井上桂作さん。前回の漢字の話に続き、今回は「川柳の表現技法(助詞)」について話す。

川柳はもとも俳諧を母体としている。初句(第一句目)が俳句となり、季節の制約もなく人情・恋・時事を詠う平句が独立したものが川柳となった。文芸作品としての川柳をよりよく理解してもらうためには助詞の使い方が重要なポイントとなる。

助詞「てにをは」の働きを句の実例をあげて説明する。

配られたプリントを見ながら、学生時代にかえり、神妙に講義を聞いた30分であった。初出席に稲川恵勇氏(富田林市)・菱木誠氏(奈良県)・田中章子さん(神戸市)・森イク子さん(大阪府)を迎える。

月間賞は寝屋川市の江口度さんに輝く。

(司会)朝子 (記名)柳弘・月子
(受付)森子・澄子 (清記)尚士

兼題「あわてる」

鴨谷瑠美子選

合う服がなくなつてからあわて出す 梓
命まであげると言われあわてだす 修
初恋の人に出逢つてあわて出す 東吉
ターミナル別れたひとと鉢合わせ 重人
飛び乗つたところは女性専用車 美代子
あわてんば違つてはせつちや 弘風
うしろにバイクあわてて抱きしめる 文子
乗車してからポケットに無い切符 英子
お隣に美人姉妹が越して来た 舞夢
あわてても御飯しつかり食べている さくら
誤字見つけ投句締切り迫りくる (久)千代
救急車呼んだら息を吹きかえす 冬虹
喧嘩中不意の来客をおあわて 舞夢
暗証を忘れお金が引き出せず 玄也
あわてても無駄歳月は戻らない 房子
父が来る下宿あわてる女靴 正雄
あわてると主語を忘れるカナリヤで 森子
ふたりづれ見つかり咄嗟に兄になる (久)千代
あわてんでええのに夫逝きはつた 天笑
あわてても仕方が無いと腹くる 伽羅
今度こそ本当らしい妻の乱 一歩
肚決めてからは慌てることは無い 澄子
好きなだけ飲んだ今更あわてない 利昭

お互いにあわて相手を取り違え
口説いたら本気にされてあわててる
味見する舌を何度も火傷する
また次の電車が来るさあわてない
別れ話にあわてて両手つく夫

ピンチにあわてぬへそくり持つてます
改札機あわてる人を通せんば
人一倍慌てる父が居る安堵
妻帰るあわててゴクリ盗み酒

佳

しゃべるだけしゃべりあわてて帰つてく
ばれそうで心に汗をかいている
あわてても核のボタンは押さぬよう
あわてると逃げた魚に笑われる
あわててもお釣はちゃんともらいます

人

あわてると国の訛りが飛んで出る
地
好きな人に好きと言われてあわてだす
天

あわてると証拠くらびる震えてる
軸

誘われてあわてる事のない化粧

兼題「アリバイ」

村上 玄也選

アリバイの裏に女の影がある
盗み酒アリバイになる減り具合
アリバイより先ず身辺を咎められ

房子 朋月 森子 泰子 久峰 希久子 美花 柳宏子 弘風 真理子 昭子 ダン吉 光久 義 諷云児 たもつ 俣子 瑠美子 玄也選 千里 照子 澄子

問いつめてみてにがみが残るだけ
 アリバイがしるもどろの朝帰り
 アリバイを聞かれる用意して吞もう
 アリバイを頼んだ友が酔いつぶれ
 アリバイ工作回り道した上にぎり
 アリバイは先輩の子の運動会
 アリバイが要るようなことしてません
 アリバイで固めた椅子に正座する
 アリバイがしつかりすぎて疑惑
 アリバイの行き着く先は家裁かも
 アリバイを頼んだ奴が妻とぐる
 完璧のアリバイ崩す針の穴
 アリバイが閻魔の前で役立たぬ
 アリバイを崩す時計の針がある
 写メールがアリバイちゃんと見せてくれ
 アリバイは無い公園の青テント
 今晚も部長と飲んだことになり
 完璧なアリバイに足すくわれる
 善人にアリバイ頼むものでない
 母の勘アリバイいつも見抜いてる
 アリバイは京都あたりで逢った時
 わたくしと一緒に言うたげる
 アリバイは不倫の宿にある悲劇
 アリバイを無理に作ってから別れ
 アリバイのあるバラだから紅く咲く
 あれ以来アリバイ要らぬあたりです
 あれ以来メモ魔になったお母ちゃん
 アリバイのある悪人はよく笑う

民 光久 睦弘 柳昌 恭治 耕羅 伽誠 尚士 鹿太 弘風 和香 セツ子 たず子 一風 房子 昭 房子 保子 房子 倅子 篤子 伽羅 隆盛 月子 能子 月子 志代 重人

モーニングコールアリバイ作りだったとは
 住 葱刻む音アリバイを信じない
 冤罪の影でアリバイ消されてた
 葬式のはずの男が淀降りる
 言い訳がアリバイ無いと言っている
 アリバイを嫉妬の雨が消してゆき
 人 アリバイをきつちり残すカタツムリ
 一部分を消してアリバイに使う
 天 ポケットのマッチが泥をみんな吐き
 軸 浮気はれそうでアリバイ言い出せず
 兼題「他人」 板東 倫子選
 持ち帰って見たら他人の骨だった
 夫は他人夫は私のマスコット
 傷は浅い他人気楽に言うてくれ
 傷口を覗き込むのは他人の眼
 他人事と思うた米寿やってくる
 挨拶も他人行儀になる正月
 冗談が思わぬ他人の傷に触れ
 同情は有難いけど第三者
 他人にはどう映ろうとマイウエイ
 忘れたい傷をつつきにくる他人
 他人には理解出来ない血の絆

三男 重人 ダン吉 たもつ 昭風 ともつ 信子 惠勇 螢 しま子 ダン吉 寿美 文 蕉子 メ女 みつ子 順子 諷云児 倅子

思考回路他人の影に惑わされ
 時々他人のように見える妻
 差し出してくれる他人の手の温さ
 自意識は他人意識を生んでゆく
 琴線にひびく他人と酌みかわす
 セレナーデもう他人ではいられない
 他人だから答えは何時も乾いてる
 今を生きる何十億という他人
 明日の絵に他人が彩を添えてくれ
 他人だと言われた父に無心する
 好き勝手言える他人がひとり居り
 銀婚を過ぎた頃から他人です
 二番手が好きで他人を気にしない
 手も金も出さぬ他人が口を出す
 露天風呂他人同士が政治論
 全遺産取る他人よりきつい姉
 古里の山川のほか皆他人
 他人になる用意へ妻の壺貯金
 他人の子叱りあつてた温い路地
 他人から見れば可愛いお嫁さん
 騒ぐだけ騒いど風はもう他人

柳弘 美代子 理恵 比ろ志 いわゑ 理恵 比ろ志 真理子 日出子 睦子 公誠 鐘造 かすみ セツ子 (志) 千代 富子 りつえ 希久子 森子 愛論 鹿太 寿美子

僕の家は他人ばかりが住んでいる

輪の中の他人はみんなよく笑う

愛憎の角を曲れば他人めく

他人にはなれず炎の中にいる

判押せば他人の顔になるわかれ

兼題「つかむ」

米田 恭昌選

モンゴルの小兵つかんだ大賜杯

力すくで正義つかめと言うブッシユ

姫宮のつかまり立ちに二億の目

三億をつかむ夢買う年の暮れ

赤い糸つかみそこねてまだ独り

気心をつかめぬままのお付合い

手掛りをつかみ目鼻がつく捜査

火のついた恋をつかんでいるマagma

運のない男つかんだ女運

しっかりつかむあなたが離れそう
大金をつかみ人生狂い出し

隠れてた欲が顔出すつかみ取り
妻に胸ぐらつかまれたことがある

情報をつかみ屋台で小売する
雲つかむ話聞いているティータム

運が運呼んでつかんだ長寿運
夢つかむまでは帰郷はせぬ決意

福運をつかむ手相のままで老い
よいとまけ汗でつかんだ小さい幸

ニギニギのおてでで宇宙つかむ気だ
幸せをつかむ軍手を白く干す

骨粗鬆症ですつかまないとやんわりと
まず手すりつかんでからの第一歩

魂を驚掴みして魔性去る
修

粗筋をつかんでからの気の緩み
女狐につかまされた裏通り

這い上がる男大地をわしづかみ
写経千巻はとけの風をつかめたか

千手観音どの手もつかむ千の修羅
人

細胞が僕をつかんで離さない
地

掴まえた尻尾許す日許さぬ日
天

羊年へ大きな春をつかみたい
さき

良縁を掴みそこねた高い鼻
軸

兼題「明日」

宮口 笛生選

明日の朝起きる保証はないけれど
卒寿ですそれでも明日の花の種

明日休み妻の笑顔がこわくなる
世が世なら明日はボリーナス支給の日

明日はあす今日の美味しいコップ酒
疲れたと言わず揃える明日の靴

またあした余韻残して陽は沈む
気負わずに明日の罪を軽く押す

一寸先が闇だとしても明日は来る
明日逢える雨が降ろうとふるまいと

本読んでるうちに明日になりました
明日あるを信じて玉の汗流す

拉致家族あした明日が重かるう
明日の歌 歌える幸を感じてる

背伸びしてあしたの夢を組み立てる
煩惱を洗い流して明日をよむ

夕茜明日の夢に賭けてみる
夕焼けの向こう明日のいい予感

きのうとは違う波長が明日にある
明日と言うはかない夢を捨て切れぬ

あしたはあした今日を大事に老いふたり
飲む時は明日の事を考えぬ

何もかも許し明日の米をとぐ
茜雲明日はいい事ある予感

柳 伸

利 昭

一 風

房 子

光 久

朝 子

た ず

恭 昌

萬 的

蕉 子

典 子

丹 吉

義 民

比 志

求 芽

一 歩

明日こそ期待の夢が先はしる
失敗も明日あればこそ救われる
三年の我慢と明日の皿洗う

民 桂作

また明日確かめ合つて生きる幸

弘風

ほどほどのお酒にしとく前夜祭

隆盛

一粒の種子が明日の糧となる

章久

明日という大きな手には逆らえぬ

いわゑ

佳

明日吹く風にはきつと乗るつもり

森子

好きやけど明日は別の人と会う

修

お月さんと明日の話をして歩く

りつえ

それなりに駄馬にも明日の夢がある

寿美

人

定年の日から明日が軽くなる

諷云児

地

定年の港で錆びていた明日

扶美代

燃える血をこのまま明日へラップする

睦子

天

崖つ縁に立てば明日が見えてくる

(久) 千代

軸

今日は今日 明日は明日うまい酒

天笑選

兼題「築く」

河内

ピラミッド築いた民の血よ汗よ

玄也

砂の上に築いてロウランは消えた

桂作

僕の城妻の実家の傍に建て

充子

宇宙基地築くロケットつぎ次と

度

小さな城建てる男の句読点

扶美代

川柳塔の歴史を築くこの句会

一代で築き三代目で崩れ

光久

こつこつと築く小さな自負を持つ

美代子

ギャンブルで築いた城はいつも揺れ

一風

歳月で築いた友情ゆるぎなし

昭子

スイートホーム築いて男蟻になる

理恵

不況風にあつさり暖簾飛ばされる

りつえ

新築のローンに一生縛られる

諷云児

値引きした分は手抜きで建ちあがり

一二三

古里にモダン建築町役場

正雄

新築のマイホームだが嫁が来ぬ

玄也

築五年ローンと響く除夜の鐘

澄子

増築は母を呼ぶ日の設計図

冬葉

空想のお城を築く砂遊び

睦子

飯の世で築いたものは置いてゆく

義

一代で財を築いたラーメン屋

りつえ

許されぬ二人が築く砂の城

鐘造

上沼よりでつかい城を築いたる

利昭

築八年柿もすももも実る庭

森子

日本の未来を築く良い娘

則彦

人徳で築いた強い人脈図

洋

築五年ようやく馴れた電子音

たず子

札束で築く派閥にある脆さ

雅文

築二十ローンがすめば修繕費

三男

そのうちに月にお城を築く夢

萬的

恫喝で築いた椅子が揺れている

美花

ふたりして築いた城を見上げてる

いわゑ

一財産築き疑い深くなる

尚士

塀築き自分の空を持つている

比ろ志

佳

産廃の山迷惑をかえり見ず

惠勇

気がつけば築いた城に一人ぼち

伽羅

無から築く勇気をくれるルミナリエ

セツ子

ストラが築七年を脅かす

柳伸

ローンにも震度七にも耐えた城

保子

人

新築の柱にチューをする夫

正雄

地

築き上げた城からみんな出て行った

順子

天

不景気に築いた城はくずれない

江口度

軸

無重力空間に浮く宇宙基地

江口度

平成14年度本社句会の月間賞杯永久保持者

は谷口義さん(東大阪市)に決まりました。

平成14年度本社句会皆出席者(順不同)

阿萬萬的 稲葉冬葉 石森利昭 安達はじめ

岩崎公誠 榎本舞夢 江口度 太田扶美代

大内朝子 太田昭 大谷篤子 神夏磯典子

川原章久 河内天笑 田辺麗太 高田美代子

寺井東雲 長浜澄子 坊農柳弘 平松かすみ

板東倫子 藤井正雄 松尾和香 西田柳宏子

前たもつ 森下愛論 初山隆盛 宮本かりん

森本弘風 吉村雅文 安永春 長谷川春蘭

吉岡修

計 33名

—水煙抄

秀句鑑賞

—12月号から

出口 セツ子

お日様と握手満期のない野良者

加藤 権悟

水煙抄12月号巻頭吟。満期のないという表現に農業に生きて来た歴史と自負を感じます。お元気で農業に、川柳にご活躍下さい。

カテーテル明日が見たくて闇を這う

大峠 可動

ご自分の病氣も冷静に見つめ、川柳にされる。さすが、川柳家。中尾澤介さんの入院中の句を思い出しました。ご全快を祈ります。

わたくしの肩書ですか元少女

大森 純子

ウィットに富んだ句。世間は人間を肩書で判断しがちですが、私も自戒せねば……。

影が付いて来るから生きる覚悟する

森 美智代

節くれた素手が一番温かい

両川 無限

一人ではなく、側で理解してくれる人がいる温み。明日へ生きる元気が湧いてきます。

絵日記を今日も笑顔で締め括る

木村 無緑

人生、感謝と笑顔で過ごせば良いのが……前向きな作者の生きる姿勢に好感。

あざらしが主役となっている平和

巖田 かず枝

アフガンやテロなど、世界でさまざまな事件のある中、タマちゃんに湧いた日本。この平和な世を守り継がなければならない。消しゴムで消せない嘘が歩き出す

乾 春雄

嘘も人生の汚点も消せたら、どんなに良いでしょう。些細な嘘に尾ひれがついて広がっていくのには後悔することも……。

たばこ断ち酒断ち命修理する

近森 功

不整脈僕を氣遣う音で打つ

渡邊 伊津志

「修理」「氣遣う音」という表現にひかれました。一病息災で頑張ってください。

一方通行返事の来ない糸電話

馬場 利子

糸電話という表現から、幼いお孫さんを亡くされた淋しさ。浄土へ電話が通じれば、ど

んなに嬉しいでしょう。ご冥福を祈ります。スーパーで自分の妻を間違える

木村 忠義

人間違いは誰にでも良くあることですが、それが妻ということで思わずクスリと笑いました。仲の良い夫婦の姿が見えてきそう。

ふる里に土と戦う母ひとり

森 下一知

遠いふる里で、一人で農業をする老母。戦うという表現で、苛酷さや心配が伝わる。

人生を満足そうに呆けている

高野 不二

精一杯、悔いなく生きた人生。仕事にも家族にも恵まれ、呆けても幸福な風景が見える。

拉致された痛みを刻む深い皺

池上 清治

拉致された別離の悲しみ、二十四年間の苦労。家族を北に置いてきて、多くを語れないが、その皺が苦勞や痛みを雄弁に語っている。

いつか飛ぶ長い助走路から学ぶ

吉田 弘子

人間いくつになっても飛ぶ夢を忘れずに……待ち時間なくて病院もの足りず

野田 栄呼

病院で長い間待たされた経験は誰にもあるはず。「もの足りず」と逆説のユーモア。

みづのたま

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

サークル檸檬（前月分）西出 楓葉報

邪魔されぬ抜け道一つ準備する

秋の天いのち裏返し裏返し

杭朽ちて存在感を知らされる

二人では静うひとりでは淋しい

テリトリ確かめたくて杭を打つ

深さより透明感が恐ろしい

突然死ライバル達に降る火の粉

父思ふ隣の雑草引きながら

見ようではちよつと可愛い乱杭藷

害鳥も益鳥も命はひとつ

西部劇 杭がボツンと立っている

杭打った日からつまらぬ顔になる

出る杭の側で力を溜めている

傷口に塩塗りにきたのは味方

あきらめと悟りのちがい自問する

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

孝行は優しい心があればいい
子と思う心が女強くなる

ひかり
八重子

ぎりぎりの妥協で続く夫婦箸

いい夫婦見れば馴れ初め聞きたがり

深刺と生きる五ヶ条守つて

ふるりの好きさを忘れず鮮帰る

秤にも掛からぬ重いこの命

揚子江にバリ見果てぬ空へ翔んでゆく

いやな事胸に収めて波立せず

運命は自分が変わる気概持つ

趣味一つ増やしてからの青い空

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

秋の宵ワイングラスで人を恋う

コップの中の嵐に男溺れてる

枯らしません胸のコップの水中心

病得て食欲湧かぬ老いの膳

食欲に今日も怯える血糖値

食欲の秋をたつぷりグルメ旅

留守番の食事と酒のうまいこと

食欲の怖さへ秋が肥りだす

食欲に母の晴着が減った頃

植山の地図はまだまだ買いません

五七五まだまだ裾野で喘いでる

人の機微まだまだ解けぬまま生きて

経済再建まだまだ続く深い闇

まだまだ続く女のなかの水たまり

まだまだと思ひやがてはとも思ひ

核の灰に怯える生きとし生さるもの

桐灰を愛用してた母も亡く

賢

勝

輝

夫

あきら

放

任

吟

笑

治

延

かおり

いさむ

稲

子

秀

夫

高

栄

義

子

スミ

子

泰

雄

孝

一

尚

士

晴

美

克

治

灰皿に思考と愚痴と鬱の山

葬祭費灰になる日のランク付け

灰汁抜けはしてるが残る国訛り

灰になるまでおんなです紅を引く

寝たきりの祖母が指図の孫の旅

台風の向きが気になる旅支度

秋最中駅の紅葉も彩づいて

水替えて澄んだ金魚の目と語る

ふり出しに何度も戻る砂時計

着地失敗ばかりして秋が去る

軸脚がゆれると円い輪が消える

春夏秋冬秋はことさら人を恋う

川柳エスボ

山本

三郎報

どんな顔して良いのやら娘は嫁ぐ

一坪の庭で泣いたり笑ったり

産声が合図となつて夜が明ける

秋雨に心いやされ帽子編む

花の下みんなやさしい顔になる

我が胸の燃ゆるに似たり曼珠沙華

わたし流に生きて同居を考える

寝たきりになりたくない万歩計

終の城仕切るカーテン一枚で

花びらを一枚載せたランドセル

田に畑地球削つて人は生き

みんなから何時も吹く風あたたかい

メールより手紙にもみじ一葉添え

薄化粧チョッピリ若く見える妻

ぼっくり寺視野にとびこみ途中下車

武史

無禄

満蔵

石舟

柳宏子

庸佑

紫香

メ女

活恵

磔

比ろ志

諷云児

三郎

とし子

昭一朗

うめ子

さくら

一幸

とよ子

政雄

高栄

三代

三峰

ルイ子

れい子

任有

はつよ

微笑んで席を譲った茶髪の娘
買物に行けば枝豆買う夫

もひとつの眼になつてゐる指の先

雨の街色とりどりの傘の花

幼き日田んぼのれんげ首飾り

目を見詰め笑うとだめよ睨めっこ

川柳塔みぞくち

小西雄七郎

菊の香に女心が揺れ動く

菊人形まつと利家よくかおる

菊の芽をさしてふやして花園へ

一年の入手に大輪見事咲く

菊満開亡父の幻見え隠れ

仏壇の遺影と語る菊の花

秋最中小菊と出会う母と逢う

部屋中へ香り漂う菊花展

菊薫る故郷フェスタ風の中

菊花展みんなに賞をあげたいな

子のように愛情かけた菊花展

着飾った菊人形も肩が凝る

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

妬まれて男は煙し銀になる

恋人の足音胸が鳴ってくる

妬む火も消えて路傍の石になる

やがて冬幸せですか今日も雨

やがて冬振り子狂わず回ってる

口ポットの稼きを妬む蟻仲間

理屈より体が動く道具箱

ゆき子
さち子

さとし
ゆう子

星花
文子

康女
鈴枝

千代美
弘子

豊枝
公美枝

正光
静江

和代
智恵子

久子
雄々

鉄男
一光

きよし
妙子

ハサ子
順風

慕情

理屈言う隙を与えぬ百合の花
風格の父は屁理屈言わせない

張り替えた障子の影の深まりて

隣国の妬みが消えぬ弾の跡

足音がふいに止まった窓の外

再会の家族理屈のない涙

屁理屈を並べて銚子倒れない

にんにくをたつぷり漬けてやがて冬

足音を辿れば弥陀のもとに着く

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

めぐりくる天命運にゆだねおく

抽選会当った事のない私

上げ潮の友が運氣を吸い取った

生きていく運不運あり大らかに

台風が逸れてリンゴの笑い顔

新米を炊いて一膳多くなり

赴任地に慣れ男ひとりの米を研ぐ

コンビ二で雨宿りするの面白

足腰の萎えに乳房はうろたえる

なき人を偲びつつのむ朝のコーヒ

淋しさを啜え直して秋の風鈴

平面な空間の中で加速する刻

枯れ方の見事な席に人が寄る

二人には二人だけの喫茶店

紫式部帰省の私迎えくれ

夕陽まみれの秋は昔を呼び戻す

琵琶法師かくやと平家物語

泡立草さらわれながら繁つて

ふさあ
花匠

ツネ
井蛙

黙人
千加子

花峯
五楽庵

節子
正子

幸子
孝一

純
和子

吉太郎
久子

愛
芳子

定男
寛之

昭三
糸子

比ろ志
勝巳

千恵

佳句地十選

(12月号から)

津村

志華子

愛は深まりしなやかな手話の指

こっそりと妻も浅瀬も愚痴を吐く

手相には出ない幸せ持っている

ふり洗い押し洗いで落ちぬ過去

幾つもの角を曲って来た背骨

満月を見ている勇氣わいてくる

口笛は淋しい男のためにある

沢山の未来を持ったゼロが好き

縁あって片目の金魚飼っている

自分の地図まだまだ下書きのまんまで

追伸に吾が家の菊も見頃です

焼酎の湯割に深い秋を知る

妻咳けば私も咳きいてたわりぬ

今少し生きた山茶花こぼれ咲く

病院の扉を押せば枯葉散る

昭和の皺を平成の風が掘る

川柳ねやがわ

江口

度報

同窓会名簿を買えという便り

便り待つポスト満月みて眠る

FAXで便り電話で来る返事

四季の花々神は便りを忘れない

結着をつける女の火の便り

只事でなさそうふ厚い便り着く

家中にぱつと灯のつく便り

東園
年代

光穂
光穂

恵美子
史子

澄子
理恵

典子
芳枝

義子

武庫坊

度報

光穂

しづ子

薫

武庫坊

度報

光穂

しづ子

薫

武庫坊

度報

光穂

とし子

ルイ子

弘一

時弘

亜成

洋

素顔見せ仲良くなつて旅終る
 憧れた都会の素顔見せしもう
 貧乏神の素顔笑つてすれちがう
 飲む前に素顔で約束してほしい
 素顔にもまだからくりがあるらしい
 化粧せず読んでいる哲学書
 石段を上る素顔になつてくる
 昇格へ思わぬ顔も寄つてくる
 遺産分け疎遠の者まで寄つてくる
 国宝に穴があくほど近寄る目
 待ち合せかけ寄り方でわかる仲
 政治家へせつせと通う寄生虫
 未だ喜寿だ寄る年寄と言わせない
 寄り添うてやがて一つの影法師
 寄り先に電話をしたら来てません
 灰皿に夕べの思案盛り上がり
 寄る辺無く我が行く末を考える
 朝と宵考え変わるあまのじゃく
 更めて妻を讀める金婚日
 しあわせで今日も鏡に願うつす
 送別会心は千々に身はひとつ
 コスモスに歓迎されたバスの旅
 優柔不斷うつむきながら物を言う

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

萬 庸 祐 一風 順三 修 利昭 朝子 光子 亜也子 日出子 恵子 博泉 勇太朗 仁清 高 度 三郎 冬葉 波留吉 たもつ あやめ かすみ 紫香

七曲がり越えて女の深い皺
 愛溺れて理性が揺れる曲がり角
 曲がり角わつと泣きたい時もある
 決断を男に迫る曲がり角
 美人やと言わねば機嫌悪い妻
 美人からのメールを妻がけしてある
 ごめんねの一言で一層美しい
 食欲をそそるメニユーのあるお店
 魚の歌迷わずメニユー焼さんま
 泉水に静かな波紋水すまし
 四海波静かと謡う金屏風
 人生の運を託して波に乗る
 大波小波越える夫婦のはしけ舟
 母の海わたしの波だ波となる

三幸川柳教室 三宅 保州報

美弥子 萬的 度 柳安子 シマ子 東雲 秀夫 敏子 良子 太一 朝子 湖風 愛論 和子 正一 朱夏 章子 嘉平 和代 敏子 美枝子 武 純子 マリ子 利治

ブランドのラベルに胡坐かく器
 妻という器で男泳がせる
 スマイルを武器に不況へ立ち向かう
 由緒ある器へ芋の煮転がし
 騒がれて大器未完のまま朽ちる
 捏造で時代狂わす古代土器
 饒古な器に似合う蓋がない
 冗談を本気にしてる彼が好き
 好きだから諦めている恋もある
 生き恥をかくても好きな趣味に生き
 わかしむかし君の笑望が好きだった
 好きな道だからつまずき繰り返す
 好きなだけ食べて痩せたいお年頃
 好きというレールに乗ってゴールイン
 パパとママどちらが好きという愚問
 なんとまあ戦の好きな星条旗
 耕せば土の匂いの風が好き

竹原川柳会 時広 一路報

三千子 公子 鉄治 みね さち子 健三郎 桂香 正圃 かず子 当代 起世子 栄之進 千秀 義雄 保州 町子 登美代 蘭幸 夏喜 正安 蝸牛 厚子 不朽 民恵 年子 節生 孝枝

遠慮なく意見を言えといわれても
遠慮した椅子にだあれも座れない
その内に苦痛になつてきた遠慮

気づかいが過ぎれば遠慮も重くなる
遠慮しておこう何かが匂うから
待つてました今日はうれしい給料日

借金があるから明日も頑張れる
滝の向こう太陽がある虹がある
近寄れぬ轟音滝に神宿る

じくじくの流れの果てを飾る滝
政治家より滝に打たれてみるがいい
滝となる淵となる今朝のジレンマ

滝のぞくみんなが覗くみな黙る
滝の情熱が欲しくて手杓水
彼の目が滝と一つになっている

滝を覗て告白された帰り途
百までも生きる気背伸びなどしない

夜爪切るたびにふと手が父母はない
よう喋るなあと夫の顔に書いてある
公園に虫の声なし曼珠沙華

待ち兼ねた秋へ佯しさつきまとう
おいしいと黙つて食べるお父さん
無人駅柿もたわわに人を恋う

陶工の瞳が灼きつた柿の彩
角隠すでんでん虫に策があり
或る時は角突き合はす仲間うち

山の神年に二三度角を出す

遠慮なく意見を言えといわれても
遠慮した椅子にだあれも座れない
その内に苦痛になつてきた遠慮

京都塔の会

都倉

求芽報

房 子 笑 子 菩 居 汎 美 万 年 千 枝 史 子 輝 恵 一 枝 栄 恵 節 夫 幸 子 静 風 半 覚 力 淑 子 一 路

早や角が見え隠れする挙式前
神事とや縄かけて斬る鹿の角
人かなし角を出したり隠したり

真心の介護に折れた姑の角
寂聴法話 女の角をまるくする
落葉樹 自給自足の森育つ

買つて出た苦勞こやしに今日の椅子
怖いものないどん底で得たこやし
愛情のこやしが効いて今がある

貧乏は平気こやしにする読書
財はないが愛をこやしに子ら育つ
過去すべてこやしに女強く生き

余生へのこやしに趣味を二つほど
折り返しすぎてこやしがいてくる
変化球投げて届かぬもの思い

旗色を変える言葉を選つて
愛の力で受けるあなたの変化球
泣柿も世間の風が旨くする

植えて替えて予想通りの雨になる
タマちゃん海の変化を気づかせる

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

兵八郎

道を説きながらだんだん赤くなる
幸運へ一歩踏み出せ左より

レンタルの晴着が並ぶ七五三
銀柄のを夢見た頃が懐かしい

約柄の女をよけて振り返る
言訳の長さを計る砂時計

猫まんま好きな親父で戦中派

益 子 求 芽 礫

百合子

宏 子

高 栄

庸 佑

欣 之

輝 美

ルイ子

満 子

メ 女

萬 的

葉 子

とし子

英 一

福 子

幸 代

啓 子

隣との境ほど良い色で塗り
キャバレーをめぐる落ち目のヒット曲

打吹川柳会

大森 孝恵報

手加減をすれば角出し槍を出す
親子でも加減はなしの銭勘定

人目さけ松茸山に遠まわり
ズカズカと出るには出たが手が震う

病室にノックもせずズカズカと
点滴がいつまで続くもつうい

ズカズカと胃の中カメラ入り込む
招かざる客吸いがらを置き帰る

円軌道地球が今日ももっている
ズカズカと野良が臭いをかいで来る

ズカズカと人の懐当てに来る
ズカズカと空き家に入り酒を飲む

逢うのが嫌で遠回りして鉢合せ
山間の空気を食べに遠回り

遠回りしても食べたい手打そば
酒つぐと円滑に口回りだす

火の用心遠回りして柿どろほう
始まりも終りも同じ円の上

円満な家庭四代同居する
一円で僕を買つてはくれまいか

円卓を囲み話に花が咲く
円高がその気から笑うだけ

円高がその気から笑うだけ
十五夜のお月さんには染みがある

満ち足りて円の中から出られない

虹 汀 正 剣

玲 子

たけ代

善 江

順 子

貴 恵

紀美恵

美知江

克 枝

友 楽

和 子

幸 子

禎 元

季 芳

龍 枝

博 文

重 忠

子だくさん加減をしても七人目
傷口を開けにズカズカ来るカメラ
合併の話スカズカ通り過ぎ
離婚の元は枝豆の塩加減
世渡り上手何をさせてもいい加減

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

人間の数だけ生きる道がある
爪立ててみても独りの傘の中
家中の鏡に違う僕がいる

さまざまに生きて人生明日がある
国際化さまざまな人古都を行く
さまざまなこと多すぎる新世紀

さまざまな雲の流れに似た処世
迷いまだ解けず深爪してしまふ
赤い爪私のポリシー許さない

赤い恥に愚痴は言うまい爪を研ぐ
爪赤く染めて赤い灯に生きる
爪の垢はいくら好きでも飲めません

みやげより千円を取る孫の顔
千手観音わたしの縋る手はひとつ
千本の薔薇より嬉し子の手紙

千差万別競い疲れた終電車
一握の砂になりしか千年後
千仞の谷で拾ってきた笑顔

千金の愛は秤ではかれない
千人からの告白よりも君の愛
千円でママのサラダが光つてる

千秋の思いで耐える拉致家族

勝見 芳光 螢 完司 孝恵 大輪 英子 忍 和 三喜夫 佐代子 和重 富美子 豊太 正博 美羽 和香 三男 鉄治 翠子 保州 克子 あき子 優子 稚代 順子

千個の鈴ならしてみよう炎える秋
懺悔して裏も表も日に晒す
満面の笑顔そろばん懷に
裏表映す心にある鏡
裏も表も歩いた人で温かい
不器用で裏も表もない夫
人は皆裏と表が同居する
本能が私に潜む裏表

ふくべむら川柳会

村上 信子報

夢フェスタ心豊かに花咲かせ
大家族心配りが和を保つ
晒されて太平楽に生きている

鴨川に友禅晒す京風情
亡母の傘雨の雫が切れにくい
農婦われ洗い晒しのモンペはく

小気味よい汗の雫とホールインワン

川柳大坂

高木 信醉報

座禪する人だけ分る禪の道
ボクの顔忘れないでと秋の月
寒がりて單身赴任したくない

深刻な地球がだんだん熱を出す
遅刻して上座がひとつあけてある
ブッシュさん銃を使わず心打て

深刻な話が洩れた糸電話
無礼講なのに席順決まつてる
相槌を打てば風呂敷でかくなり

大臣の椅子がねらいの人ばかり

照月 一步 金太 青道 重人 功 洛醉 柳弘 鉄心 美花

温暖化島が消えるぞ手を打たな
座りタコ祖母の昔に花が咲く
高野山老若男女すれ違い
天高く私生きている笑つて
いくぞたび流転の記憶秋刀魚焼く
展覧会知ったか振りの声高に
石庭に座ると邪心洗われる
年功序列の群を社会がいじめ出す
階段を下りる空しい物忘れ
座るだけで金取る店があるそう
引き際の美学すんなり爪を切る
単調な暮らしにける唐辛子
深刻な顔で座った通夜の椅子
敬老の日は真ん中に座らされ
国民をいじめ外へは気前よし
老い二人何でもかんでも二人連れ
正座して千羽目の鶴折りあげる
一人でも真つ直ぐ道歩くだけ

川柳塔なら

坊農 柳弘報

傷テープそれから愛の芽が育つ
回りくどい言い方されて出し渋り
雲掴む話で弱味かくしてる
美術館巡り豊かな風になる
一目はれ回り合わせの夫婦橋
ふる里へ帰帰男の背のうろこ
村まつりにこにこ回る寄付集め
小包のテープに託る親不幸
喜寿傘寿米寿も参加美術展

かよこ 柳昌 兵庫 楽子 春蘭 柳宏子 一風 元紀 丹吉 利昭 民子 朝子 章久 いつみ 本蔭樺 喜楽 まつお 信醉

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香 蘭香

公園に迫る暮色や二科を出る

古代史の美術ひっそり住む明日香

秋の雲放浪癖がまた疼く

奈落から回り舞台を人が押す

荷造りに上手下手ないガムテープ

回らない知恵も出し合い老夫婦

回り道好きなお方に逢えそうで

ごめんねが言えぬテープの空回り

美が過熱する逃れられない時間

草に寝て雲百態と戯れる

また一つドラマ回ってゆく夕陽

帯を解く音聞こえそう美人の絵

作業服テープカットの端に居る

美術展五感を磨くいいチャンス

人妻と景色はめあい回り道

雲低く垂れて懺悔が深くなる

大観も魁夷もはずむ秋の天

合掌の背なほに回った欲ひとつ

地球儀を回せば戦火の中に愛

大津絵の鬼とむすんで秋の酒

四半世紀雲が晴れない拉致の闇

川柳塔まつえ吟社

空元氣見抜かれてる聴診器

空元氣心淋しい人だらう

空元氣出して細胞なでている

空元氣妥協のときを探してる

酒呑んだときだけ天下俺のもの

奥さんが持て余してる空元氣

春 蘭

秋 泉

春 雄

章 久

あやめ

絹 子

茂 雄

恵美子

定 男

富 子

洋 子

太 一

真理子

朝 子

隆 盛

國 治

秋 雄

一 風

柳 弘

道 子

良 一

紫見報

津川

たけし

房子

多 喜

注 湖

茂 美

与根一

期限つき都会に投じたブーメラン

ふる里も都会も同じお月さま

絵の具溶かして都会を描きあげる

憧れた都会の隅で息をする

良いところはばかりが見えていた都会

善悪の境界線はない都会

好きだけで渡り切れない川もある

逢えぬ日はせめて電話で好きな声

好きなドラマ母がつけてる赤マール

くし運が良かった隣に好きな人

遠くからばかり見てます好きだから

ボーフラも金魚も好きで単細胞

信心が筋金入りで怯まない

筋金の錆びた夫婦で支え合う

筋金が取れて渋柿甘くなる

筋金入りの技で仏像彫っている

筋金を見せて男が海に生き

筋金も錆びて斜陽の物語り

枯れすすきわれによく合う紙コップ

玉椿コップに挿して筆を執る

コップ酒今日のケジメがまだつかぬ

ガツチャンと確かにコップ割れた音

ひよつとこの口で迎えるコップ酒

父の目はもう許してるコップ酒

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

単調な暮しへ猫も大欠伸

栗ごはん炊いて独りの秋を食べ

休みたい所に椅子が置いてある

澄 子

きみ子

主詩朗

昭 二

ちかし

登

民 子

ちえこ

幸 子

宏

畔

桂 子

玲 子

治 代

知恵子

静 恵

早 苗

町 紅

日出子

政 子

昌 枝

多賀子

多賀子

紫 見

鹿 太

幸 子

秋日和恩師の句碑を読み歩く

夢抱いて行くか松井も大リーク

いい顔で好感持てるノーベル賞

また一つ小言を抱いて不貞寝する

生涯を誓った人が先に逝く

もう遅い大志を抱く歳がずれ

二人とも大抱いている長話

仕事着で数値尋ねてノーベル賞

いい訳がうまくやる気のない息子

四捨五入しても男に成りきれず

生涯を雑魚の一微押し通し

生真面目な父を取った古時計

帰る児を案じる母の温い灯よ

生涯を一二三で暮したい

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

脱ぎ捨てて木枯らしを待つ冬木立

枯木にも花を咲かせと地場産業

木製のぬくもり嬉しおもちや箱

一粒の種子がそびえる木をめざす

明日の夢語る二人を抱く木陰

切り株に座って木々の私語を聞く

つっぱった心木の香にほどかれる

名木に意地がみえたる門構え

鉛筆になっても芽える木の匂い

カラオケを調子外れが盛り上げる

口癖に絶好調と言っている

あのベンが俺の人生狂わせた

まな板の調子が替わる共稼ぎ

江 美

玉 枝

よし子

秋 子

信 子

亀与子

耕 治

孝 一

ま さ

満寿蔵

正 治

澄 子

柳宏子

紫 香

満寿蔵

章 司

フ ジ

敏

吐 来

庸 佑

みつこ

さとみ

一 壺

一 知

ダン吉

たけし

敦 子

調子良いとつくりの数増えている
上役に調子を合わす平の知恵
一杯の酒で調子が狂い出し
再検だ俄かに調子悪くなる
順調の出世女が追ふさぐ
叩いたら調子出だした古時計

飛ばさずは無事に帰ってバイクの子
ライディングスーツの黒が風を切る
持主の癖飲みこんだ古バイク
一台のバイクと長い旅をする
ストレスを撒きちらしてバイク音
こそこそと一人苦しむ内緒ごと
こそこそその訳を知つてる脛の傷
目が冴えてこそこそ探す発泡酒
黒幕がこそこそ動く改選期
こそこそを隠しカメラが皆ばらし
こそこそと母の動きに無駄が無い

西宮北口柳会

龜岡

ガス灯にイブモンタンの横顔が
灯のいちど灯る風を待ち
苦吟の灯ますます白く夜は更ける
万一の事なぞふつと枯葉舞う
万が一非があろうとも娘の味方
万一を思つてばかり踏み出せぬ
万巻の書よりも塔があればよし
万歩計くつろぎの歩を積んでゆく
万策も尽きて傘打つ夜の雨
万年筆兄の形見が淋しそう

真一 志洋 専平 いさお 洞庵 りつえ 桂子 狹杏 久仁子 扶美代 美代子 昇 重人 耕策 かつみ 六子 泰子 哲子 孝一 千代 松煙 富喜子 澄子 能子 嘉彦 比ろ志 満寿蔵 トミエ

万の愚か重ねて神に許される
ポケットの石をぬくめたまま過ぎる
駆け落ちの過ぎた昔を笑い合う
冗談が過ぎて梯子を外される
妻の掌の上で過保護に飼育され
過ぎ去れば喧嘩相手も懐かしい
うぬばれが過ぎると落ちる自己嫌悪
難民に分けてあげたい太り過ぎ
苦しみも過ぎると笑う歳となり
本心はにぎりこぶしの中にある
正座して妻が本心ですと言う
裏の本心さぐる変化球
言う時がある本心を胸に秘め
本心はいざと言うまで隠しとく
落ちこぼれ夢は故郷の青い海
ちと憎い孫の的射た捨て台詞
高野山合祀の塔の雪はらう
独り者脱いだ形のシャツを着る
茶柱が今日一日を予言する
一日に二人の計報聞く寒波

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

駅弁とパンフで夢想してる旅
無人駅風が静かに抜けるだけ
讃岐路はうどんに並ぶ秋日和
だんだらしたい日夫婦で揃わない
無人駅カードリーダあくびする
始発駅今も声援送ってる
午後の部へ朝から並ぶ整理券

哲子 哲子 晴美 鹿太 石舟 てる 房子 文 義子 いわゑ 昭三 萬的 春蘭 江美 メ女 いたる 奮水 哲男 光久 正坊 セツ子 久子 黒兎 保子 信男 桂子 ヤギエ

今日もまたならんで頭下げてはる
並ばねば生きていけない頃を生き
明日からはやめるつもりでたらだと
もの言わぬ券売機にも人は馴れ
男性の後が早やそなレジの列
人生の縮図集めて駅広場
人生のラストの駅へ鈍行で
拉致の国新聞からも読みとれず
だらだらと愚痴こぼし合い和んでる
デートした駅そのままだ降りてみる
駅頭は人の世映す万華鏡
人並び辛抱できぬ若い母
一駅の間美人出来上る
駅ビルに居て改札口をさき歩き
方言の聞けぬ故郷の駅淋し

川柳ささやま

遠山

可住報

べこべこにおながが減つたことがない
プライドの指定席です床柱
靴はいて最後の日まで歩きたい
聞き上手忘れ上手な二人連れ
丸い背にプライドだけはまだ残る
ゆつくりとやがて二人の忘れぐせ
プライドを捨てて視界を広くする
プライドが私の背なをそつと押す
気に入りの靴はやつぱり最後まで
ほほえんで風呂の鏡と七変化
二人して築いた暮し今がある
古参というプライド利かす女癖

実 昭子 契子 いさむ 正三郎 千里志 祥風 長一 雪子 見清 よしろう 緑骨 柳童 勝 恵美 美智子 かほる 八重子 靖子 とみ子 つや子 君代 朝子 康子 美紗子 美緒子

こつこつと地道な知恵にノーベル賞
 嫁の知恵素直に受けて生かされる
 合併で生き延びる知恵繰返す
 悪知恵の狐と狸にもらう知恵
 万策が尽き珈琲にもらう知恵
 金借りる話すき焼煮えつまる
 ごった煮の中で自分を見失う
 煮こりが好きで男で淋しがり
 寒い夜ホッコリさせる関東煮
 欲と得からむ議案が煮つまらぬ
 タクト振る父が大きく見える日も
 百均がビッグな店となり人気
 上沼の大きなホラが笑いとる
 日朝のビッグニュースが駆け回る
 勝敗を決めたビッグなホームラン
 ビッグバン躊躇の付けが今回る
 飄飄と命を生きているビッグ
 ムコドノに身柄あずけるお立ち酒
 身柄まで拘束有無を言わせない
 ぬくぬくと身柄拘束されてます
 釣り書にずらり託した身の証
 核という魔物に煮え湯二度二度
 章駄天で一攫千金馬券買う

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

頂留子 久子 弘泰 清成 明正 重人 遠野 柳伸 なぎさ 雅文 度 叔子 東雲 庸佑 三男 初太郎 朝子 寿美 柳宏子 朝代 澄子 ダン吉 民代

安心なさい年相応の痛みです
 曼珠沙華休耕田に燃えている
 綱引きに負けてはならぬ北鮮に
 近寄れば元氣をくれる秋さくら
 私だけ俗名のままだめですか
 ギスギスとゆとりなくした日本人
 糸口がやつと掴めて握手する
 栗飯のまばらな洪は亡母の味
 人を許してこころ豊かに歩きたい
 積んできた石 雨風に試される
 出口には笑い袋をおいておく
 叱られているのだろうか寝つけない
 明日の水たくわえておく俄か雨

川柳高知

川竹

松風報

蘭 天雀 なみ てい子 ゆき 田鶴 恵子 ふみ 玲子 千代 千春 日枝子 八重子

猿山の虎視眈々と第二ボス
 尾が振れず昇進順が先送り
 残業の父に負けじと受験の灯
 倉吉川柳会 竹信 照彦報
 ベルの無い駅で車掌が笛を吹く
 眉毛剃りへの字書いてるお嬢さん
 自己主張曲げてなるかと始業ベル
 青量大の字に寝て天下とる
 流れゆく朽木にのどか鳥の影
 流失の橋の向こうは黄泉の国
 畳替え僕の寿命が指を折り
 改築の洋間冬には畳敷く
 人間が住めば畳が息をする
 非常ベル鳴っているよと済まし顔
 わたしこのベルは脆くて泣きじゃようこ
 すんなりと無心のベルを押している
 神無月こいこいコイとベルが鳴る
 永住を日本の畳待つて
 体調不良心のトゲを刺る休暇
 内緒はなし流失したか渦になる
 発車ベル鳴ってハネムーン二人きり
 自分史に重ねた罪が流せない
 表替え暮らした染みは隠れない
 今日からはネコをしめ出す新畳
 墓さえも流失したという報せ
 羅針盤失い日本漂流す
 堰堤にひっかかる古木気にかかり
 無精髭捨てたら気持ち若返り

美々 良雄 松風 かつみ 重忠 季芳 喜美子 和子 幸子 十三男 泰輔 芳光 一夫 きみ子 和歌子 秋草 ゆり子 よしえ 日出子 和枝 勝譽 萩江 瑞子 次男 京子 志郎

量の目数えた頃もある私

学校のベルを時計に野良仕事

転がって臥して大の字青畳

主の癖染みこんでいる古畳

一畳の墓地を手に入れ安堵する

ウエディングベルの続きは寺の鐘

くらぼこ川柳会

前坂なお美報

弾除けに体を張れる母で居る

ボール蹴る先に歯止め石がある

無農薬野菜に消費者が並ぶ

母猫の乳が張るまで並んでる

楽をするために道具を買っている

古き者いまの道具に馴れなくて

母の海狭いところを捨てにゆく

暇な時昼寝の夢がおもしろいぞ

傘寿まで色気の傘はさしてやる

八十路過ぎたまりたまつた荷を分ける

母の日の一日屑の荷をおろす

親の欲背負い果立つたハトポツポ

直球に弱くてすぐに手を挙げる

サッカーボール蹴られ蹴られて強くなる

並んだらおんなじ顔に見えてくる

吹けば飛ぶ歩では終わらぬ辞書並べ

道具にも血液型があるらしい

悠々自適老いには趣味の道具箱

ふるさとの水はとつても美味である

まいったなし晩年生きる暮があく

秋満載ふるさと発の荷を作り

瑛子

賀寿恵

悠子

康子

紀美子

照彦

和代

菜美

小生

みち子

あらた

キヨノ

つや子

重忠

喬水

ふみ子

美智子

帆雀

富子

常子

一揆

静生

遊子

螢

なお美

涼子

幸子

人間は狭いところを抜けたがる

伸びる芽を勝手に摘んでいる道具

血の色を気にして茫揺れている

飛び出した杭に世間の風強い

天からの荷だと思つて負うている

豊中もくせい川柳会

田中

音沙汰のないまま秋が深くなる

静寂な庭に響いたしおどし

日本のハンドル握る星条旗

ハンドルもブレーキもない怖い人

ハンドルは妻に任せて火の車

生意気に両手はなして乗るでない

したたかに生きて酸っぱい飯を食う

もぎたてのミカンを食べた孫の顔

親友だからこそ酸っぱい事も言う

一人住まい酸っぱい匂い消しておく

覚えてたの酸っぱい顔をさせたがり

人生の甘く酸っぱい青テント

親方はここいとうとき釘をさす

釘を打つ場所を探して壁叩く

抜けそうで抜けない父の打った釘

三十三回忌 仏を知らぬ人はかり

秋を撮る構図の隅に石仏

老いし我 清き流れやそのままだ

こぼれ話拾い集めて本になる

亡き母の好きな花生け深呼吸吸

ノーベル賞なのに控え目 田中さん

蹠に脳のツボある面白さ

はるお

悦子

小鹿

一眸

公弘

正坊報

求芽

庸佑

正坊

啓生

満寿蔵

博子

ことぶき

実

英子

つえ子

千津子

知香子

千里志

巴子

紫香

寿美子

萬的

久太郎

満寿已

玲子

郁子

緑骨

久し振り道草しよう秋モミジ

秋風で万歩計まで弾みだす

綾錦織りなす山が呼んでいる

雲悠々こだわり捨てて秋と居る

川柳ふうもん吟社

杉本

反目はするな人類一つだぞ

減反の土地が祭りを恋しだり

名人の鯛釣るコツが盗めない

さすがプロ皿の魚が反り返る

ふるさとを歌えば浮かぶねちゃんこ

女房よレンジでチンは真つびらだ

B面に反骨の血を秘めている

国の舵任せるプロが見当たらない

自分史へ光るところも入れておく

反対をされてますます湧く意固地

戦争のプロがいるので止まらない

プロだって人間だからミスもする

特攻へ死の命令は真つびらだ

ねぶちゃんこそ素直な人になつてくれ

すれ違ふ息子他人の顔になり

プロ級と言われカラオケ夢中なり

秋祭り迎へ今年も安堵する

反省へ日記のペンを重くなる

反省をしても無視する鼻眼鏡

百姓のプロに手抜きが出来るかい

反対をされて益々燃え上がる

来世まで夫と一緒に燃え真つびらだ

反対は闘志を燃やすエネルギー

蛙

見清

春

メ女

孝男報

洋々

主一郎

蟹郎

節子

裕子

悦子

一瑤

一鼓

昌京

志げ緒

修

一粹

喬水

益子

春名

茂登子

金祥

(今)信子

(幸)良雄

(下)無限

のり代

はるみ

プロの技持てば持ったで苦勞する
プロになる努力の涙隠して
反応を見てから明日のセリフ書く
無党派に選挙のプロが泣かされる
プロよりも拍手の高い素人だ

城北川柳會

川久保陸子報

虫に耳とられ思索の行詰り
北の海寒流はいり濃霧立つ
輪の中で愛が生れた盆踊り
思い切り若い作りで敬老券
すず虫の音に涼を呼ぶ季節感
種子島やつと成功三号機
悪人の知恵は携帯電話から
路地の風サンマの匂いまき散らし
ばんやりを叱つてくれる秋の風
弁当は同じで意見みな違い
うせめを見付けるまじないして忘れ
幸福の基準を測る私の手
おひらきは河内音頭の絵踊り
回顧するじつと我が手に問いかけて
席順が乱れて宴が盛り上がり
両横と相談寄付の額決まり
赤い糸夫婦は何度も染め直す
ウインクをされて錯覚してしまう
サービスにくれた金魚が生き残り
子離れが女に戻す赤い靴
天才と紙一重だと思つて
生い立ちは話したくない曼珠沙華

はつ江 孝明 孝男 殺 千代子 春蘭 東雲 久留美 容子 柳一 政子 あき子 達子 照子 とし子 昭子 あい子 史風 高栄 はじめ トヨ子 求芽 典子 順三 ひさ乃 修 千里

明日のため過去を話して曼珠沙華
北鮮も照らすか名月芽え渡る
中年にまだハードルがたんとある
人の世や苦楽転々愛転々
ありがとをいつとらここで温める
前向きに生きてスランプ寄せつけぬ
ノーベル賞ダンスも知らぬ研究者

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

血の色は同じはずだが北朝鮮
嫁姑妥協の道をさぐりつつ
父の血を継ぎ酒好きでお人好し
百葉の長と言うから飲んだのに
温い風硬い心の戸をあける
古稀過ぎた姉のしぐさに母を見る
実りある余生を埋める彩探す
じいちゃんの胡坐の中にある童話
この人と越えるに決めた山がある
夕陽照る実つた柿にカラス群れ
逆転し子からパソコン学ぶ父
無常とはこんな感じが寺参り
ライバルに越されてのんだ苦い酒
初デートとったカメラが全部はけ
千切れ雲しばし浮世の舞を舞う
ためらつて一杯呑んでいる肝臓
帰しません親子の絆実を結ぶ
紅い葉を集め夕餉の箸置きに
妥協して結果を悔やむコップ酒
母さんにみんなばれてた隠しこと

綏子 倫人 重人 あやめ 一枝 志華子 公一 一風報 八寿子 増道子 宏至 ミツ子 君江 (馬) 宏 一風 幸枝 隆盛 晴美 俊一 恭一 奈良司 友甫 正純 一道 (本) たえこ (赤) 妙子 ますみ まさと

秋の雨人恋しくする妥協
フルムーン息子がくれた旅支度
無限の寂しさと安堵も同居し
実る秋おぼれ忙し柿のれん
鯛雲流る果てに老母独居
物が無い時代に生きた底力
雑魚の群れ背泳うまいのがひとり
雑字の苦手パソコンなら得意

岬川柳會

八十洞庵報

話したい話したくない子等が待つ
あやとりの橋が思い出手繰り寄せ
隠してもふくらんでいる披露宴
落成を祝う枅酒盛り上がる
パソコンに好意を寄せた夢世界
たくましい商魂が好き法善寺
祝宴も横目でにらむ酒の量
疑わず明日の日付を書いて寝る
疑いを持たぬ人生疑われ
夢天女舞う姿追い敦煌へ
もう少し待てば良かった擦れ違い
なんとなく通うものあり振り返る
疑わず生きているこの世の難しさ
譲られた好意すなおに受ける年
疑いと好奇心からノーベル賞
少しだけカラシ効かした趣味燃やす
ノーベル賞祝宴続くいい疲れ
満腹のしるしくわえる爪楊枝

いつふみ 義明 春江 順生 知佐子 美代子 民子 明 茂平 令子 とみ 俣子 孝子 里子 桜琴 和香 昌夫 富美子 和美 年子 みつこ 洞庵 勝

むらくも川柳会

毛利

幸報

麻酔薬打ってまな板鯉となる

手袋を妻が差し出す霜の朝

夕食の麻酔がほしいビール党

いけず子はぐずぐず上手逃げ上手

霜柱踏んで明日を確かめる

寒い朝冬の前兆霜白く

病室で麻酔の切れる夢めぐり

今は亡き友の想い出三瓶山

雨降りて自分の時間取り戻す

才たけて何かが欠けている感じ

拉致されて帰国の人々の心境を

敬老会案内受けて元氣湧く

敬老を祝う手紙を孫がくれ

神主も仲間遊んだ宮の森

岩美川柳会

石谷美恵子報

なにくそと毎日言つて寝てしまふ

触れないで置くのも思いやりだろう

仏壇に住んでる家族忘れまい

なにくそと大根脚で駆け抜ける

触つたら怒ると顔に書いてある

その先に触れると怖いことになる

三月は机カバンを売りまくる

花つけた旬の荳荷を嫁がせる

あの人がわたしの旬に気がつかぬ

お父さん貴方本当に家族なの

定子

清吉

仲子

彰

信夫

幸

明朗

安男

八重子

恵美子

ふさ

寿

島子

まさ子

昭子

忠良

裕子

陸子

芳光

一京

季芳

重忠

一瑞

和歌子

あの笑い何の事かと首傾げ

なにくそと吹雪に挑む輩となる

頬かむりしている人のお父さん

何くそと貧乏神を追い払う

今が旬我が家適齡二人いる

コッソコッソ叩いた胸は麻酔骨

カルシウム足りぬか触れただけで切れ

十二月鳥取松葉がにの旬

握手した笑顔に嘘は書いてない

鉛筆が持てる間は旬である

オンコロロ拝む家族でいつも春

耳打ちへにんまり笑顔洩れてくる

味気ないトマトが旬を狂わせる

何くその意地が育たぬ血の流れ

旬過ぎた顔にクリームなど効かぬ

なにくそとスルメは意地で反り返る

地球上に旬という字がきこえうた

旬旬とさわいで百円市へ行く

やさしさに触れて血潮があつくなる

無理に笑うと悲しい顔になつてくる

川柳藤井寺

高田美代子報

意地ばかり張っているけど根はやさし

意地を張り鬼は笑いをこらえてる

恋人に意地悪されてまた会えぬ

泣かへんよボクも男だ泣くもんか

任せとけ胸を叩いた父の意地

聞かせたい意地をはつてる電話口

子供にも身丈にあつた意地があり

一夫

和枝

螢

圭一郎

雅女

蟹郎

たぬ

はるお

かつみ

完司

きみ子

孝男

静生

節子

喬水

公乃

山節子

希久代

孝美

美恵子

春蘭

瑠美子

真一

美代子

鐘造

敦子

かつみ

何くそが奥歯に苦労かけている

親譲り切ないほどの意地つ張り

淋しいと書いてないのも老母の意地

意地悪をされたら倍にして返す

根掘り葉掘り税務署に突つかれる

掘つて掘つて炭坑節の夢が消え

抜け道に掘る真似をする地鎮祭

神妙に掘る真似をする地鎮祭

根掘り葉掘り味方の顔で聞いている

別れるがくちぐせの妻家に居る

口癖はヨイショおおきにああしんど

口ぐせも母に似てきた茜雲

口癖は一つ覚えの歌ばかり

口ぐせの勿体ない子が真似る

あれそれで通じています共白髪

おきにおおきにと百歳の笑顔

迷惑はかけぬと老母の長い坂

死にたいをくちぐせにして医者通い

口ぐせを聞かない朝の忘れ物

口ぐせが出てくる頃は酔っている

不満たらたら神も仏も手を離す

口ぐせが出て姫様の里が知れ

面影をしのぶ写真が若すぎる

翠洋会

穴吹 尚士報

腕つぷし強い男のやさしい目

屋台骨支えた腕に自負がある

すんなりとゆくはずがない買った馬

五十年添うてすんなりいかぬ事

六子

桂子

扶美代

喜代子

一知

悦子

龍一

志洋

栄一

耕策

登志子

昭子

雅枝

井竿

恵勇

みつこ

アキ

史郎

婦美枝

映三子

和樹

一筒

政代

春

富子

孝一

東雲

進歩する医療すんなり死ねません
たわいなく母の芝居に乗せられる
夢芝居うつりさせて笑わせて
役者にも負けぬ化粧で芝居観る
芝居せず真正面から切り出そう
忘れたと芝居上手な姑と住む
芝居とは分かっているから不憫
見栄張った芝居しては出る涙
子の部屋はまるで芝居の楽屋裏
国宝が頭を下けている高座
収獲の疲れを癒す村芝居
買えぬ子は追い払われた紙芝居
みかんむきながら二の矢を考える
神様に借りがあるほど長く生き
嫁姑お互い多忙で悪なし
DNAだったなら無下に叱れない
戦中に鍛えたおかげ今元氣
釣れてよし釣れなくてよし秋日和
菊香のぼりはなや中村座
六十年かかりわかつたことがある
法律の但し書か見える穴
拾て来た仔犬にシヨパン聞かせてる
どう生きるかで艶が増す人間味
踏み出した限りは引けぬ意地がある

長 柳 会

加 島 由一報

日の出 蛙 叔子 昭 伽 羅 絹 子 正 坊 さと美 志 華 子 真理子 久 峰 尚 士 千 梢 蕉 子 恭 昌 澄 子 舞 夢 正 雄 会 美 桃 花 理 恵 石 舟 照 子

されるものも嫌だリストラは
気まぐれな蝶でひらひら落ち着かず
ひらひらとそよ吹く風や秋桜

千太郎 由一

謀られて欠席したら除名され
ひらひらと落ちる枯葉に母想う
ひらひらと札束が舞い拾う夢
オブションが懐計るバス旅行
ひらひらと旗がひらめく誕生日
歳の数聞けば内緒と肩すくめ
竜田川もみじひらひら錦織る
ひらひらと散る落葉にもあつた春
ひらひらのブラウスステートしたくなる
ストレスを何処に捨てよか迷い道
ひらひらと妻が天女になった夢
ひらひらの明細だけの給料日
富士山頂諭吉ひらひら飛ばす夢
ひらひらとお札飛び出す年金日
秋ですな体重計が笑いだす
はかりごとあるらし夫上機嫌
木枯らしの街で舞つて離職票
頃合を計り切り出すプロポーズ
計り売りの頃は客とのい会話
遅咲きの花ひらひらと人を恋う
人情は尺貫法で計りたい
生かされて計りしれない恩を享け
計るほど闇は深さを増してゆく

川柳さんだ

北 野

初め吠え後は眠れる虎になり
人の句を読んで目の前開かれる
一切を呑んで貰おう墓洗う
口答え娘がそっくり受けついで

武男 たいし 輝二 敬二 輝治 良男 ひろし 英美 芳野 マサ 正一 正美 直樹 和代 潤子 けい子 富美子 三和子 正子 和子 幸雄 靖子 一 慧

歳子 真由子 敦子 サクラ

哲男報

定年後葬儀の度に会う上司
亡き父も母を見ている茜雲
もみじしたつた一本の花ミズキ
木枯しの梢に頑張る柿のヘタ
秋空にもみじ色つき冬近し
来客を口実に飲むウイスキー
満足に五体育つて口答え
信じるか金は天下の回りもの
いいなりになってその場を丸くする
口止めをされた事はどしやべりたい
握り飯山の影に染められる

かわはら川柳会

上田 俊路報

駅の中出あい別れの夢ドラマ
汽車好きの孫にせがまれ駅めぐり
駅弁で旅の思い出よみがえる
孫送りさみじさだけが残る駅
子旗波駅は涙を覚えてる
雨となり午後は楽しい農休み
午後五時のチャイムと粉う焼芋屋
午後の陽もやわらぎはすむ立ち話
明日の午後帰る息子に思いはせ
義理果たし見上げる午後の空の蒼

菊子 ちあき 久恵 正行 雅司 朋月 藤朗 哲男 千代 章子 正和 登生 一 薫 かず恵 寿子 道子 悦子 泰良 余吏子 俊路

第22回横浜川柳作家賞

課題と選者 自由吟 関水華・和泉あかり・瀬戸
一石 広い 鈴木柳太郎・江澤多香子・二宮茂男
2月10日締切 4月29日発表
業著大用紙に課題別に2句連記 千円
〒240 横浜保土ヶ谷区坂本町100-1 506 藤原和美宛

献 壽

平成 15 年

川柳塔鹿野みか月

第17回国民文化祭とっとり'02文芸祭川柳大会には全国から皆様の温かいご支援を賜りました。大盛會に感謝です。

本年は第23回“みか月”記念大会を開催する年に当たります。旧に倍して皆さんのご支援こころよりお待ち申しております。

顧問		相談役		副会長		会長	
奥谷	太田	大角	大角	岩崎	乾	石尾	小倉
彩子	幸枝	正道	幸代	みさ江	喜与志	かつ乃	利男
土橋	徳岡	津村	田村	谷口	田中	竹森	高原
睦子	本丸	八重子	きみ子	百合子	きみゑ	富久江	かおる
ほか会員一同	若林	吉田	吉田	横山	山根	山根	山口
	みどり	弘子	孔美子	房子	八重	茂	実満
							久枝
							福西
							茶子
							原田
							菊乃
							西川
							和子
							永原
							奈津子
							中原
							みさ子
							汲香
							土橋
							はるお
							鹿兒島
							節子
							垣尾
							宣子
							加藤
							公子
							加藤
							永子
							国森
							武子
							久野
							野草
							黒田
							くに子
							児嶋
							保子
							高原
							かおる
							竹森
							富久江
							田中
							きみゑ
							谷口
							百合子
							田村
							きみ子
							津村
							八重子
							徳岡
							本丸
							土橋
							睦子

※事務局：〒689-0405 鳥取県・鹿野町鹿野1279 中原 諷 人 方
電話 & FAX (0857) 84-2100

新年おめでとうございます

堺 川 柳 会

高志齋小源神河河梶柿大太榎榎稻泉河
木田藤西田原盛内本花谷田本本川谷内
世紀千さ小八龍月哲紀篤扶舞日の恵喜天
子代くら雪代文三子平女子代夢の出勇子笑

小小荻西西西中中中中中中中徳寺寺津高
島島野村田内村野澤崎川井山田井守田
安輝像り柳朋忠健伽深アみつ甚東な美
恵治山つえ宏子月敬吾羅雪楓キこ一雲ぎ代子

和渡米山矢八十矢村宮松藤藤樋長長
田辺澤本野田倉上本尾田井口川谷川
つさ俣半洞五玄かり和泰一二冬春
づだ子錢梓庵月也ん香子二三虹蘭彰
やを子錢梓庵月也ん香子二三虹蘭彰

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

北野哲男	川島諷云児	河井庸佑	亀岡哲子	門谷たず子	小倉藍	小熊江美	奥田みつ子	井上松煙	浅野房子	秋元てる	阿萬萬的	黒川紫香
富山ルイ子	都倉求芽	坪井孝一	田辺鹿太	田中正坊	住谷石舟	坂上高栄	小池しげお	黒田能子	久保田千代	木村貴代子	菊池トミエ	神原文
山本義子	山崎君子	松下比呂志	牧渕富喜子	古川奮水	藤村メ女	春城武庫坊	春城年代	長谷川春蘭	西田柳宏子	西口いわゑ	長浜澄子	

明けましておめでとうございます

川柳塔わかやま吟社

塩谷	澤田	坂部	坂口	小山	乗原	柿花	柏原	小倉	野村	顧問	川上	副主幹	牛尾	主幹
佐代子	和重	紀久子	公子	太一	道夫	紀美女	優子	アサ	太茂津		大輪		緑良	

中村	中島	中後	中井	堂上	富上	天満	寺田	垂井	玉井	谷口	谷	田村	田中	杉山	芝
君枝	正博	清史	栄美子	泰子	光代	三千代	裕美	千寿子	豊太	信子	和	あき子	輝子	精子	あつむ

和	横	山	宮	宮	宮	松	松	堀	堀	細	福	福	橋
田	垣	田	本	園	口	原	尾	端		川	本	田	爪
田	良	忠	高	三喜夫	射月芳	克子	寿子	和香	三男	富美子	稚代	英子	佐一
会員一同	良一翁		夫										

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

あけましておめでとうございます

城北川柳会

会長 吐田公一

岸	川	川	神	叶	鍛	大	太	大	大	浦	石	安
野	端	久保	夏磯	岡	原	橋	田	崎	内	田	塚	達
あ	一	睦	典	史	千	柳	とし	昭	朝	綏	順	は
や	歩	子	子	風	里	一	子	一郎	子	子	三	じめ
め												

都	寺	津	玉	高	高	鈴	鈴	坂	小	小	小	喜
倉	井	村	置	橋	杉	木	木	上	糸	泉	池	多
求	東	志	重	一	千	政	ト	高	昭	ひ	し	佐
芽	雲	華	人	枝	歩	子	ヨ	栄	子	さ	げ	津
		子					子			乃	お	乃

吐	吉	丸	松	松	町	本	坊	板	長	橋	野	中
田	岡	岡	本	岡	田	間	農	東	谷	村	村	田
公		静	た	久	達	満	柳	倫	川	容	美	あ
一	修	枝	だし	留	子	津	弘	子	春	子	代	い
				美		子			蘭		子	子

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山 正 福 沖 三 古 藤 古 石 岡 森 岩 時 小
内 畑 島 浜 宅 田 解 谷 原 本 井 本 広 島
ほ 房 半 万 正 不 太 静 節 淑 清 菁 笑 一 蘭
か 子 覚 年 宏 朽 虚 風 夫 子 水 居 子 路 幸
会 員 一 同

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

木	木	門	鹿	大	猪	石	池	足	青
村	村	脇	島	塚	森	中	尾	立	戸
春	富	晶		恵	スミエ	時	保	由	田
枝	美	子	繭	子		子	子	美	鶴
中	中	田	鷺	白	塩	澤	佐々	さえ	小
野	井	中	見	根	谷	田	野	き	村
弘	ゆ	亜	正	ふ	八	千	紫	や	て
子	き	弥	子	み	重	春	泉	え	い
					子				子
		八	森	光	政	二	福	林	野
		木	脇	井	岡	岡	代		坂
		千		玲	日	初	天	瑞	な
		代	麗	子	枝	枝	雀	枝	み

新春を迎えおめでとうございます

香川県大川郡白鳥町白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 木村 あきら

甚古 正雪

副会長 成重 放任

向山 治延

会計 川崎 ひかり

山崎 はつ恵

同人 工藤 吟笑

松村 輝夫

池内 かおり

赤沢 貞月

神保 坊太郎

中塚 寿々女

滝井 勝

原 賢

会員 角尾 いさむ

伊勢 八重子

辻上 よしみ

堤 くに子

謹賀新年

平成十五年 元旦

川柳塔 唐津支部

連絡先……仁部 四郎

電話……〇九五五―七三―二三六二

市丸 晴翠 宗 水笑

井上 勝視 田口 虹汀

岩崎 實 仁部 四郎

久保 正剣 樋口 輝夫

坂本 兵八郎 山口 高明

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ 方

TEL 0853—22—1068

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

谷 田 高 住 清 児 古 奥 岡 太 大 榎 榎 井 居 石 穴 安 橘
口 中 杉 谷 水 玉 今 田 本 田 川 本 本 上 谷 原 吹 土 高
義 正 千 石 絹 蕉 子 久 桃 舞 日 照 真 靖 尚 理 薫
坊 歩 舟 子 峰 花 夢 出 子 子 巳 士 恵 風

黒 梅 渡 渡 渡 米 山 安 藤 長 西 中 長 中 天 寺 坪 津
田 田 辺 部 さ 田 本 永 井 谷 出 村 浜 澤 正 井 井 村
真 宣 富 さ 恭 希 正 会 楓 叡 澄 伽 千 東 孝 志
砂 司 子 美 昌 久 春 美 楽 子 子 羅 梢 雲 一 華
子

未成年も川柳を楽しく

東大阪エイシス

古 手 川	熊 代	国 見	吉 川	神 原	川 久 保	笠 井	岡 本	内 海	伊 藤	井 尻	生 嶋	河 内
	菜	蘭	寿	ま さ と	睦	欣		綾	博		ま す み	天
光	月	香	美		子	子	勲	乃	仁	民		笑
	山	安	松	松	堀	星	西	中	飛	玉	鈴	坂
	本	永	井	井		野	川	岡	永	島	木	本
	宏		敏	秀	富	き ら り	更		ふ り こ	ち ひ ろ	ト ヨ 子	夏
	至	春	子	夫	重		紗	妙				代

小	小	斎	源	河	荻	大	榎	榎	稻	泉
島	島	藤	田	盛	野	谷	本	本	川	谷
百	一	さ	八	龍	像	篤	舞	日	惠	喜
恵	輝	く	千	三	山	子	夢	の	勇	代
			代	三				出		子
和	矢	村	宮	西	中	中	中	富	津	高
田	野	上	本	内	野	村	澤	山	守	木
つ		玄	か	朋	健	忠	伽	ル	な	世
づ	梓	也	り	月	吾	敬	羅	イ	ぎ	紀
や			ん					子	さ	子

エイシスの堺で思い切り笑お
講師 河内 天笑

謹賀新年

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

ほか 会員一同

事務局

鳥取市二階町三二〇二二

植田 一京方

月例会 毎月第四日曜日 十三時

JR鳥取駅構内(シャミネ会議室)

あけましておめでとうございます

富柳会

会長 池

森子

藤岡 花梢

山原 昭水

前田 登子

中井 アキ

田中 勇

西村 夕子

田中 文子

鎌田 たかし

三浦 一夫

吉田 亮幹

中崎 深雪

大橋 鐘造

稲川 恵勇

梶原 キミエ

田中 誠

あけまして

おめでとうございます

川柳クラブ

わたの花

川崎 友甫

砂田 八寿子

平川 幸枝

與田 明

松葉 君江

坂本 奈良司

初山 隆盛

藤本 一道

生嶋 ますみ

太田 恭一

吉村 一風

江波 正純

村上 ミツ子

増田 道子

神原 まさと

馬場 宏

中島 春江

杉本 晴美

山本 宏至

脇 俊子

八倉 知佐子

本田 たえ子

乾 美代子

赤木 妙子

篠原 いづみ

西川 義明

井尻 民

渡辺 順生

あけましておめでとうございます

かわはら川柳会

〒680-1241 鳥取県八頭郡河原町長瀬636 上田俊路方

山	渡	山	山	漆	漆	西	國	谷	岩	前	谷	上
尾	辺	田	尾	原	原	田	本	口	田	田	口	田
かず	道	雅	一	登	余	静	悦	寿	輪		泰	俊
恵	子	予	薫	生	吏	子	子	子	朗	聰	良	路

あけましておめでとうございます

京都塔の会

会 員 一 同

5 月 吟行句会は第50回を迎えます

あけましておめでとうございます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

明けましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹	副主幹	相談役	顧問	理事	監事	会計
齊藤 晶	小寺 花峯	工藤 甲吉	森中恵美子	波多野五楽庵	岩渕 黙人	櫻庭 順風
			福士 慕情	佐治千加子	浅田 隆樹	肥後和香子
			田中 叶	相馬 銀波	小枝ふさゑ	相馬 一花
						ほか同人一同

明けましておめでとうございます

打 吹 川 柳 会

会長 牧野芳光・会員一同

事務局 〒682-0924 倉吉市河原町1879

高 多 博 丈 方

電話 0858-22-6128

謹賀新年

尼崎川柳協会加盟

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

一月例会のみ一月十日

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尾崎市尾浜二丁目五十八

尾浜公民館

(阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④尾浜二丁目下車)

両会共各地旬会案内に

掲載しています

謹賀新年 2003

今年もどうぞよろしくお願い申し上げます

川柳塔おおとり

会長 小林 由多香
他会員一同

〒680-0805 鳥取市相生町 1-110
TEL. 0857-23-1170

謹んで新年のご祝詞を申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

例会 毎月第三木曜日 正午 高槻現代劇場306号室

新年おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

吉田	山本	山崎	春城	春城	西口	長浜	那賀島	坪井	久保	木村	菊池	亀岡	小倉	奥田	岩倉	飯西	秋元	橘高
笑	義	君	年	武庫坊	いわゑ	澄子	雅子	孝一	まさお	貴代子	トミエ	哲子	藍子	みつ子	キク子	ミサヲ	てる	薫風
女子	子	子	代															

謹賀新年

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘

会員 一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春木圭一郎

TEL 0857-24-2834

明けましておめでとうございます

もくせい川柳会

山山宮三藤野中中辻玉田進源黒岸唐榎粕岡江岩阿安橘
門門田宅井島川内川置中藤田川田住谷屋本見崎萬藤高
タ幸禄つえ則満千久慶英正千啓紫知郁都吉見玲萬寿薫
ミ夫骨子彦巳志郎子子坊子生香子実子子郎清子的子風

毎月第3月曜日に定例会を開いております

謹 賀 新 年

大阪川柳人クラブ

会 長 磯 野 いさむ

副会長 橘 高 薫 風

幹事長 川 島 諷云児

賀 川 柳 藤 井 寺 正

伊	俣	増	吉	若	福	西	長	中	大	坂	太	川	鴨	中	高
他	藤	野	井	田	松	村	谷	井	橋	本	田	端	谷	島	田
一	ア	登	喜	雅	悦	栄	春	ア	鐘	和	扶	六	瑠	志	美
同	ヤ	志	代	枝	子	一	蘭	キ	造	樹	美	点	美	洋	代
	子	子	子								代		子		子

賀 正

サークル 檸 檬

吉	山	山	山	前	西	西	西	長	鶴	田	嵯	久	片	奥	石	浅	橘
田	本	口	本		村	出	口	浜	田	中	峨	保	岡	田	原	野	高
あ	義	光	希	た	哲	楓	い	澄	遠	正	根	千	智	み	靖	房	薫
ず	子	久	久	も	夫	楽	ゑ	子	野	坊	保	代	恵	つ	巳	子	風
き			子	つ							子		子	子			

謹賀新年

川柳おたまじゃくし

赤塚 助川 土橋 堤岡 中岡 森林 森元 山本 雪本
楽天 和美 枝代 代子 力子 ふみよ 蛙城 珠子

〒596
0076

岸和田市野田町一六二

土橋方

TEL (〇七二四) 三八—三三〇八

あけましておめでとうございます

川柳若葉の会

橋高 黒田 辻川 長谷川 古川 宮本 宮崎 山内 吉田 宮崎 中井 久保田
薫風 能子 慶子 会美 喜美子 欣史子 シマ子 香住 あずき 弘直 アキ 千代

明けて

おめでとうございます

はびきの市民川柳会

安芸田 榎本 酒井 塩満 徳山 仲谷 西村 濱口 三好 永田 森下 山本
泰子 吐来 一壺 敏 みつこ 真一 りつえ フジ 専平 章司 一知 他
一たけし 同

謹賀新年

河内長野

長柳会

加島由一

水谷正子

村上直樹

山岡富美子

新年おめでとうございます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 な ら

宮口 笛生

中原比呂志

米田 恭昌

坊農 柳弘

大内 朝子

吉川 寿美

宮西 弥生

清水 絹子

居谷 真理子

渡辺 富子

会員一同

あけましておめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239—23

桜井千秀

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会員一同

〒689-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504

TEL 0857—72—1388

明けてまして

おめでとう

ございます

熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

春 賀

川柳 さ さ や ま 一 同

謹賀新年

岸和田川柳会

岩佐ダン吉 原 さよ子

島崎富志子 田口 穰一

田中 文時 寺田 甚一

井伊 東吉 宮地 一脩

不破 仁緑 仲谷 弘子

長谷川呂万 善野 盛之

堂免 路子 加藤 基

原 苑子 宮野みつ江

土橋 房枝 藪野ケイ子

小島 笑風 坂口 英雄

池田 岩夫 芳地 狸村

あけましておめでとうございます

南 大 阪 川 柳 会

会 員 一 同

賀春

川柳展望社

〒567
-0009

茨木市山手台四―六―三―一〇―一
TEL〇七―一六四九―五二三六
FAX〇七―一六四九―二三三四

板
尾
岳
人

明けましておめでとうございます

くろぼこ川柳会

平成15年 元 旦

会長 鈴木 公 弘

会 員 一 同

新年おめでとうございます

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

会 長 山 本 三 郎

事務局 高 田 博 泉

高野山合祀法要

於・高野山大霊園

川柳塔合祀祭が行われたのは、高野山に例年より二週間も早い初雪の降った十一月九日（土）である。

ケーブルが霊山近くにさしかかると急に雪景色に変わる。バスは積雪をかき分け進む。裸木が絵に描いたように雪化粧。まつ赤な紅葉が白い雪をかぶり、なんとも言えぬ美しさにうっとりしながらバスに揺られる。寒いことも足元の悪さもすっかり忘れて、いい日に出会ったことを喜び合いながら霊園に着く。

このような天候のため、川柳塔碑はお参りと記念撮影だけにして、霊園二階の本堂で合祀法要を営むことになった。

新しく合祀されるのは十一名で、池田寿美子 椎江清芳 藤井計光 奥山美智子 菱田満秋 板垣草丘 里小路 小林周信 正本水客 橋本多哥由 麻生アト氏のお名前が読みあげられ、高井園長僧のおごそかな読経の中、ご遺族と参列者が焼香を行い静かなひとときを過ごす。

その後は、奥の院へ参拝する人、ストープで暖をとる人……自由行動となり、紅葉と雪の高野山を楽しんだ。

参加者25名中、電車利用の18名は雪の霊山に名残りを惜しみながら、15時38分ケーブルに乗る。

（たもつ記）



ご遺族と参列者の皆さん

新年おめでとうございます

NHK川柳教室

橘高 薫風	志田 千代	大崎 侑子
北畑 金治	野下 之男	野島 庄三郎
藤井 正雄	井上 松煙	安達 忠央
黒田 能子	緒方 美津子	岩屋 美明
指宿 千枝子	井上 信子	福田 満州
海老池 洋	三木 愛子	南原 正和
三品 征子	谷 鈴子	山田 耕治
鴨谷 瑠美子	古今堂 蕉子	莊司 弘之
前 たもつ	矢倉 五月	池上 清治
田中 節子	江見 見清	久保田 千代

謹 賀 新 年

川 柳 塔 社

名譽主幹

主 幹

理 事 長

副 主 幹

副理事長

常任理事

橘 高 薫 風

河 内 天 笑

板 尾 岳 人

奥 田 みつ子

波多野 五楽庵

小 島 蘭 幸

前 たもつ

大 内 朝 子

河 内 月 子

高 田 美代子

長 浜 澄 子

坊 農 柳 弘

山 本 希久子

米 田 恭 昌

仁 部 四 郎

西 出 楓 楽

籠 島 恵 子

木 本 朱 夏 子

鶴 田 遠 野

藤 田 泰 子

松 原 寿 子

山 本 義 子

川柳塔社常任理事会

柳界展望

第74回 大阪川柳の会

日時—2月5日(水) 17時開場
会場—サンケイビル本館3F322号室
題と選者—△とほける・浅難美智子
△汁・久保田半蔵門△音・西口いわゑ
△新しい・磯野いさむ
各題2句 席題なし 会費—千円 18時締切

★第25回神戸川柳大会事前応募作品の表彰式が、11月23日兵庫県民会館で行われた。本社関係受賞者は次のとおり。

〈特選〉

生き方を問うには石が丸過ぎる 牧淵富喜子

〈佳作〉

やさしさに枯野の石が呼吸する 奥田みつ子

★和歌山芸まつりの、本社受賞者は次のとおり。

〈青年会議所理事長賞〉

磨かねば錆びる命を持ち歩く 吉村さち子

〈和歌山新報賞〉

叱られることも勲章だと思う 三宅 保州

〈文化協会賞〉

〔事前投句〕

「第14回兵庫まつり」ふれあいの祭典川柳祭は、12月1日伊丹アイフォニックホールで開催された。

■京都塔の会では「千社札・其の六 吟行編」を出版。単行本版88頁と綴じ。

■黒川紫香相談役は、尼崎芸術文化協会発行の「芸文2月号」P44下段19行目、



神祇満つ木漏日の散る石畳 たけし
(社)日本川柳協会名誉会長仲川たけし氏の句碑が、功績を讃えるため有志により11月30日、氏の氏土神である松山市雄郡神社境内に建立された。除幕式には200名の参加があり、薫風名誉主幹も出席。

あまがさき(21号)に10句を発表。

▽御芳志御礼△

●里エミ子さん(故里小路夫人)から、高野山合祀お供えとして御芳志

●鴨谷瑠美子さん(理事)から御芳志

▼訂正とお詫び▲

11月号P45下段24行目、名刺↓名詞 P66上段20行目、「抜擢の辞令を母はもち歩き」を本人申し出に

より削除

次回常任理事会 1月9日(木) 正午から

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	14日(火)午後1時半から 春・干支・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木)正午から 繋ぐ・左遷地・おだやか・翼 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川 柳 会 梨 花	17日(金)まで 初日・赤・真・ピカソ・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 坂田和歌子
城 北 川 柳 会	18日(土)午後1時から 年輪・得る・ニュー・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩10分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から 縫う・値上げ・逃がす・配達	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日)正午から 挑む・料理・宝	寝屋川市民会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 作戦・屋根・肌・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から スマイル・養う・英雄・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	22日(水)午後6時から 淡雪・医・うず・鋭利	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前10時から 交・閉じる・拳骨・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から 眼鏡・広い・トンネル・傷	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日)午後1時から 合図・スト・のんびり・ 「演ずる」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日)午後1時から 初・ストーリー・今年こそ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	27日(月)午後1時から 元・通す・方角	ハートピア京都 地下鉄烏丸線丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
倉 吉 川 柳 会	4 日(土)午後 1 時から 紫・合併・調べる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐津支部	6 日(月)午後 1 時半から 短・段・次	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼 崎 いくしま	10日(金)午後 1 時から 箸・スタート・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 な ら	10日(金)午後 1 時から 憧れ・帯・円満	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
富 柳 会	11日(土) 新 春 句 会 晴れ・デザイン・自由吟	11時近鉄富田林駅南口集合・お問合わせは 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
打 吹 川 柳 会	11日(土)午後 1 時から 天女・ぼちぼち・鮮やか	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後 1 時半から プラン・若水・光る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島淞丘
川 柳 塔 みちのく	11日(土)午後 4 時から 変る・口止め・本	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
堺川柳会	12日(日)午後 1 時から 相撲(共選)・餅 ねむろ(折り句)	堺総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	12日(日)午後 1 時から 盛・仰ぐ・気迫・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後 1 時から 甘酒・トリック・やっぱり 「ようだ・ごとし(助動詞、いずれでも可)」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 塔 みぞくち	13日(月)午前10時半から 羊・正月一切・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後 1 時から 若い・方針・きっぱり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後 1 時から 扉・まめ・ああ	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎

編集後記

☆今年も「川柳塔」編集部をよろしく願います。

☆11月某日、知り合いからお誘いを受け「木津川計先生を囲む集い」に出席した。

先生の13冊目の著書「優しさとしての文化」の出版を祝う会で総勢24名「含羞の人」である先生は、晴れがましい事がお嫌いで、小規模な会となった。お人柄に惚れた様々な分野の人達の集まりで、中には自称「先生の追っかけ」もある。

☆薫風名譽主幹とも親交がある先生は、平成13年9月の叙勲記念川柳大会で「お話」いただく予定だった。ところがご病気のため叶わず、大変残念に思っていた。

☆現在「上方芸能」(季刊)代表、立命館大学教授で、川柳の総合雑誌に毎月「人

生としての川柳」を連載しておられる。その深く広い見識に裏付けされた川柳観には、ただただ感服の溜息するばかりである。

☆すっかり健康を取戻されたあこがれの先生は、腰の低い温厚な人格者で、話題豊富、そのお話振りが面白いなど、たちまち虜になってしまった。ご馳走とお酒の美味しさに、「上方芸能」に川柳を載せてもらうようお願いをした次第である。

☆因みに、会の幹事さんは上方舞小川流家元の小川照一(女性)お師匠はん。聞けば昔、花柳流で活躍されていた頃、中島生々庵御夫婦、麻生霞乃先生を教えておられたという奇遇。

☆計先生はじめ様々の分野の人と知り合え、含羞のあるお話を聞き、地球が一回り大きくなったように感じた集いであった。(ふ)

ひとこと

わては柳人春団治

十八歳で咄家になり、いろいろあつて一応二十六歳で初代春団治になりました。

川柳的におもしろいもん、古典もんより私が出るだけで大爆笑がわき上がりました。ちよつと派手でもうもてました。

それがあとあと芝居になって、長谷川幸延の松竹で天外、北条秀司の新国劇で辰巳が演じ、その他

ドラマ・映画・歌になり、色男やなんてあない大層になって照れ臭い程有名になりました。

幸延さんは川柳で有名です。どだい落語は古典のおちから、新しいネタまで川柳の世界です。

今は孫弟子の五郎がわての分まで頑張つてやってくれます。

今の三代目にも古いネタ大事にしたいと遠くで言ってます。今は皆はん川柳お番です。

坪井孝一

○新年おめでとうございます。山ほどの雑用を抱えて年末を過ごし、ほつとして新年を迎えるのだが……

○新年おめでとうございます。年統きの凶年に当たり、諸事思うに任せず、心労多く何事も控え目が良いと曆に論されている。

○帰省家族や内孫と一緒におせちを囲むお正月も又、主婦にとって気の休まらない年中行事の一つである。

○勿論占いをそのまま信じろわけではないが、気力、体力共に老化を意識させられる昨今、とにかく謙虚な

○今年の干支はひつじ。運勢占いによれば、非常にあわただしい年、世の中が大きく動き出す気配ありと言

○羊と言え、もう十年以上も前になるが、オセアニア地方の旅で、観光バスは

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（3月号）

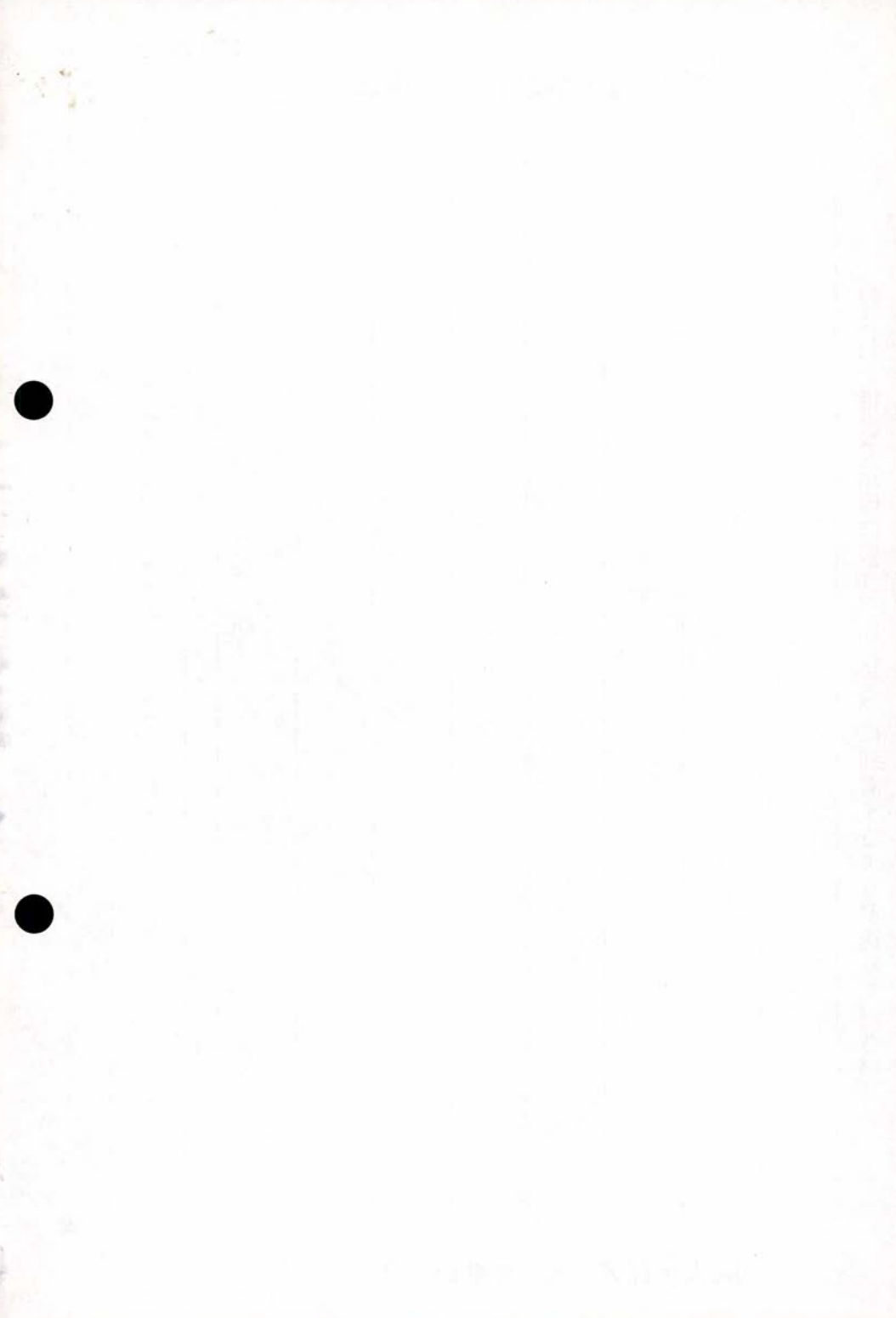
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔(8句) 河内天笑 選
水煙抄(8句) 奥田みつ子 選
愛染帖(3句) 波多野五楽庵 選
茴香の花(3句) 政岡日枝子 選
吟題(3句) 止める 野下之男 選
極める 羽津川公乃 選
除く 細川稚代 選
初歩教室「座る」(3句) 三宅保州担当

3月号発表(1月15日締切)

4月号
課題吟「迷う」「ジョーク」
「噂」
初歩教室「もっと」

本社1月句会

とき 1月7日(火) 午後1時・2時半締切
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
開会時間変更にご注意下さい。
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
兼題 「テロ」 平松 かつみ 選
「鍵」 志田 千代 選
「大切」 西口 いわゑ 選
「思ふ」 前 ともつ 選
「三が日」 河内 天笑 選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社2月句会 2月7日(金)

兼題 「ちぐはぐ」「酔う」「ふわふわ」
「におう」「秘める」

夜市川柳募集

第8回「出る」 西出楓 楽選
ハガキに3句 1月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇三年(平成十五年)一月一日発行

編集 河内 権治

発行人 美研アト

印刷所 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)6772-1441

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

第4回 文学ルート川柳募集

文学ルート (松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

【募集要項】

*募集作品

文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

*宿題

松江市『日本海』『小泉八雲』 尾道市『映画』『絵』 今治市『水軍』『サイクリング』
松山市『人力車』『湯の町』 高知市『桂浜』『尾長鶏』

*応募方法

- 専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)。
- 応募作品には『宿題』及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。
- 柳号(ペンネーム)使用の場合は、本名も書き添えてください。
- 入賞作品の著作権は主催者に帰属します。(主催者の実施する事業に使用する場合があります。)応募された作品は、返却しません。

*応募資格 年齢、職業、性別、国籍は問いません。『宿題』1題につき、一人2句以内とします。

*応募期間 平成14年11月9日(土)から平成15年3月31日(月)(当日消印有効)

*出品料 無料

*選考 平成15年5・6月

*発表 平成15年7月、入賞者に通知します。(表彰式は、平成15年9月を予定しています。)

*選考委員

(第二次選考) 仲川たけし(社団法人 全日本川柳協会名誉会長)

吉岡 龍城(社団法人 全日本川柳協会会長)

橘高 薫風(社団法人 全日本川柳協会常務理事)

(第一次選考) 昌子 萬吉(松江市)・八島 白龍(尾道市)・越智 青園(今治市)・

丹下美津子(松山市)・竹村 温夫(高知市)

*賞 大賞 1点

奨励賞 5点

佳作賞 若干(賞については、5市予算の承認によって確定されます。)

*主催 文学ルート形成推進協議会 *後援 社団法人 全日本川柳協会

*応募先・お問い合わせ(宿題に応じてご応募ください。応募先にご注意ください。)

(松江市)『日本海』『小泉八雲』 松江市産業振興部 観光文化課 TEL(0852)55-5293

〒690-8540 松江市末次町86 FAX(0852)55-5564

(尾道市)『映画』『絵』 尾道市産業文化振興部 観光文化課 TEL(0848)25-7366

〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1 FAX(0848)25-7293

(今治市)『水軍』『サイクリング』 今治市教育委員会 文化振興課 TEL(0898)36-1608

〒794-8511 今治市別宮町一丁目4-1 FAX(0898)25-1700

(松山市)『人力車』『湯の町』 松山市企画財政部 国際文化振興課 TEL(089)948-6634

〒790-8571 松山市二番町四丁目7-2 FAX(089)943-9001

(高知市)『桂浜』『尾長鶏』 高知市教育委員会 生涯学習課 TEL(088)822-6394

〒780-0870 高知市本町四丁目3-30 FAX(088)823-1095

文学ルート形成推進協議会事務局 〒722-8501 尾道市久保一丁目15-1

尾道市産業文化振興部 観光文化課

TEL(0848)25-7366・FAX(0848)25-7293